文學士 塩井正男 著

文作法

東京 人文社藏版

はしがき

題して、韻文作法といふ。韻文の内容外形に存ずる根本の法則を説きて、此の道に入り立むずる士女の爲めに、こゝにたより行くべき枝折りとせむとするにあり。内容とは、其の文中にのぶる想ひ、表はす辭句、この内容外形の二者相よりて、韻文こゝに成る。其の間に、自から動かすべからざる根本の法則あり。必ず踏み知るべき大道あり。内容外形の組織、此の根本の法則に反き、此の大道にはづれては、美妙なる韻文の製作、つひに望みなきなり。

我が韻文作法、實に此の重大なる法則大道を説むとするなり。

自ら筆とりて、密におほけなき業に、戰々たるものなきにあらず。法を說く、必ず其の道の深奥を探り得たる者たらざるべからず。我つひに其の境の者にあらざればなり。然れども、作詩作文、我が實に深く愛するわざたり。我が朝夕の樂みとするところたり。たゞ愛するものたり、樂むところたり。自ら喜びて語らまほしきものなきにあらず。恐るるところは、淺才謬見、つひに其の法則大道に言ひ到らざるのみ。若し其の一半、其の一端、おぼろげの枝折りともなるを得ば、我が幸とするところたり。乞ふ讀者、妄を咎むる勿れ。淺薄を笑ふ勿れ。且つは高敎を、こそ仰ぐなれ。

明治三十六年十月

鹽井雨江

目次

第一編　總論　一——二

第一章　韻文とは如何なるものぞ　三——二〇

第二章　韻文の種類　二一——四〇

第二編　韻文の內容　四一——四二

第一章　詩想　四二——六〇

第二章　詩想の構成　六〇——九〇

第三章　詩想の養成　九〇——九四

第三編　韻文の外形　九五——九七

第一章　聲調

第二章　聲調と韻文の規律　九七―一二二
第三章　我が韻文の形式　一二三―一三一
第四編　詞の修飾法
第一章　用語　一三二―一四一
第二章　轉義辭樣の修飾法　一四一―二〇四

韻文作法

文學士　鹽井雨江

題して韻文作法といふ。韻文の內容外形に存ずる根本の法則を說きて、此の道に入り立たむずる士女の爲めにこゝにたより行くべき枝折りとせむとするにあり。內容とは、其の文中にのぶる想ひをいひ、外形とは、其の想ひを表はす辭句をいふ。のぶる想ひ、表はす辭句、この內容外形の二者、相よりて韻文こゝに成る。其の間に、自から動かすべからざる根本の法則あり。必ず踏み知るべき大道あり。內容外形の組織、此の根本の法則に反き、此の大道にはづれては、美妙なる韻文の製作、つひに望みなきなり。

我が韻文作法、實に此の重大なる法則大道を說かむとするなり。自から筆とりて、密におほけなき業に、戰々たるものなきにあらず。法を說く、必ず其の道の深奧を探り得たる者たらざるべからず。我つひに其の境の者にあらざればなり。

我が韻文作法の順序

然れども、作詩作文、我が實に深く愛するわざたり。我が朝夕の樂みとするところたり。たゝ愛するものたり、樂むところたり。自から喜びて語らまほしきものなきにあらず。恐るるところは、淺才謬見、つひに其の法則大道に言ひ到らざるのみ。若し其の一半、其の一端、おぼろげの枝折りともなるを得ば、我が幸とするところたり。乞ふ、讀者、妄を咎むる勿れ、淺薄を笑ふ勿れ。且つは高敎をこそ仰ぐなれ。

第一篇　總論

韻文とは、いかなるものぞ。これ、先づ韻文作法を說くにあたりて、先づ說明せざるべからざるものたり。其の物を見ざれば、其の形容は知る能はず。韻文の何物たるを見ざれば、其の內容外形の法則大道は知る能はざればなり。されば先づ此の總論に於いて、韻文の性質、種類、はた、韻文作法の目的價値を畧說して、さて、本文に入り、第二篇に內容の想につきての大道、第三篇に聲調及び外形の語形句法の大道、第四篇に詞の修飾法、第五に種々の注意といふ順序を追うて語らむとす。

韻文とは何ぞ

和歌發句俗謠の一例

第一章　韻文とは如何なるものぞ

○世の中は何にか常なる。あすか川、昨日の淵ぞ、今日は瀨になる

○古池や、蛙とびこむ水音。

○君と別れて、松原行けば、松の露やら、涙やら。

これ、人口に膾炙したる我が和歌發句俗謠の一例なり。これ等は、やがて、韻文と稱するものなり。やがて、韻文の中の一種なり。此の三首の韻文、一は、無常の世の中の想ひを、五七五七七の五句卅一言もて表はし、一は、閑寂の想ひを、五七五の三句十七言もて表はし、一は、惜しき袖を分ちての曉歸途上の想ひを、七七七五の四句廿六言もて表はしたり。此の三首の韻文、いかなる想ひを、いかなる辭句もてのべたるかを、なほ細に一考せられなば、韻文の何物たる一端は、讀者先づ心にうなづかるるところあるべし。さらば、韻文とは果していかなる物ぞ。其の見解、其の定義、東西の學者詩家にきくところ、一樣ならず。一々あげむは、いと煩はし。また、我が好まざるところたり。我が不才、かつ〳〵參考し得たる大家の說により、我が淺見、我れは直ちに大膽なる定義をこゝに先づ斷言してやまむとす。

韻文の定義

韻文とは、吾人の感情想像の眼より、吾人内外の自然の森羅万象を見て、吾人が美妙なる辭句の形式によりて、其の自然の万象の美妙をうつし出て、讀者の感情想像に訴へ、直接には、これに美感を起さしめ、美なる精神上の快樂を與へ、間接には、これに美化せしめて、社會人心が優美高尚の進歩に功献するものなり。

吾人の感情想像は韻文を製作する原動力たり

一言にいへば、我が韻文の定義は、斯かり。言拙く、意明かならず。更にこれを詳說せずば、讀者其の解に苦しまるるならむ。

第一。感情想像の眼より見るとは如何。吾人が感情想像の、韻文の成る根本たるを言へるなり。吾人が感情想像の、韻文を製作する原動力たるを言へるなり。感情とは、喜怒哀樂愛憎など、すべて、吾人の心の、物に觸れて發する感動をいふ。想像とは、一事物を見聞するにあたりて、既に見聞したる事物を根據として、眼前の見聞以上を思考する精神の作用なり。

古歌につきて感情想像の一例

○北へ行く雁ぞ鳴くなる。伴れて來し數は足らでぞ歸へるべらなる。（古今集）

共に移り住みたる他郷に、間もなく良人は不歸の客となりて、獨り故郷へ志したる一婦人が、悲しき旅路に、歸雁の聲をきゝてよめる歌なり。此の韻文の材料となりし物は、唯だ鳴き行く歸雁の影なり。これを見聞きて、哀れに悲しく思ひたるは、やがて感情なり。而して、「伴れて來し數は足らでぞ歸へるべらなる」と思ひやりたるは、これ想像なり。

○網引きする舟の夜寒を、身にしめて、寢られぬ妻や、衣うつらむ。（八田知紀）

題は海邊擣衣にて、漁村の秋夜、夜更けて、擣衣の音をきゝてよめる心なり。材料となりたるは、漁村の深夜にきこえたる砧の音なり。これを聞きて、あはれにおぼえたるは、感情なり。さて、其の擣衣を、一漁夫の妻女の手業とし、寒風吹きさらす海上に漁する良人の、さぞや寒からむと思ひやりつゝ、ねられずしてかくは衣を擣つならむと思ひやりたるは、これ、やがて、想像なり。此の感情、此の想像ありて、はじめてこれ等の優美悲哀なる韻文は、製作せられしなり。吾人に、此の感情なくば、韻文は存せざるなり。吾人に此の想像なくば、美なる韻文は存せざるなり。心理學にきけば、吾人が精神の活動力には、なほ智力あり、理性あり。されど、此の智力理性は、

韻文と科學

詩經の風謠が上代の歌謠

俊頼朝臣の逸話

美なる韻文を製作するの力にあらざるなり。若し深き智力理性の人にして、美妙なる韻文を作るを得ば、そは直接に此の力性によりたるにあらず、これに伴ふ深遠高尚なる感情想像によりて成りたるのみ。智識理性の眼より、吾人内外の自然の現象を觀察する時は、こゝに諸般の科學は成立すべし。然れども、韻文はつひに成るべからざるなり。

唯だ感情想像にあり。故に、智力乏しく理性明かならざる所謂未開の時代にも、韻文の製作品は、はやく吾人が祖先の社會を飾りぬ。詩經の風謠は、他の漢文學の花に先立ちて、はやく中華の人に愛玩せられたるにあらずや。我が歌謠は亦た國字を作るを知らざりし祖先の腦裡より、滔々として湧出せられたるにあらずや。漢詩歌謠、實にこれ韻文の一部分なり。人生まる、感情なきはあるべからず。はた、多少の想像力なきはあらざればなり。源俊頼朝臣は、中古の歌壇に一旗色をたてたる名人にて、詠歌常に一かどの新しき意匠風味あるを以て鳴りたる人なり。此の朝臣は、其の意匠の材を得るの一手段として、歌題の出づる毎に、家の人々をして、皆其の題につきて思ひ到るところをのべしめ、而して、これを參考して自身の意匠

韻文は吾人内外の自然の森羅万象のうつくしきものなり

再び韻文と科學との區別

をたてられたりといふ。また、面白く人類必存の感情想像を說明すべきはなしなちずや。感情想像必ず人類の心裡に存す。韻文、これを本とす。然らば、天下の人皆韻文家たるべきか。曰く然り、曰く然らず。そは、第二篇韻文の内容を說くに至りて、自(おのづ)から了解せらるべきを待たれよ。

第二。吾人内外の自然の森羅万家の美をうつすとは如何。こは韻文の内容となる材料を言へるなり。其の材料を取り扱ふの方法を言へるなり。吾人内外の自然の森羅万象とは、やがて、韻文の材料となるものを示せるなり。其の自然の森羅万象の美をうつすとは、やがて、これを取り扱ふの方法を說けるなり。韻文の材料となる物には、天地山川日月風雲の遠きよりはじめて、花鳥草木人獸虫魚の近きに至るまで、吾人の外部に存在する種々の現象あり。また、喜怒哀樂愛憎理想不平など、吾人の内部に存在する心裡上の現象あり。これ等を合はせて、吾人内外の自然の森羅万象といへるなり。韻文の内容の材料となるものは、すべて、これ等自然の現象なり。其の美をうつすとは如何。これ韻文が、他の美術と其の趣きを一にし、諸般の科學と全く異る一點なり。科學も韻文も、共に其の材料としては、これ等

韻文は美術なり

自然の現象を取り扱ふ。然れども、其の取り扱ひ方を全く異にす。韻文にては、これ等自然の現象を手本として、吾人が美術的想像を加へて、其の現象の美妙をうつし出だすにあり。科學にては然らず。其の現象の性質關係源因結果等を尋ねて、其の現象の如何を說明せむとす。やがて、科學は、吾人の智識理性の眼より見て、其の諸現象のいかなるものなるかを解釋するにあり。

○人の親の心は、闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。

○君をおきて、あだし心を、我れ持たば、末の松山、浪も越えなむ。

この二首の韻文の材料、一は子を思ふ親の愛情、一は男女間の愛情なり。共に其の愛情を、至美深切にうつし出でたるのみ。若し此の愛情の性質關係源因結果の如何なるものなるかを說明せば、やがて心理學といふ科學となるなり。日月風雲花鳥草木など、古來常に詩作の材料となれるものたり。天文地文動物植物學なども、同じくこれ等を材料とす。其の韻文たり、科學たるは、また、此の愛情の取り扱ひ方に同じ。頗しければ、さまては言はず。此の一例にて推して知らるべし。

韻文が、他の美術と趣きを同じうするはしを、一言したり。他の美術とは何んぞ。

韻文には辭句の形式を要す

文學、繪畫、彫刻、音樂、建築、舞踏を言へるなり。韻文は實は文學の一部なり。すべて、これ等の美術品は、自然を手本として、吾人が美術的想像を加へて、其の自然の美妙をうつし出だしたるものなり。此の點に於いて、先づ總べての美術は、一途に出づ。

故に美術は、自然の摸倣なりともいふ。然れども、單に自然の現象の有樣を、其のまゝに、やがて直寫するにはあらず。さばかりにては、美術にはあらざるなり。寫眞の美術にあらざるは、極めて悟り易き此の點の一例なるべし。自然を手本として、其の上に、必ず作家の意匠美術的想像を要す。美術は同じく自然をうつすなれど、其が中に小異あり。文學、繪畫、彫刻の如きは、其の手本は、直接に自然に存す。音樂、建築、舞踏の如きは、其の手本、直接に自然に存せずして、間接に自然を手本として、更に構成したるものの如し。故に前者を摸倣的美術と稱せば、後者は構成的美術とも稱すべきか。されど、非摸倣的美術とは言ふ能はず。

第三。吾人が言語の美妙なる辭句の形式によるとは如何。これ韻文の外形に動かすべからざる法則あるを言へるなり。韻文の外形たる言語は、美妙ならざるべからず。はた、美妙なる形式を具へざるべからざるを示せるなり。韻文のみに

あらず、すべての文學は、吾人の言語を以て、自然の美妙をうつすの美術たり。自然の現象は、韻文の美術品の材料。吾人が感情想像は、これを美術品たらしむる動力。而して、吾人の言語は、この美術をあらはす道具なり。吾人が感情想像の美術力は、この言語の道具によりて、韻文といひ文學といふ美術品をつくるなり。なほ繪畫の色彩により、音樂の聲音によるが如し。

たゞ其の美をあらはす外形の道具たり。いかなる言語、いかなる言語の用方にてもよからむか。否々、決して然らざる也。內容の想の美、外形の用語の美、相待つて、韻文及び他の文學は、はじめて完全なる美術品となるべき物なればなり。言語大に擇ばざるべからず。言語の用方、深く考へざるべからず。言語の美なるを擇び用ひ、其の表はさむとする想によく適合せる言語を用ひ、而してこれを並ぶるにも、よく美妙なる語形句式を採らざるべからず。要は、言語文章といふのみの資格によらずして、言語文章の美妙、用法の美妙といふところによらざるべからず。なほ繪畫の色彩における如し。色彩の善美、色彩の適用、色彩の配合、實に繪畫の美術品たる一要素なるにあらずや。

漢詩の形式の一例

西洋の形式の一例

韻文は殊に此の點を重んず。言語を並ぶるに、秩序ある形式を用ふ。漢詩には字數、句數、平仄押韻などの制あり。

○娥眉山月半輪秋、影入平羌白水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州。（李白）

○國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵万金。白頭搔更短、渾欲不勝簪。（杜甫）

西洋の韻文の形式にも、ミーターといふ規則あり。ライムといふ押韻の制あり。シレブルに長短の音を定め、其の長音短音のシレブルの並べ方によりて、種々の形式を定む。これミーターの規則にて、やゝ支那の平仄に似たり。シレブルとは、一音に發する文字の集まりにて、我が單語は、皆此のシレブルに當るなり。其の長音短音は、表はすに(—)(⏑)の記號を用ふ。ライムとは、子音をつらね、母音をつらね、或は句の首韻を同じうし、句の尾韻を同じうする等の如き規則にて、其の法、複雜なれども、やゝ支邦の押韻に同じ。我が國語には、子音の獨存せるなし。單語は皆子音と母音との熟音なり。

(1) Hungs my hélpléss soul' ön thée,

Lēave āh! lēave me nōt ālōne.....Wesley.

(1) I bring fresh *showers* for the thirsting *flowers*
From the *seas* and the *streams*;
I bear light *shade* for the leaves when *laid*
In their noon-day *dreams* .....Shelley.

前者は、ミーターの一例、後者はライムの一例なり。すべて、これ等は聲調を重んずるより起りたるところにて、第三篇の本文に至りて、詳說すべければ、こゝにては、唯だ斯かる規則ありといふ一端をことわりたるのみ。

我が國從來の韻文は、支那西洋の如き複雜なる形式の規則なけれども、然れども、語數句數などの定規あり。所謂短歌は五七五七七の五句卅一言を規則とし、長歌は句數に制限なけれども、五七の二句十二言を連ね行きて、最後に更に七言を添ふるを通例とし、今樣は七五の二句十二言を四つ重さね、發句は五七五の三句十七言を規則とす。俗謠は種々なれども、都々逸の如きは、七七七五の四句二十六言を通例とす。近時の所謂新體詩の形式は、區々たれども、七五の二句十二言を疊み行く

は、最も普通なり。其の他にも、もとより種々あり。すべて後段に韻文の種類をあぐる時に讓りて、詳記せず、例をもあげず。

辭句の並べ方にかゝる定規ある、韻文が聲調の美を得むとすればなり。聲調の美は、慥に讀者の感情想像を動かして、美感を起さしむるの好方便たり。ごろ〳〵としたる小石路を歩まむよりは、坦々たる滑かなる道を行かむは、實に人の快く感ずるところなるに似たり。太鼓の聲、烏の聲、轡虫の音を聞くよりは、人は、琴笛の調べ、鶯の囀り、鈴虫の鳴くねをこそ、快く感ずべけれ。これ、聲調の美彼れの劣り、これの優りたればなり。彼の業平朝臣の

○月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身一つは、もとの身にして。

の春月に對して去年の人を憶ひての哀吟は、五句卅一言の短歌の形式によられ、其の短辭句の間に、深き想ひをのべむ爲めには、清新、餘情、美なる用語の方法にも出てられ、而して優美悲哀なる聲調整へ得て、讀者をして、一讀再讀、いよ〳〵同情を起さしめ、美はしき哀れを感ぜしめられたるなり。若しこれをさる短歌の形式によらずして、

○月かげは去年の昔のまゝならずや。春色も去年のまゝならずや。さるを我れ一人は、去年のまゝの身にして、戀しき去年の人はあらず。

と言ひたらむには、如何。其の妙趣其の美は、全く沒却せらるべし。若し彼の

○我が庵は三輪の山もと。戀しくば、とふらひ來ませ、杉立てる門。

の吟をして、

○我が宿は三輪山の麓にて、門に杉の木のある家なり。我れを戀ひしく思ひ給はば、いつにても訪ひ來られよ。

とのみ言ひ下したらむには、如何。其の溫雅飄逸可憐なる詩韻はもとより、全く沒了せられ去るべし。韻文文學に、用語の配列の定規あるは、今日の一派の論者のいふ如くに、輕視すべきものにあらず。なか〳〵に珍重すべきところたり。

韻文には、斯くの如き用語の形式あり。これ他の文學と異る所なり。近時美文と稱する文學の一體あり。これ、實は韻文と其の實質を同じうするものなれども、此の韻文の如き用語の形式に拘束せらるゝものなり。今日流行する詩といふ語は最も狹き範圍にては、韻文のみをいふ。やゝ廣むれば、美文をも含む。更に廣

韻文と他の文學

詩

義にしては、すべての文學、皆詩たり。外形の句式以外の點を同じうすればなり。韻文の此の辭句の形式は、もとより從來の規則をのみ追ふべきにあらず。要は、其の內容の如何によりて、それに伴ひて變化せざるべからず。第三篇に詳記すべし。

第四。讀者の感情想像に訴ふとは如何。これ韻文と作家との關係を言へるなり。韻文は作家の感情想像を主とす。韻文は、讀者の感情、想像を客とす。作家は、我が感情想像の眼より宇宙自然の現象を見て自然の美をうつす。讀者は、此の韻文を、また其の感情想像の眼より見て、作家のいふ所に同情を起し、而して、其に其の自然の美を感ずるにあり。然れども、作家の感情想像は主たり。讀者の感情想像は客たり。此の客を相手として、これに感動せしめ、これに同情を起さしめ、これに美感を共にせしむるに至る力は、必ず其の主の手腕による。

○津の國の難波の春は、夢なれや。蘆の枯れ葉に風わたるなり。(西行)

○津の國の難波わたりを來て見れば、茂りし蘆も霜枯れにけり(慈圓)

共に冬枯の難波わたりの寂寥なる風景につきての感吟なり。讀者は、いづれにか殊に同情を起し、殊に美を感ずべき。此の二首の取組みの結果は、もとより團扇

作家と讀者

作家の手腕

韻文の目的は美感の樂にあり

は西行の方にあげざるべからず。西行の方は、其の想其の調其の風韻、誠にあわれにひゝきて、これをよめば、身にしみ〳〵としみわたりて、無限の感慨自から我が心腸を斷つものあり。慈圓の方は、平凡にして何の感もうふばず情も動かず。これこの歌に於いて、慈圓の手腕、讀者の感情想像を刺擊し、讀者に美を感ぜしむる力なきなり。故に作家は、讀者の感情想像を動かすべき手腕を蓄はざるべからず。然らでは、讀者の感情想像は動かざるなり。同情は起らざるなり。韻文の美術力は無きなり。故に、作家は、つとめて其の感情想像の深く美に、其の言語其の辭句の形式のよく美ならむやうに、慘憺たる苦心せざるべからず。而して、讀者の同情を誘ひ、其の美を感ぜしむるを得れば、韻文の功は奏し得たるなり。韻文は、決して讀者の智力理性を相手にして、其の事物を解釋說明し、其の智識道理を知らしめむとするものにあらず。かくする時は、科學となり散文となるなり。

第五。直接には讀者に精神上の美なる快樂を與ふとは如何。これ、韻文の目的を言へるなり。讀者に對する韻文の本能を示せるなり。韻文は、讀者に精神上の快樂を感ぜしむるを、第一の目的とす。此の目的にはずれては、韻文にあらざるなり。

精神上の快樂と肉體上の快樂

精神上の快樂とは、肉體上の快樂に對したる語なり。口に感ずる美味佳肴の快樂は、後者の好例なり。彼の長明が

一期の樂みは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望みは、をり〳〵の美景に殘れり。（方丈記）

と語りて、日野山の閑居を樂み、また、李白が

問吾何意棲碧山、笑而不答心自閑、桃花流水杳然去、別有天地非人間。

と笑ふて、碧山に塵外の別天地を樂みたるなどは、前者の好例なり。肉體上の快樂は、吾人が獸性の滿足に存し、精神上の快樂は、吾人が靈性の滿足に存す。されば精神上の快樂を、讀者に與ふるを、第一の目的とす。韻文の快樂は、此の高尚なるものたり。作家は、此の高尚なる快樂を、讀者をして、わがうつし出てたる自然の美に感ぜしめ、こゝに同情を誘ひ起し、こゝに滿足せしめ、こゝに樂ましむるにあり。然れども、作者は單に、此の快樂を商ふ營業者と成るべからず。さては、其の韻文家にはあらざるなり。作者は、もとより自からこゝに樂まざるべからず。而して、自から其の樂みを讀者に分つにあり。長明が方丈記を讀まば、誰れも一度は、

健全なる韻文

其の日野山の閑居の美を、ゆかしく思ふの念は禁ぜられざるべし。「魚は水に飽かず、魚にあらざれば、其の心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味も、また斯くの如し。住まずしては、誰れかさとらむ。」實に作者自から此處に住みて其の樂みをさとりての筆なればこそ、讀者の心は動くなれ。

韻文の目的、こゝに在り。これ、美術品たる要點たり。美術は皆此の點を同じうす。故に、直接に吾人が生存を左右するものにはあらず。然らば、全く吾人社會の進化に參する力なきものか。否然らず。

第六。間接には社會人心が高尚優美の進歩に貢献す。これ、健全なる韻文に自から具はるべき第二の能力たり。精神上の快樂これ、すべての韻文が是非に有すべき能力たり。健全なる韻文は、これに加ふるに、自から讀者の心を美育する力を存すべきものたり。即ち、單に精神上の快樂を與ふるのみにとゞまらずして、其の快樂を與ふるが間に、高尚優美なる諸般の觀念をも注入し、これを樂む人をして、知らず〳〵其の心を美はしく進ましむるものなり。或は、たとへ社會人心を美化せしむるまでの力なくとも、これをして下等なる境に墮落せしめざるばかりの力あ

韻文の人心感化力

定家卿の逸話

るべきなり。されど所謂世の韻文といふ中には、此の間接の功なきものあり。彼の人類間の卑猥なる劣情を、やがてうたひいてたる淫靡なる情歌の如きは、蓋し其の甚しきものならむ。希哲プラトーの詩人は人類中の最も危險なる者なりとの危言は、蓋し詩の勢力の大なるを證明したると共に、また此の般の文學を恐れたるの語の外ならじ。

この間接の貢献は、もとより韻文の目的にはあらず。韻文は決してこの目的を以て作るものにあらず。唯だ健全なる韻文には、自から隨伴すべき美果たるのみ作家若しよく自然の至誠純美の天地に、我が身心をおきたらむには、其の韻文、求めずして、自から此の能力を具すべきなり。なほ高山大川の如し。吾人を敎化せむとして、屹然たり森々たるにはあらじ。されど、こゝに登れば、我が心自から高くこに臨めば、我が心自から大なるをおぼゆるが如し。定家卿は、歌を案ずる毎に、先づ白樂天が「故郷有母秋風淚、旅館無人暮雨魂」の詩を誦せられ、かくて心けだかくなりて、よき歌のよまるると言はれたりとか。樂天、決して人の心をけ高くせむとて作りたるにあらず。至誠の情吟、自から定家卿をして、さる心の感化あらせしめしの

健全なる作家の德

み。

韻文のみにはあらず。健全なる文學は、皆然り。されば、文學は國民の思想精神の上に、極めて大切なる關係を有せるものにして、我が國民の今日の元氣も、三十年來の國文學の素養に出づる所、決して少々にあらざるべし。彼の修身倫理の學たるや、人道を說明し、人心を美ならしめむとするにあり。されど、表面より理屈を以て說き敎ふるなれば、敎化の力薄弱にして、其の得る所も堅固ならず。理より得たる人の道德は、動き易し、破れ易し。文學は、人を樂ましむるが中に、知らず〳〵これを導く故に、敎化の力、思ひの外に强大に堅固なるものあり。希臘の古代に、韻文を以て道德倫理を敎へたるは、また此の韻文の能力を證明すべき美談ならずや。されば作家の責任は極めて大なり。健全なる作家は、我れ先づ自然の純美の天地に逍遙して、而して其の求め得たる錦繡を以て、讀者を誘ひて美育せざるべからず。これ、健全なる作家の德義たり。

以上の所說、我が韻文の見解なり。これより第二章に韻文の種類をのべ、第三章に韻文作法の目的價値をのべむとす。

第二章　韻文の種類

前章の數言、もとより大略にはあれど、韻文のいかなるものなるかは、こゝに論定せり。やがて、韻文が根據とせる本量、原質は、こゝに研究したり。韻文は皆此の本量、原質を同じうす。然れども、吾人が視聽に供へられたる古今の韻文美術品、種々其の形容を異にして、決して一躰一律にあらず。これ、其の內容の材料の種類、其の描出の方法、其の外形の句式の別によりて、同一の本量、原質、自から異種の形容を呈するなり。なほ繪畫の如し。山水畫、花鳥畫、佛畫、人物畫、浮世畫、狩野派、圓山派、四條派など、種々の畫あり。種々の畫風あり。等しく畫たり、美術たり。唯だ其の材料を異にし、其の描出の方法を異にせるのみ。

韻文の種類は如何。これをのぶるにあたりて、なほ一言殊に注意せざるべからざるものあり。やがて、韻文といひ詩といふ用語につきてなり。前章に論じたる如く、韻文は詩の一部分なり。語句の配列に規律を有する詩なり。詩は此の種のみにあらず。さる規律を論ぜざるものあり。例せば、美文の如し、小說の如し。これ等は散文躰詩といふべきか。詩に此の二大別あり。されば、韻文は皆詩なれ、詩は

主我の韻文
主他の韻文

すべて韻文にあらず。彼の語句の配列の規律を外になしたる今日の戯曲の如きも、またこゝにいふ韻文にはあらざるなり。詩といふ用語、さま〳〵に用ひられて、こゝにいふ韻文詩と混同する恐れあれは、殊更にこゝに注意するなり。

さて、韻文の種類は如何。これを區別するの標準は如何。この點につきても、古今の慣例、東西の所說、區々たれば、一つ〳〵列述評論せむは、いとわづらはし。我れはまた、大膽に思ふまゝに類別せむとす。

曰く、主我の韻文、曰く主他の韻文、これ、先づ我が韻文界を劃せむとする二大別たり。作家自から其の一篇の材料の中の主となり、作家自身の情想の描出を主とす、これ、主我の韻文なり。作家は單に製作者といふのみの位置に立ち留まりて、其の取たれる材料の描出を主とす、これ、主他の韻文なり。簡單なる一例をいへば

鴈がねは、風にきほひてすぐれども、我が待つ人の言傳はなし。（新古今集）

大江山かたぶく月に影見えて、鳥羽田の面におつる鴈がね。（仝、慈圓）

前者は、哀鴈聲裡に作家が其の別れし人を慕ひての吟なり。作家が人を慕ふ情想の描出を主とせるにて、これ主我なり。後者は、作家は單に側にありて、其の見聞せる山月落鴈の風景を描出するを主とせるものにて、主他なり。主他の韻文といへど、もとより作家の情想の全く關係なるものにはあらず。韻文は、作家の感情想像の眼より、宇宙の万象を見て、製作せらるゝものなればなり。唯だ、主我といひ、主他といふは、作家が其の作に對する位置の如何にあり。主我に於いては、作家は表面に立ちて、自から其の描出する材料の中の主となり、主他に於いては、作家は單に裏面に立ちて、風景人事社會、すべてとり來たれる材料を、或は語り或は紹介するまでにあり。こゝに、主我といひ、主他といふは、世に主觀客觀といふも同じ。されど、かく言ひかへたるは、わかり易からむ爲めなり。

主我、主他、此の二大別は、作家の位置を標準としての色別なり。されど、これのみにては、茫洋たる現在の韻文界の區劃、あまりに漠然たるをまぬかれず。この標準を基礎として、なほ詳しく類別する時は、

- 韻文
  - 主我……(一)抒情韻文
  - 主他……(二)叙景韻文
  - 　　(三)叙事韻文

(四)戲曲韻文

叙情、叙景、叙事、戲曲の四大別は、蓋し穩當なる見解なるべし。更に進みて、これ等四種の特質、特色を略陳せむか。

(一)抒情韻文。此の韻文の根本の材料となるものは、喜怒哀樂愛憎敬慕忌懼嘲罵怨恨希望不平など、すべて吾人內界の現象なり。やがて、吾人心裡の活動なり。而して、主我の韻文なり。作家は、自身、其の材料の中の主たり。作家自身のこれ等情想を描出す。即ち、作家の熱情が、一身一家社交の上に關し、或は、天地自然の風物に對し、折りにふれて感動したる活動を描出するなり。而して、作家自身の情想なれども、其の心裡の活動の種類により、よく優美にも高尙にも溫雅にも沈痛にも悲壯にも、吾人心裡の種々純美なる情想を描き出てゝ、作家自身も樂むと共に、讀者をもこゝに感動せしめ、こゝに樂しましめて、これを導くにあり。されば、抒情韻文を作るものは、殊に其の心を純美の境に置きて、其の吐露する情詠をして、純美なる熱情の聲ならしめざるべからず。

更に一言にいへば、抒情韻文は、作家が折りにふれ物にあたりての熱情の聲なり。

作家の熱情の聲にして短詩形を普通とす

熱情の聲、而して、讀者を感動せしめむとす。故に、抒情韻文は、他の韻文に比ぶれば、其の形の短きを普通とす。これ、自然の道理なるべし。香川景樹が、嘗て歌を論じて、最上の歌は最上の調にあり、最上の調は最上の感にあり、而して、最上の感はやがて端的の感なりといひ、また、長歌は感淺き事、短歌にくらべては万々に候といひて、終身短歌をのみ詠みたるは、全躰の歌論としては、もとより首肯する能はざる僻說なれども、此の抒情韻文の熱情の聲、熱情の聲の短詩形なるべく、短詩形の感動强かるべき、理由を、裏面に說き得たる見にして、しか見れば、面白きふしもあり。我が古來の歌に、戀、哀傷、賀、羈旅、離別歌などいへるは、もとより全く此の類にて、四季の歌雜歌といふも、殆んど此の種なり。諸種の俗謠も然り。而して、これ等の歌の短詩形なる、誠に一理ありといふべきにこそ。西洋の Lyric といふは、皆、やがてこの韻文なり。其の Lyric の細別にならひて、此の抒情韻文を、なほ細に細別する人もあれど、わが韻文作法には、さまで用なき事なれば、さる煩勞を畧きていはず。今、短歌俗謠などの中より、思ひあたるまゝを例證せむとす。

短歌

○古のふみ見る度に思ふかな、おのが治むる國はいかにと。（御製）
○かしこくも照る日の本と名づけゝる、曇らぬ君を主にはして。（宗良親王）
○我が君は、千代に八千代に、さゞれ石の、巖となりて、苔のむすまで。（古今集）
○忘れては、夢かとぞ思ふ。思ひきや、雪ふみわけて、君を見むとは。（在原業平）
○旅人の宿りせむ野に霜ふらば、我が子はぐくめ、天のたづむら。（万葉集）
○人の親の心は、闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。（藤原兼輔）
○世の中に、去らぬ別れの無くもがな、千代もと祈る親の子の爲め。（在原業平）
○あはれにぞ、亡き面影も通ひける、親のいさめしうたゝねの夢。（新葉集）
○梯立のさかしき山も、わきも子と二人越ゆれば、やすけかも。（万葉集）
○わがせ子と二人し居れば、山高み里には月は照らずともよし。（仝上）
○ながらふる雪ふく風の寒き夜に、わがせの君は、獨りかぬらむ。（仝上）
○埋火のあたり長閑にはらからのまとゐせし夜ぞ、戀しかりける。（藤原定信）
○紫の一本ゆゑに、武藏野の草は皆がら、あはれとぞ見る。（在原業平）
○今日もまた松ふく風の岡へ行かむ、昨日涼みし友にあふやと。（西行法師）

○淋しさに堪へたる人の、またもあれな。庵を並べむ、冬の山里。（仝上）
○吉野山、やがて出でじと思ふ身を、花散りなばと、人や待つらむ。（仝上）
○深からぬ外山の庵の寐覺めだに、さぞな木の間の月は淋しき。（藤原良經）
○朝霧に淀のわたりを行く舟の知らぬ別れも悲しかりけり。（後鳥羽院御製）
○昨日といひ、今日と暮らして、あすか川流れて早き月日なりけり。（古今集）
○つひにゆく道とはかねてきゝしかど、昨日今日とは思はざりしを。（在原業平）
○花の色はうつりにけりな、徒らに、我が身世にふるながめせし間に。（小野小町）
○男の子やも空しかるべき、万代にかたりつぐべき名は立たずして。（山上憶良）
○大井川かへらぬ水に、影見えて、今年もさける山櫻かな。（香川景樹）
○再びは越えじと思ふ陸奥のいはての關に、鶯のなく。（仝　上）
○僞りのなき世なりせば、いかばかり人の言の葉うれしからまし。（古今集）

○底ひなき淵やはさわぐ。山川の淺き瀬にこそ、あだなみは立て。（素性法師）
○牛の子に踏まるな、庭の蝸牛、角あればとて、身をな頼みそ。（寂蓮法師）

發句

○義仲の寐覺の山か、月悲し。（芭蕉）
○なかしや、奈良の隣の一時雨。（曾良）
○されはとて、石に布團もきせられす。（其角）
○骸骨の、上をよそうて、花見かな。（鬼貫）
○白露や、無分別なるおきどころ。（宗因）

俗謠

○船じや寒かろ、着て行かしやんせ、わしが着替へのこの小袖。
○○蟬と螢と秤にかけて、泣いて別れぇか、焦れて退きぇか。昔思へば、見ず知らず。
○庭の雪間のあの梅さへも、艱苦しのいて、花が咲く。
○親へ孝行、世間へ義理も立てゝ、わたしも見すてずに。

かゝる短き詩形のものゝみにもあらず、万葉集の長歌を見られなば、知らるべし。

俗謠の中にもあり。近時流行する新体詩も、また、大かたは、この抒情韻文なり。

（一）我が千行の　血の涙、　塵のちまたに　そゝぐとも、
　わが涙（大町桂月）
　くされはてたる　世の人の　腸は、よも　洗はれじ。
（二）いでや、汚れし　世の中は、　走るしかばね、ゆく肉の
　すだくがまゝに　まかせおきて、高根の月に、我れ泣かむ。
（三）かきくらしたる　大空の、　ひと雨ふりて　霽るゝごと、
　胸のうれひの　むら雲も、　涙にのみぞ　解くるなる。
（四）寂しく吹けよ、　峯の風。　かなしき音になけ、　谷の鹿。
　ちゝにくだくる　わが心、　涙[illegible]ば、　はれぬなり。

所謂發句、短歌、狂歌、今様、長歌、新体詩、種々の俗謠、すべて、其の語數句形の如何を問はず、斯の如く吾人の心裡の活動を、根本の材料として、作家が、自らの實境の感にもせよ、假題の吟にもせよ、其の熱情を吐露したるものは、皆、此の抒情韻文たり。

（二）叙景韻文。　この韻文の材料は、吾人の外界の風景なり。主他の韻文にして、作

家はたゞ裏面にありて、其の見聞せる風景を描出して、その中にこもる優美高雅寂寥壯大などの風致を、讀者に樂ましめむとするにあり。

○武士の矢なみつらふ小手の上に、霰たばしる那須の篠原。（源實朝）
○逢坂や木末の花を吹くからに、嵐ぞ霞む、關の杉村。（宮內卿）
○片岡の麓の稻葉末さわぎ、月より落つる峯の秋風。（藤原良經）
○村雨の露もまだひぬ槇の葉に、霧立ちのぼる秋の夕ぐれ。（寂蓮法師）
○空はなほ霞もやらず風さえて、雪げにくもる春の夜の月。（良經）
○霞立つ末の松山ほの〳〵と、浪にはなるゝ横雲の空。（藤原家隆）
○雨そゝぐ花橘に、風すぎて、山時鳥雲になくなり。（藤原俊成）
○ふじのねを、木の間〳〵にかへり見て、松のかげふむ、浮島が原。（香川景樹）

發　句

○春雨や、簑ふきかへす川柳。（芭蕉）
○秋の空、尾の上の松をはなれけり。（其角）
○五月雨や、ある夜ひそかに松の風。（蓼太）

○春の海、ひねもすのたり〳〵かな。（蕪村）
○夕風や、水青鷺の脛をうつ。（仝上）
○鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな。（仝上）
○鍋さげて、淀の小橋を、雪の人。（仝上）
○ふばらくは花の上なる月夜かな。（芭蕉）
○花の雲、鐘は上野か、淺草か。（仝上）

いかなる叙景韻文にもせよ、作家の感興は、もとより籠もるなり。これあるが故に、其の韻文はいて來、其の風致を讀者に分つを得るなり。然れども、彼の作家の直接に自家の熱情を訴ふる抒情韻文の如きものにあらず。作家が感興したる風景の描出を主とす。作家はこれを讀者に紹介して、優美にもあれ、壯嚴にもあれ、悲哀にもあれ、閑寂にもあれ、其の風色景致の美に仝感せしむるにあり。故に、主他の韻文とはいふなり。

此の純粹なる叙景韻文は、特に我が詩界の名物なり。豐富を以て誇れる西洋にも、これのみは欠く。然れども、他の長篇の韻文の中に含まれて見ゆるものはあり。

由來、この詩は、單獨に純粹なる形にてあらはるゝものは、我が國にても、多くは短詩形のもののみ。左の一例の如きは、やゝ長きものたり。

海上夕立（橘守部）

○わたの原、ふりさけ見れば、白雲のむかふすきはみ、しほなわのとゞまるかぎり、庭もよく晴れたる海の、時のまに空かきくれて、上汐をおろしもあへず、ほすあみをたぐりもあへず、沖見れば鯨のしほか、邊を見れば鰐のいぶきか、みそらには龍かもいぶく、鳴神かくれおちぬと、その音のきゝのかしこく、その雨の見のおそろしき。青海原、風のなごりの白浪を、沖にのこして、見し雲は、いづちいにけむ。

夕立の空さりげなく、夕日かげたださしわたる、海のおもてを。

（三）叙事韻文。この詩の材料は、一個人の事蹟、傳記、神靈佛鬼の奇話怪談、人生社會の種々の事件なり。而して、作家は裏面にありて、單に其の事件を物語るなり。聲調ある語形にて、これを記述し物語るなり。其の事件といふ中には、實際の物語もあり、假りに結構したる小說もあり。一場の單純なる事件もあり、連續せる複雜の事件もあり。いかなる事件にもあれ、其の物語が一篇の主なり。作家は單にこれを物語る講談師たるのみ。やがて、其の事件の種類に從ひ、これに應じたる聲調語形を以て、勇壯にも悲哀にも壯重にも優美にも可憐にも、よく面白く物語り行くが、作家の役目なり、手腕なり。

我が國には叙事韻文に乏しし。まゝあるも、とかくに作家の抒情を含みて、純粹のこの種の韻文に乏し。殊に、雄大なる思想、複雜なる結構を以て作りたるものは、殆んど皆無なり。

○なげき來し道の露にもまさりけり、馴れにし里を戀ふる涙は。（赤染）

○見る度に、鏡のかげのつらきかな、かゝらざりせば、かゝらましやは。（懷圓）

共に王昭君を詠じたるなり。王昭君の心事を詠じたれば、一讀、抒情韻文の如く見ゆれども、さにあらず。これは、作家自身の熱情を訴へたるにあらず。王昭君の身上の悲境を題として、その涙を物語りたるなれば、短けれども、叙事韻文なり。古來の詠史の短歌は、多く此の種の韻文なり。

○春の日の霞める時に、住吉の岸に出て居て、釣舟のとをらふ見れば、古の事ぞ

思ほゆる。水の江の浦島が子が、堅魚釣り鯛つりほこり、七日まで家にも來ずて、海界を過ぎて漕き行くに、海神の神の少女に、たまさかにいでき向ひて、相かたらひ、事成りしかば、かきむすび、常世に至り、海神の神の宮の内のへの妙なる殿に、携はり二人入り居て、老いもせず死にもせずして、永き世にありけるものを、世の中の痴れたる人の、吾妹子にのりて語らくしまらくは家にかへりて、父母に事をものらひ、明日のごと我れは來なむといひければ、妹がいへらく、常世べに亦かへり來て、今のごと逢はむとならば、この櫛笥開くなゆめと、そこらくに堅めしことを、住のへに歸へり來て、家見れど家も見かねて、里みれど里も見かねて、あやしとぞそこに思はく、家を出てて、三年の程に、垣もなく家失せめやと、此の箱を開きて見れば、もとのごと家はあらむと、玉櫛笥少し開くに、白雲の、箱より出てて、常世べにたなびきぬれば、立ち走り、叫び、袖ふり、こいまろび、足ずりしつゝ、忽ちに心消失せぬ。若かりし膚も皺みぬ、黑かりし髮も白けぬ、ゆなゆは息さへ絶えて、後つひに命死にける水の江の浦島の子が家どころ見ゆ。常世べに住むべきものを、劍太刀おのが心とおそきこの君。（万葉集）

此の長歌は、彼の水の江浦島の子の奇談を物語りたるにて、叙事韻文なり。されど、冒頭に古の事思ほゆといへるより、結末に添へたる詞など、作家自身の情想をもやゝ混じたるあたり、全く純粹なる叙事韻文とは言ひがたきも、先づ全躰は叙事の種と見てよろしからむ。なほ万葉集には、此の種の長歌見ゆれど、皆全じく同樣の不純粹をまぬかれず。殊に、複雜なる事件、豐富なる詞藻、長篇の叙事韻文の純粹なるものに至りては、殆んど我が詩壇に見るを得ず。謠曲は、韻文としてはやゝ不規律なる形式のものなれども、これを許さば、多くは此の種の韻文たるべし。而して、其の舞臺の上に演ぜらるゝを見れば、次にのぶる戯曲の一種と見てもよし。近松の淨瑠理の時代物なども、またこれに似たる性質あれど、不完全なる戯曲韻文とする方、穩當なるべし。馬琴の八犬傳の如き、語句の配列に多く七五調を用ひて、韻文に似たる所あれども、これも散文の小説と見る方、もとより至當なるべし。

近時の新体詩家、多くは抒情詩壇に苦心するのみにて、未だ大に此の叙事詩壇上に進むの餘力なき如し。まゝ此の種の韻文に屬すべきものゝ見ゆれども、抒情叙事の二性質を混じたるもの多し。落合直文氏の孝女白菊、大町桂月氏の浪の花、

子規子の鹿笛などは、わが記憶に存する叙事詩たり。

(四)戯曲韻文。材料は叙事韻文に同じ。やがて、人世社會の事件なり。作家も、同じく裏面に立つのみにて、主他の韻文なり。されど、叙事韻文に異る事は、叙事の方は、作家が其の事件を語るなれど、これは、作家は語らず、作家は全く裏面の黒幕の中に居りて、其の事件に伴ふ景狀を示し、其の事件の活劇者たる人物を出だして、對話せしめ獨語せしめて、而して、其の事件の始終を知らしむるやうにす。この韻文は舞臺にて演ぜむ爲めに作るものにして、單に讀まむ爲めに作るものにあらず。

故に、必ず舞臺をかりて、其の事件の中の人物に扮する役者を用ひて、其の所作を演せしめて、味ふべきものなり。其の事件には、實際の事實もあるべし。多少それを潤色したるもあるべし。また、假りに設けたる小説もあるべし。とにかくに、其の事件によりて、よく人生社會を寫さむとするが作家の希望なり、手腕なり。戯曲韻文、故に、人世の縮寫ともいふなり。

一篇の戯曲韻文は、通例三大部より成る。第一部は、事件の發端にて、主人公の如何なる人物なるかを紹介す。主人公とは、全篇の事件の活劇のしんとなる人物をいふなり。第二部は、事件のいよ〳〵複雜に、ます〳〵紛亂するところなり。第三部は、紛亂せる事件の、やうやく破綻しゆきて落着する條なり。而して、この三大部の事件の、進行を描くに、これを五幕に分つ、第一の幕は事件の端緒、第二の幕は事件の紛亂に入り、第三の幕は、事件の紛亂いよ〳〵甚しき境に進み、第四の幕は、事件の紛亂の頂上に達し、局面やうやく破綻に傾き、第五の幕は、事件の落着に至るなり。五幕にて、三大部成立してこゝに一篇の戯曲となるなり。なほ細にいへば、一幕毎に數段に分かたる。これは、事件の進行中、場所の變はるに從ひ、新に人物の出づるに從ひて、變するなり。されば、もとより一定せず。以上は、西洋の戯曲の組織なり。

シェークスピアの作オセロにつきて、一例を示さむ。オセロにいふ題名は、篇中の主人公の名を用ひたるなり。この人もと亞弗利加の黑人なるが武勇すぐれたる丈夫にして、戰功によりて、ベニス國の將軍と仰がるゝに至りたる人なり。第一の幕は、ベニスの富豪の愛嬢、この丈夫の武勇をめでて、つひに結婚するに至る顚末によりて、主人公オセロの人物を紹介したり。またオセロが、若武者カッシオを扳擢して、副將に任じたるより、部分の一士イアゴの怨みを招くに至るといふ次第をう

戲曲の種類

つせり。一篇の事件の端緒なり。第二の幕は、イアゴが、姦計を以て、オセロをして、つひにカッシホを下官せしめ、更に、落膽せるカッシホをあやつりて、オセロをして其の無辜の妻女に姦通の疑ひを抱かしむる策略をめぐらすといふ次第にて、事件はいよ〳〵紛亂に入るなり。第三の幕は、イアゴの惡計、いよ〳〵進行しゆきて、事件はます〳〵紛亂しゆく段なり。第四の幕は、つひにオセロをして、その妻女を殺さむとするの念を起さしむるに至るまで、事件は紛亂の頂上に達す。第五の幕は飽くまでも惡魔に心を奪はれたるオセロは、可憐の妻女を無慘にも我が手にかけて殺しぬ。さるに、はし、なくも無辜のよしを知らるるに、悲しさやる方なくて、やがて妻女の死骸を抱きて自らも自刃してはつるといふ悲慘の終局なり。此の一幕が、また數段に分かたるオセロの戲曲は、第一幕(三段)、第二の幕(三段)。第三の幕(四段)、第四の幕(三段)、第五の幕(二段)より成れり。此の幕毎の段數は一定せざるなり。我が國の淨瑠理の幕數は、斯くの如き定則なし。

此のオセロの如き悲慘の極に終るものを、西洋にては Trauspiel (悲劇)といふ。故に、悲劇の材料は、社會の悲慘事件にして、人生の悲運場裡を描さむとするにて、其の

我が國人の性質

求むる所は、同情の涙なり。これに全く反したる性質のものを、Lustspiel (喜劇)といふ。人生の幸運場裡を描さんとするものにて、其の求むる所は、愉快の笑ひなり。この悲劇と喜劇とを折衷したる如き性質のものを、Schauspiel (折衷劇)といふ。悲哀の事件、悲劇の如く無慘の局に終らずしてめでたき穩かなる終りを見るものなり。我が國の戲曲には、この種のもの多し。これ、我が國人は概して、情に弱く涙もろき人にして、さばかり無慘なる事を見るに聞くに堪へざる性質あればなり。我が同情を寄する人の、さばかりむごたらしき非業の最期に終りはつるは、到底見るに忍びざるなり。故に、其の事件の悲哀、一轉して、全く幸福に終るにあらずとも、せめての思ひ出とすべき多少のよろこびを以て終るを好むなり。故に、この種の戲曲多きなり。また、一方には、作者の理想、多く儒教の道義にありて、例の所謂勸善懲惡の主旨に出てたればなり。悲劇のなきにもあらず。近松の冥途飛脚は此の悲劇の一例なるべし。主人公なる忠兵衛、これに伴れ立つ可憐の梅川、遂に悲運に勝つ能はずして、忠兵衛の在所に心中せむとして、それも果さず、無慘にも二人共に刑場の露と消ゆるといふ。悲なるかな、慘なるかな。彼の心中物といふは、先づ此の悲

劇の中たるべし。

我が國の戯曲韻文は、先づ近松にはじまりたる淨瑠理なり。然れども、西洋の戯曲の眼より見る時は、不完全と言はざるを得ず。其の文中に、往々作者の情想を直接にのべたる筆あり。これ、純粋の戯曲韻文にはづれたる所たり。主我の韻文、即ち抒情韻文の性質を混ずるなり。また我が淨瑠理は、單に音樂に合せて謠ひ語る事を得、これも西洋の純粋なる戯曲にはあらざる所たり。彼の戯曲の別種にOper, a 即ち Singspiel (歌謠劇)といふものあり。これは他の純粋の戯曲とは異り、必ず音樂歌謠に伴ふものにて、されば我が淨瑠理は、これに似たる所あり。とにかくに、我が戯曲韻文は、將來の天才が筆を待つもの多し。

韻文の種類、粗雜なる我が觀察を下たせば、抒情、叙景、叙事、戯曲、この四大別たり。そが中に、韻文家の本城とすべきは、抒情、叙景、叙事の三種にありといふべし。戯曲の如きは、我れはむしろ散文詩家の手にまかせむを穩當なりと思ふなり。近時西洋の戯曲の筆、散文に傾きたるも、蓋し散文の筆の、戯曲に適したる一證なるべし。故に、この韻文作法、說くところ、多くは前の三種の上にあり。

こゝに、第一篇の第三章として、韻文作法の目的價値等につきて、思ふかぎりを詳しくのべむと思ひ居たれど、我れ宿痾の障りの爲めに、一二回の起稿を怠りたれば、此の一章は省略して、直ちに第二篇に入らむとす。我が韻文作法を語るにあたりて、さまで主要なる點にあらざればなり。而して第二篇以下の大切なるさかひに入りて、紙數の足らざるに到らむ怖れあればなり。唯だ一言、讀者の記憶を煩はしおくべき事は、此の韻文作法といふものは、韻文詩を作るの大道を知らむとするの技術たり。技術たりといへども、すべての人をして詩家たらしむる技術にはあらず。詩人たるべき人をして、其の詩想、詩語、詩調の上に大道を知らしめて、眞にはじめて美妙なる詩家たらしむべき技術たるにすぎず。瓦をしてよく玉たらしむる術にあらず。玉をしてよく美妙なる玉たらしむる技術のみ。詩人はこゝに作るべからず。されど、詩人たる質ある者は、こゝに磨かるゝを得べし。

第二篇　韻文の內容

この篇に於いては、韻文の内容たる詩想のいかなるものなるか、いかにして構成せらるべきか、いかにして養成せらるべきかを、概論せむとするなり。

第一章　詩想

こゝに、詩想といふは、韻文の内容を成せる實質なり。韻文の材料を、美術的感情想像の力によりて、美術に組み立てたるものなり。韻文の材料は、第一篇第二章に述べたる如く、韻文の種類によりて、其の種を異にせり。抒情韻文にては、材料は作家の情想なり。此の情想の美術的に組み立てられたるやがて、抒情韻文の詩想たり。叙景韻文にありては、材料は自然の風色物景なり。此の風色物景の美術的に組み立てられたるが、やがて、叙景韻文の詩想たり。叙事韻文にありては、材料は一個人、一社會の活動なり。此の活動を美術的に組み立てたるぞ、やがて、叙事韻文の詩想なる。而して、これを組み立つるは、作家が美術的感情想像の力によるなり。

こゝに注意すべきは、材料といふ語なり。韻文の材料、即ち、韻文の詩想の本となる材料と、其の詩想を組み立つる上に用ふる材料、即ち、道具とを混ずべからすゝ。例へば、

海ゆかば水づく屍、山ゆかば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、のどには死なじ。

此の韻文の材料といへば、大君の命のある所に我が身を捧げむといふ武士の情想なり。而して、山といひ、海といひ、大君のへといへるは、皆其の詩想を組み立つるまてに用ひたる道具のみ。さて、山にても海にても、大君の命のある所に、我が一身を捧げて死なむといふ詩想は、組み立てられたるなり。

韻文の詩想は、既に一の韻文なり。作家の腦裡に存じて、未だ聲を有せざる韻文なり。此の詩想を、それに應じたる語句を以て發表す。こゝに、他人も聞くべく、さて、作家と同じ美を感ずべき所謂韻文と成るなり。思想の存する所に、語句は出て來たり、語句の出づる所は、思想のあらはるゝところたり。されば、韻文の成作には、もとより思想こそ本なれ、語句は末なり。思想の詩なくば、語句の詩は存せじ。從つて、韻文の詩は成立せざるなり。いかに語句に詩形を飾るとも、思想に詩韻のこもるにあらずば、つひに詩にあらざるなり。唯だ詩の形したるのみ。造花の如し。花の形はあれど、花にはあらざるなり。彼の歌はいかなる事をも詠まるゝものぞ

といひて、

それ其處に、豆腐屋の聲聞ゆなり。お山出て呼べ、行きすぎぬまに。（香川景樹）

といひたるごとき、三十一文字短歌の語形語調をそなへたれど、これつひに短歌にはあらざるなり。否、詩にはあらざるなり。其の三十一文字の語句の中に思想の詩を有せざればなり。三十一文字の語句、全く詩の思想をあらはしたるものにあらざればなり。豆腐屋の賣り聲の聞ゆる故に、家婢に疾く出でゝ呼べといふ如きは、いかで詩の思想ならむや。これに反して、

時鳥、まこと、冥土の鳥ならば、こちの太郎べいどんに、途であふたか。

さる歌人の家に奉公したる下女の詠みしものなりときく。語句は粗笨なり、語調も乱れたり。歌としては、語句語調の上には整はぬふしのものなれど、然れども、其の思想は詩なり。まことに死出の山路より出て來たれる鳥ならば、時鳥よお前はわが戀しき亡き良人に、途中にて遇ひつらむか。さても、良人の上の聞きたやといへるこゝろは、誠にあはれなる詩的情想ならずや。彼の伊勢が、我が生みの皇子のみまかりたるを悼みて、

死出の山越えて來つらむ時鳥戀ひしき人の上語らなむ。（伊勢の家集）

と歌ひたると共に、其の悲哀を同じうせる詩的思想たり。唯だ、これは、練熟せる詩才の歌人が手になりて、優麗なる語句聲調をもつて表はれ、それは、歌道を更に心がけざる詩人の手になりて、惜しむべし、粗野なる語句聲調にあらはれたるのみ。前者は磨かれたる玉なり。後者は磨かれざる玉なり。玉は同じく玉なり。思想は同じく詩的思想たり。此の家婢が腦裡に描かれたる思想は、詩なりしなり。これを語句に發するに當りて、美妙なる詩形を得ざりしのみ。太郎べいどんの詞、粗笨なりといへども、この家婢が此の文をきかば讀者必ずいふべからざる一かどの美感にうたるゝものあるべし。これ、其の思想の詩なればなり。お山出て呼べの詞うるはしといへども、誰れかこれに美感を起すものあらむ。其の思想の詩にあらざればなり。

木末にうたふ鳥、水岸になく蛙、心なきところに生物の聲はなし。喜んで、うれしとよぶ、泣いて悲しと叫ぶ心なき所に吾人の聲はなし。聲あるところ、必ず思想あらざるべからず。詩的思想あり、こゝにはじめて詩の聲あり。されば、詩作せむと

する者、先づ詩的思想を腦裡に構成せざるべからず。さて、詩的思想とは如何。これ、詩にあらざる思想に對したる語なる事は、もとよりなり。さらば、いかなる思想を詩といひ、いかなる思想を詩にあらずといふべきか。これ、常に吾人の口にする區別にして、而して、誠に說明しがたきところたり。しかも、おのれは哲學に暗し。哲學に暗き腦力言語にては、もとより明晰なる說明は望みなし。唯だ我が平生の管見を、大膽にのべ立てなば、一は其の材料の如何、一は其の材料の構成の如何にあり。吾人の劣性に關したる情想、事件は、詩想をなす材料にはあらざるなり。劣性とは吾人の獸性をいふなり。されば、一例を示せば、單に吾人が生活の維持の上にとゞまりたる情想、活動、事がらは、詩想の材料にはあらざるなり。三度の食事の如し、利益の爭ひの如し。次ぎには、吾人の常識に訴へて、見苦しく、汚く、あさましく、不愉快におぼゆる情想、活動、事がらなどは、すべて詩想をなす材料にあらざるなり。一例を示せば、美人が睡後のねみだれ髪、紅顏が老後の枯容は、敘景詩の材料なるべけれども、美人が寢そべりたる姿、老人の水洟（みづはな）は、詩想の材料とはならざる如し。世にはいかなる事がらにても、詩想の材料たるべしと考ふる人あれども、これ、大なる誤解なり。吾人に嫌惡の感を起さしむるものは、決して美なる詩想の材料にはあらざるなり。詩といひ、畫といひ、すべて美術に對しての吾人の樂むべき美感は優美といひ、壯嚴といひ、滑稽といひ、さま〳〵なるべけれど、すべて嫌惡の念の伴ふべからざるものたり。若しこれの伴ふあらば、眞に美なる詩にはあらざるなり。

徳川時代和歌復古の一驍將たりし小澤蘆庵の說なりとて、其の門人小川布淑といふ人が雅俗辨中に、

其の情には、雅も俗もあるべければ、雅なる方をよしとして、取り立て取り立て、俗なるを惡しとて削りつゝ、ひたぶるに雅なる人を、眞の歌よみとせむことは、昔今かはるべからず。

とのべたり。こゝに情の雅俗といひたるは、やがて、我が詩想の材料と否とに相當するなり。彼の歌法歌式に狹められたる所謂堂上派が歌道の小天地と浮華に流れたる弊とをなげき、言語の末論にのみ走り來たれる歌界一航の流弊に激して、

言の葉は、人の心の聲なれば、思ひをのぶる外なかりけり。（六帖詠藻）

古へは、大根はしかみ、にら、なすび、ひる、ほし瓜も、歌にこそ詠め。（仝上）

と警語したる蘆庵が外にはあらずといひたる思ひの中にも、慥に雅俗の二種を色別したるなり。これを本として、景樹が「お山に豆腐を出てよべ」の思想までも詩なりと放言したるは、歌人にして歌學家にあらざりし景樹が歌論の失敗のみ。詩想には必ず其の材料の如何を問はざるべからず。

叙事詩の詩想の材料につきて、殊更に注意すべき條件あり。叙事詩の詩想の材料といへば、やがて吾人社會の事件なり。其の中には實際の物語もあるべし、假りに結構せる小說もあるべし。單純なるもあるべし、複雜せるもあるべし。とまれかくまれ、叙事韻文の詩想の材料、即ち、叙事詩に物語らすとする事件は、其の進行波瀾の如何を見るべし。事件には、進行の急激なるあり、徐々なるあり。波瀾の大なるものあり、小なるものあり。叙事の韻文に適せるは、進行の急激、波瀾の大なる事件にある如し。事件の進行の徐々たり、波瀾の度の小なるものは、韻文には適せず。散文の筆を待つをよしとすべき趣き多し。

詩想の材料と成る上に於いては斯くの如く吾人内外の現象の中にはじめよりこれに適せるものと適せざるものとあり。然れども詩想を構成する上に於いて

は、すべての現象多くは道具として用ふべき事は、もとよりなり。前にもいへる如く、わが詩想とは、其の材料の詩的に構成せられたるものをいふ。而して、こゝに道具といふは、其の詩想の材料を構成するに用ふるものをいふなり。すべての現象、大かたはこの道具とは成るを得るなり。蘆庵が古へは歌にこそよめといひたる大根、はじかみ、にら、なすび、ひる、ほしうりは、もとより然り。單に飲食することは、詩想の材料には成られぬものなれど、

にほ鳥の葛飾早稲の新しぼり酌みつゝ居れば月傾きぬ。（眞淵）

といふやうに用ふれば、美はしき詩想を構成するの道具となれり。また、單に吾人が日常生活の所作は、詩想の材料には成らざるなれど、

米洗ふ前を螢の二つ三つ

といふやうに用ふれば、おもしろき叙景の詩想を構成するの道具たるを得たり。

「腹がへつたり飯が喰ひたし」といふ事は、詩想の材料には、到底なられぬものたり。されど、可憐なる鶴千代君が悲しく苦しき情をのべて、

侍士の子といふものは、腹がへつてもひもじうない。

と言ふ時は、誠に悲哀痛切、行路の人をさへに泣かしむべき抒情の詩想を搆成する道具たるを得たるにあらずや。景樹が俳諧歌に、

猫の子は鼠取るべくなりにけり。いかに暮らしゝ月日なるらむ。

といふ如きも、單に猫の子が鼠を取るといふ事は、詩想の材料にはあらぬなり。されど、我が徒らにすぎし月日の感をのべんとするに用ふれば、卑近なれど、なか〳〵に面白き道具と成るを得たりといふべし。親子の喧嘩、利益の爭ひの如き事件は、單にこれをうつすを目的とし、これを詩想の材料とせば、叙事詩の美術品は出來ざるなり。されど、これを、別に一の詩想ありて、それを搆成する上の道具とせばまた用ふべからざるにあらず。かゝる道具として先づ用ふべからざるものは、吾人が常識の耳目に感じて、醜陋卑猥不快、到底見聞に堪へざるもののみなるべし。それも、狂歌などに至りては、なほ用ひ方によりて用ふべきものあるべし。詩想の材料と詩想を搆成する上の道具とは、斯くの如き別あり。世にいかなる事物も詩によむべしと考ふる人々は多くは、此の二者を混同するに基く認見に來る如し。

抒情詩の詩想の材料につきて、殊に一言注意せざるべからざる事あり。吾人の

抒情詩の詩想の材料

たとへば、作家の肺腑出でゝ熱情となるべからざるがごとし

劣性に關したる情想、吾人の生活維持にとどまりたる情想、吾人の常識に訴へて嫌惡の念を起すべき情想は、もとより抒情詩が詩想の材料にあらざる事は、前にのべたる如し。眞に抒情詩の美なるものを成すには、作家の肺腑より出でたる情想ならざるべからず。作家の熱血の溢れたる情想ならざるべからず。こゝに熱したる情想ならざるべからず、こゝに狂したる情想ならざるべからず、やがて、こゝに集注せられたる情想ならざるべからず。輕薄なるを厭ふ、虛僞なるを嫌ふ、集注せられざるを忌む。たとへ題詠の抒情詩にもあれ、單に作り搆へるものとのみ思ふべからず。必ず假りに我が身を其の境遇に置き、心を其の間におき、我が本心を全くこゝに集注せしめて、こゝに熱し、こゝに狂して得たる情想ならざるべからず。悲しみの歌は、我れ自から先づ泣きて作るべし。よろこびの歌は、我れ先づ笑みて作るべし。怒る歌は、我れ先づ怒りて作るべし。抒情詩には、我れはそら涙、そら笑ひ、から意張り、から氣慨、やがて、から鐵砲の如き情想を嫌ふなり。万葉集などの抒情詩の、詞粗笨にして而して其の美感の限りなきものあるは、實に多くは作家が眞情の熱して出でたる情想なれば

なり。言を換へて一言すれば、情想の眞善美なるもの、やがて、情想の誠なるものを採り來たらざるべからず。單に吾人が情想といふのみに求むべからず。よく吾人が情想の中にこもる粹たり誠たるものを開發して、歌はざるべからず。こゝに於いてか、一作家が抒情詩の、はじめて天下の人心を、等しく感ぜしめ、同じく動かし、共に樂しましむるを得るに到るべきなり。彼の阿部の仲麿か故郷を戀ひて、

青海原ふりさけ見れば、春日なるみかさの山に出てし月かも。

と吟ずれば、言語風俗を異にせるから人も、同情の感にしをれたりといひ、八歳の宮が父天皇を慕ひたまひて、

つく〳〵と思ひ暮らして、入相の鐘をきくにも、ぬるゝ袖かな。（太平記）

とのおん涙は、いやしき京童の袖をもぬらさしめ、口々に語たり傳へて、愛吟せられたりといひ、

いかにせん、都の花もをしけれど、馴れし吾妻の花や散るらむ。

病母をきづかひあこがれたる熊野がこの一言は、彼の我慾にくらみはてたる宗盛をして、よその人情の何ものたるを知らしめたるこれ等、皆誠の情想に出てたれば

なり。

古來の有名なる抒情詩の、何時何處其のかをりの絶ゆるとなく、讀者をして愛吟せしむるは、皆この情想の粹、情想の誠を採り來たりて、うたひたるものなればなり。

これを玉にたとふれば、抒情詩の情想は磨きあげたる玉ならざるべからず。玉の眞美、玉の粹は其の磨きあげたるものにあり。こゝに到りて、はじめて誰人も、玉として愛玩すべきなり。情想もよくみがきあげて、其の粹其の誠を發揮し得たる者に至りて、はじめて抒情詩として、愛誦せらるべきなり。

抒情詩の詩想の材たる情想のみにはあらず、すべて吾人内外の現象の、詩想の材となるには、單に其の現象といふさかひにはあらず。必ず、其の現象の中にこもる粹美の點にあるなり。現象が、詩想の材となるにはあらず。現象の中にこもる粹美が詩想の材となるのみ。されば、詩想を得んとするには、必ずよく其の粹美の點を捉へ來たらざるべからず。例へば、

霞立つ末の松山ほの〳〵と浪にはなるゝ横雲の空。（藤原家隆）

これは叙景詩なり。立つ霞の末に、末の松山がかすかに見えて、冲の方には、横雲が

波にはなれゆくといふことにて、山海共にかすかに明るくなりゆく明け方の景色なり。この優美艶麗なる叙景詩の詩想を得たるは、いづくにかある。もとより目擊したる風景によるにはあれど。目擊したる風景のみにては、この美妙なる詩想は得られじ。よく其の風景の美なる點を捉へ得たればなり。採り得たる風景の美なる點が、この美なる詩想を作り得たるなり。海邊にありて、かゝる景色に幾度かあひたる人は多かるべし。山の方、沖の方かすかに、明くなりゆく景色にあはれ面白やと感じたる人は、多かるべし。されど、よくこれに等しき優美なる叙景詩を得たるをきかず。これ其の風景の中にこもる美なる點を捉らへ得ざればなり。故に、この詩想を成し得ざるなり。而して、この美を採り來たる作家の力は、いづくにあるか。即ち、美的感情美的想像の力にあるなり。

事物を說明したるにすぎざる詩には、あらず。想像

以上說く所を一括すれば詩想といふは、吾人內外の現象の眞美なる點をとり來たりて、美的感情想像の力によりて、これを美術的に構成したるものなるをいへるなり。されば、單に事物を說明したる如きものは、詩想には成らざるなり。例へば、

秋の野に咲きたる花を、および折りかき數ふれば、七草の花。（万葉集）

萩が花、尾花、葛花、なでしこの花、また、をみなへし、藤袴、朝顏の花。（仝上）

一二の目のみにあらず、五つ六つ三つ四つさへあり、双六のさえ。（仝上）

單に、秋野の花を數へて說明したるのみ。七草の花を並べたるのみ。双六のさえの目を說明したるのみ。何にの美の採り來たられたるものなし。何にの美的感情想像の力の加へられたるものなし。何にの美術的に構成せられたるものなし。

何にの美の發揮せられたるものなし。かゝるものはつひに詩想にはあらざるなり。されば、たとへいかなる詩的の材料を採り來たるも、其の構成のさま說明のすがたになりたる時は、詩趣なきものなり。例へば、

月すめば、北良の高根に雪ふりて、眞野の入江に氷りをぞしく。（桂園一枝）

挨拶應答にすぎざるものも、詩想には、あらず。

また、單に、挨拶應答などに過ぎざるものも、仝じく詩想には成らざるなり。例へば、

かしのせに、よくすをつくり、よくすにかみし大御酒、うまらにきこしもちをせまろが父。（吉野國樔人の歌）

右歌にわれもの申す、夏痩せによしといふものぞ、鰻取り召せ。（万葉集十六）

所謂實際、道理に合ふ詩想は、無用の長物なり。

板葺の黒木の屋根は山近し、明日の日取りて、持ち參り來む。（同四の卷）

門さして、戸もさしたるを、何處よか妹は入り來て、夢に見えつる。（仝十二の卷）

門立てて、戸はてしたれど、盗人の穿れる穴より入りて見えしを。（仝上）

詩は、第一篇に言へる如く、事物を分析して、其の智識を與へむとするものにあらず、事物をことわりて其の道理を知らしめむとするにもあらず。かくするは科學たり。故に、若しこれ等の觀察力によりて來たりたる想にあらば、詩想にはあらざるなり。詩は、たゞ美的感情想像の力によりて、吾人内外の自然の現象の美なる點をとらへ來たりて、これを美術的に構成して、眞に其の美を描き出ださむとするものたり。故に、また、所謂實際に反く反かぬ、所謂道理に合ふ合はぬ、これ、詩想の論ずるところにあらざるなり。たゞ詩想の上に必ず注意すべき點は、最もらしきを得るか得ざるかにあり。

詩想に嫌ふべきは、其の最もらしきを得ざる事なり。たとへ所謂實際、所謂道理に合はずとも、最もらしきを得てだにあらば、詩想に論なきなり。科學は、事物を分析して、其の智識を與へむとす。されば、其の實際道理に合はざるべからず。詩は事物の眞美なる點を捉へ來たりて、ある道具を用ひて、これを構成して、其の美を描き出ださんとす。表面の實際道理にとゞまるものにあらざるなり。表面以上に立ちて、其の事物の眞美なる點を組み立てて、表はさむとするなり。されば、所謂實際にあはざるも、決して論ずべきにあらず。唯だ是非に求むる所は、最もらしきを得るにあり。

あかざりし袖のうちにや入りにけん、わが魂のなき心地する。（古今集）

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より、氷りて出づる有り明けの月。（新古今集）

我が魂か他人の袖の中に入るなどいふ事、決して實際にあるべき事にもあらず。さる道理のあるべき事にあらず。また、大空の月影が氷りていづるなどいふ事も、決して實際にあるべき道理なし。されど、誠に別れ難く思ふ人に、つきぬなごりの別れをなして、ひとりうつら〳〵となりてながむる時の心になりて見れば、我が魂の別れたる人の袖の中に入りゆきけんとの想ひは、げに最もともおぼゆべし。世俗も、人に別れてがつかりとしたる時の心もちを、身のもちの物を失ひしやうおぼゆるなどいふも、同じ考へにて、實にさる想ひするものなり。また、水天一色冴えかへ

る夜半、海上遠く一輪の寒月ののぼりたるを見むには、大空の月も氷るといふ想ひも、げにさる心地すべし。實際にあるべき事にはあらねども、さも思はれて、共に尤もらしきを得たる詩想ならずや。實際にあるべき事にあらずとも、尤もらしきを得たるを、おもしろき詩想とす。これに反して、たとへ實際にありうべき事なりとも、最もらしきからざるは、完美なる詩想には成らず。

行くさきに立つ白浪の聲よりも、遲れて泣かむ我れやまさらむ。（土佐日記）

我が泣き叫ぶ聲の、白浪の音にもまさるべしといへるは、前の月が氷るとか魂が袖の中に入るなどいふ如きほどの、實際にあるべからずとおぼゆる考へにはあらず。

同じ音響の比較なればなり。されどいかに考ふるもげにさもあるべしとは考へられぬ事なり。人の泣く聲が浪の音にまさるといふ事は、到底げにとはおぼえられぬ考へなり。されば、つひに滑稽に成りて、あらはさんとせる別離の哀情は、全く聞こえざるなり。其の詩想、尤もらしきを得ざればなり。

水の面にやどる月さへ入りぬるは、波の底にも山やあるらむ。（西行法師）

月の入りたるによりて、今まで水面にうつりたる月影も消えたるなり。それを、水底にも山のありて、かくは水面にうつれる月影も見えずなるかと想像したるなり。「あかなくにまだきも月のかくるゝか、山の端にげて入れずもあらなむ」。月の山の端にかくるゝは、山ある陸地にすめる人には、つねのけしきなり。それによりて、水底にも、山のありて、隱すにやと想像したる詩想なり。海には深淺あり。海底には高低あり。水底の山、實際にはいふべき道理なしとせず。自然にはあへるけしきなるべし。されど、水底に山ありて、水面の月を隱すなどいふ考へは、到底げにと聞かれざるなり。尤もらしきを得ざる考へなり。つひにだじゃれのみ、滑稽のみ。かくの如く、實際の如何は、詩想の如何を定むるものにあらず。唯だ尤もらしきを得ると得ざるとにあり。また、實際にもあるべからず且つ最もらしきを得ざる考へは、もとより完美なる詩には「あらざるなり。

影さへに、今はと菊のうつろふは、波の底にも霜やおくらむ。（坂上是則）

流れにうつる菊の花の影までが、今は限りと、其の色の變はりて見ゆるは、浪の底までに霜がおくにやといへるにて、水邊に萎れ殘れる菊の花をよめるなり。水底に霜がおくなどとは、もとより不自然の事にて、且つ尤もとは思はれぬ考へならずや。

鳴きわたる雁の涙や落ちつらむ、物思ふ宿の萩の上の露。（古今集）

よしや實際には見るべからざる事にもあれ、哀雁の聲に對して、涙の想像は、なほ尤もといふべし。されど、萩の上の露は、雁の涙の落ちつらむとまでに至りては其の實際にあるべからざる事なるはもとより、決して尤もとは聞えぬ考へなり。詩はかゝる詩想を好まず。なほ、これ等の事は、詩想を構成する上の注意としてのぶるかたよろしからむと思へば、こゝにおく。

詩想を組み立つるには、必ず其の命題を明かに心に定めざるべからず。

第二章　詩想の構成

詩想の事は、前章に概説したり。さて、この詩想なるものを、いかにして構成すべきか。いかに構成せば、美なる詩想たるべきか。これ、この第二章に與へむとする注意なり。

詩想の構成とは、詩想を組み立つるをいふ。詩想を組み立てんとするには、作家は、必ず其の命題を明かに心に定めざるべからず。命題とは、やがて主想なり。主想とは、詩想の中の主たる思想なり。やがて、作家が歌はんとする根本の思想なり。

この根本の思想に、種々の道具を用ひて、詩想はこゝに組み立てらるゝなり。換言すれば、主想は詩想をつゝめたるものなり。更に之れをつゝめたるものを、題目といふ。題詠の韻文の題といふは、やがて、この題目なり。今、一例を示せば、

人の親の心は、闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。（藤原兼輔）

この短歌にては、親の心はすべて子の可愛さには迷ふといふが、主想なり。さて、闇などいふ道具を用ひて、親の心は闇にはあらされど、子を愛する道には迷ふといふ詩想は、組み立てられたるなり。而して、この歌の題をことわりて、親の愛情と書する時は、それが、即ち題目なり。

君來ずば、寐屋へも入らじ、こ紫わがもとゆひに、霜はおくとも。（古今集）

この歌の主想は、いかに深夜になるとも、必ず寐ずに待つといふ事なり。さて、もとゆひの霜などいふ道具を用ひて、よしや夜更け霜ふかく、もとゆひにも霜の結ぶとも、いつまでもねづに君を待つといふ詩想は、組み立てられたるなり。これに題を置きて、貞節なる妻の情と書する時は、それぞ想目なる。題目は、主想の歸するところを、一言にまとめたるものにて、詩想は主想の組み立てられたるものなり。以上の例は、短き抒情韻文なり。長きものに至りても、叙事韻文に至りても、同じ事なり。

題詠には落題を嫌ふ。

命題やがて、主想ありて、詩想は組み立てらるゝなり。

所謂題詠の歌、即ち、假りに題を設けて韻文をつくる時には、この題目が與へられ居るなり。この時には、先づその題目を明に心にとむることを、必要とす。然らざれば、落題、やがて、題はづれとなりはつる怖れあるなり。題はづれとは、山の櫻といふ題にて、單に櫻の歌をよみ、秋の月といふ題にて、たゞに月の歌をよむ類なり。また、深山の花の題にて、山の花はよみたれど深山の意なく、池上の月の題にて、水上の月はよみたれど池上の意なき類なり。すべて、完全に問題の意をあらはし得ざる歌をいふ。一の美を描き出でたる詩想だにあらば、さる事を論ずるは要なきやうなれど、題詠の上には嫌ふべきなり。如何となれば、題詠は、もと詩想詩技を練磨養成する爲めの業なれば、其の問題の存する所に於いて、一の美なる詩想を捉へ來たり、美なる詩技を得る事を工夫せざるべからず。かくてこそ、詩想詩技は豐富に堪能に、詩才は發はれ磨かれゆくなれ。されば、題詠の時には、先づ明かに其の題目を心にとゞめ、さて、其の題目の存ずる所に、充分に詩想を思索すべし。

されど、題にはづれぬやうにといふ事は、必ず題の文字を詠み込むべしといふにはあらず。落題と否とは單に題の意にはづるとはづれざるとにあるなり。決して題の文字を詠みこまず詠みこめりの如何にはあらず。題の文字は、一字もあらずとも、題の意の明かにこもりてだにあるをよしとするなり。僅に題の文字を詠みてみたるのみにて、やうやくに其の題意にあいたるばかりの歌は、反つて、いと拙きものたり。題の文字は、少しも一首の詞の上にはあらはさずして、よく其の題の意を聞かするは、なか〳〵に面白き詠みざまなり。

題をまはしてよむ事。

落花

殿守りの伴のみやつこ、心あらば、この春ばかり朝ぎよめすな。（藤原公忠）

この一首、詞の上には、題の落花の文字は、更に見えず。されど、其の落花の題のこゝろは、充分に聞えたり。此の春ばかり朝の庭掃除するなといひまはして、落花の面白きけしきを、あらはしたる詠みざま、誠に妙ならずや。

紅葉浮水

筏士よ、待てこと問はむ、水上はいかばかり吹く峯の嵐ぞ。（藤原資宗）

これは、大井川に遊べる時、紅葉浮水といふこゝろを題にして、よめるなり。紅葉の

題詠には傍題を嫌ふ、

おびたゞしく大井川に浮びたる景色なり。それを、表面より言はずして、わざとまはりて、筏士に水上の嵐はどれほど烈しく吹くなるかと問ひて、其の紅葉の浮べる景色をあらはしたるなり。やはり題の文字は一首の詞の上にはいはずして、其の題の意をいひまはして聞かせたる詠みざま、おもしろしといふべし。

然れども、此の詠みかたは、初心の人は大に注意すべきものたり。猥りにならひて、其の不明にならぬやうにすべし。

鶴洲に立てり

浦わきて、風や吹くらむ沖つ浪同し所に立ちかへりつゝ。（凡河内躬恒）

この歌などは、同じく題の詞をかくして、いひまはしたるものなれども、其の意やゝむづかしく、明に聞きとれがたくなりたりといふべし。

また、題詠の上に傍題といふ事あり。其の題目を主とせず、それを客として、他の主想をよむ事なり。例へば、

朝草花

あけぬとて、野べより山に入る鹿のあと吹き送る萩の下風。（藤原通光）

題を客として他の主想をよむはよし。

この歌題の朝草花の意は、たゞあけぬとてと萩との上にことわりたるのみにて一首の描くところは、鹿の音の山べに遠くなりて、朝風のそよ〳〵と吹く萩野のけしきなり。題の草花を主として、歌へるにあらず。草花は、詩想中の客にて折りからの風景が主たり。

秋雨

雨ふれど笠取り山の鹿の音は、なか〳〵よその袖ぬらしけり。（六百番歌合）

雨ふれどとはあれど、秋雨を主としてよめるにあらで、鹿を主とせる歌なり。題の秋雨は、よその客となりて、一首の主想は鹿にあり。題目を一首の主想とせず、これを客として、わきに置く故に、かゝるものを傍題といふなり。題詠にはこれをも嫌ふなり。されど、落題のほどに嫌ふべきものにはあらず。題目を客として、他の主想をよむはもとよりすべて難ずべき事にあらず。唯だ餘りに題目の意の輕くならむを嫌ふべきなり。

關路鶯

鶯のなけども未だ降る雪に、杉の葉白き逢坂の關。（後鳥羽院）

主想の注意

長篇の詩想の組立につきて主想の注意

の如きも題目は關路の鶯なれど鶯を主としてよめるにあらず。たゞ鶯もなきながらなほ雪は降りて、杉村の木ずゑ眞白に見わたさるゝ早春の逢坂の關の景色をよめるなり。鶯は客にして、風景が主たり。されど、かばかりのものは、決して嫌ふべきにあらざるなり。前の二首と比べ見よ自から悟らるゝところあるべし。以上、題目にはづるといひ、餘りに題目を傍にすといふ、皆題詠の稽古の上につきての注意たり。作家が實際の感にいてたる詠には、無用の言のみ。此の場合には主想ありて後の題目なければなり。

さて、すべて詩想を構成するには、主想を先づ明に心にとめて、これに離れざるやうに注意するを必要とす。然らざれば、主想を完全に組み立つること能はず。よく主想をあらはし得たる詩想を成す能はざるなり。長き韻文に至りては、殊にこの注意を要するものあり。初學の人の長篇の作、往々其のいふ所の混雜雜澁に陷り、甚はたしきは支離滅裂の失敗を來たすは、多くは此の主想の注意足らざるにあり。いかなる複雜の詩想、いかなる長篇にもあれ、必ず一篇を貫通せる大趣旨なかるべからず。これやがて、主想即ち命題なり。詩想は、此の主想を敷衍して組み立

詩想の三段の組織法

てられたるものなり。此の組み立つる間に、必ずこの主想を中心とせざるべからず。いかに敷衍するも、必ず此の主想の大綱によりてつながれざるべからず。いかに徑路に立ち入るとも必ず此の主想の本道を守りて進まざるべからず。故に、先づ明に主想をわが心に記し、常にこれを守りて離れぬやうにせざるべからず。初心の人は、詞藻に乏しき詞藻の工夫に苦しめらるゝ間に、知らず〳〵此の主想を守るを忘るゝが故に、多くは、いふ事の紛亂混雜不明に陷るものなり。また、初心の人の弊として、ふとわが思ひ浮べたる、或は、他に見出てたる詞や想の、そゞろに面白げにおぼゆるものありて、是非にこれを其の詩作の間に用ひむとして、また知らず〳〵此の主想を守るをわすれ、あるは、よくも適せず、あるはさせる用もなき、あるは全く關係なき事などを挾みて、折角のおもしろかるべき詩想を破り去る事あり。何處までも主想を離れぬやうにとの注意は、誠に初心の人が第一の指南車たりといふべし。

さて此の主想を守りて詩想を組み立つるに當りて、次に用意すべきは、いかにいひ起し、いかにいひつゞけ、いかにいひとゞめむかの三段の結構なり。修辭學の上

にいふ所謂冒頭展開、結尾なり。我が詩想を他人に訴へて、感動せしめむとするはなほ戰つて敵を崩せしめんとするに等し。戰ふには先づ陣立てを要す、詩想の組み立てにこの三段の組織を要するは、やがて、この戰ひの陣立てに同じ。味方の如何、敵の如何、陣立ての形はこれに應じて種々なるべし。我が主想の如何讀者の如何、これに應ずる三段の組織は、同じくさま〳〵の形ちあるべし。形はともあれ、詩想には此の三段の陣立てを要す。此の陣立ての整々たるを得て、詩想は強く他を動かすを得るなり。

さて、此の三段の中に於て、先づ冒頭を工夫すべし。いかに言ひ起さむかを工夫するなり。こゝに殊に要するは、人の注意を喚起せしめむ力なり。次に、豫め結尾を案じおくべし。いかに言ひとゞめむかを考案し置くなり。こゝに殊に要するは、よみ終つていよ〳〵盡きざる餘韻なり。次に展開の考案なり。展開は、冒頭をうけて、結尾に轉ぜしむるまでの段にして、わが歌はむとする情想、事がらの、複雜に進行し行くところなり。こゝに於いて殊に要するは、他をして迷はしめず、離れしめず、厭かしめずして、誘ひゆく力なり。故に、殊に順序ある進行を要す。また主想

を忘れざる注意を、殊に必要とす。わがいふ事の亂れて支離滅裂に至るは、多くは此の段の筆の如何に存す。是非に固く主想を常に心にとゞめおきて、順序正しく事を並べゆきて、自から結尾に入るを得るやうにせざるべからず。故に、初心の人、長篇の韻文を作らむとせば、先づ明に主想を定め、さて、いかにこれを敷衍し構成せむかの大躰の筋を、豫め考へおき、而して、其のいはんとする所の筋を、豫め數節に分かちて、順序よく並べおくべし。即ち、第一節は一篇の筋の起り、第二節はこれをうけていかなる事をのべむ、第三節は次にいかなる事に入らむ、第四節はさていかなる事にうつりゆかん、第五節はいかなる事に出でて、これを結びとめむといふやうに、一篇の筋の大綱を分かちて、數部の節とし、一節毎の一部の考へを定め、此の節を順序よく並べおくやうにするなり。もし、これを腦裏に定めおく能はずば、一節毎にいはんとする所の要點を、一筆書きにして、豫め順序よく、其の筋を追うて、書き記しおくべし。而して、この一部一節の想の順序、やがて一節一節の順序は、前節は後節を生み、後節は前節にはらまるといふやうに、前後よく密接の連絡をもたしめ、而して、自から結尾の節に至り得る事を心がけて、その順序を定むべし。こ

詩想を構成するには、むきだしを嫌ふ。

詩想を構成するには、婉曲を尊ぶ。

ゝに節といふは、通例、文章にて行をかへざる間の事なり。英語にていふパラグラフなり。さて、一篇の中の此の節の數は、もとより其の詩想の如何に應じて、作者の隨意たるべし。前陳の作法は、甚だ窮策に似たれども、我が經驗、長篇の作歌には、一篇の詩想のよく整ひ、いふ事の亂れざるを得るのたよりたり。

詩想を構成するには、多くは餘りにむきだしにいふを嫌ふ。彼の露骨なるを嫌ふとは、即ち、これなり。嬉れしいとか悲しいとかいふ情を歌はむとするに、直接にむざ〳〵と悲し嬉れしとのみいひ出づる類なり。即ち、主想をやがてむきだしにのみにいひ出づる事なり。むきだしにのみ言ふ時は、風韻情致は淺くなるものなり。

詩は作者の感情想像の力に成る。詩の讀者を樂ましむるも、また其の讀者の感情想像の力による。むきだしにのみいふ時は、一首の詞の外にかくれたる意なし。一首の詞と共に、其の意は全く盡く。讀者の感情相像をはたらかしむる餘地に乏し。從つて、其の感情薄し。詩は、讀み去つて、再讀三讀、いよ〳〵味ひて、いよ〳〵其の風韻情致の深くうかぶものあるをよろこぶ。故に、むきだしにのみよむを嫌ふなり。むきだしに我が主想をあらはすをよろこばず。こゝに、婉曲なる口つきを尊ぶ。婉曲とは、むきだしにうちつけて言はずして、心をまはして言ふ事なり。

例へば、西行法師が歌に、

路のべに清水流るる柳蔭、しばしとてこそ立ちどまりつれ。(新古今集)

夏の旅路、とある清流の岸の柳蔭に息ひたるに、いかにも涼しくして、立ち去りがたくて、思はず長く時をうつしたる意なり。それを、うちつけに言はずして、ホンのしばしの間息まむとて立ちどまつた事であつたと言うて、立ち去り難く思はず長くなりたる意をきかせ、さて、其の柳蔭の涼しさをのべたるなり。婉曲なるいひざま、誠に面白からずや。これを、彼の凡河内躬恒が

行く末はまた遠けれど、夏山の木の下蔭は立ちうかりけり。(拾遺集)

に比べなば、如何。躬恒のも、夏の山路の旅路、傍の木蔭にしばしと息ひたるに、其の涼しさに、行く道はなほ遠しと知れど、こゝを立ち去りかねたりといふ意にて、同樣の情景なり。されど、「立ち憂かりけり」といひたるは、むきだしなり。從つて、西行の歌に比ぶれば、其の風韻情致の劣り、感大に薄し。また、在原業平の

戀ひせじとみたらし川にせしみそぎ、神はうけずもなりにけるかな。

これは、かひなき戀ひの苦しさに堪へずして、今は神をたのみて、この戀慕の情をはらひ去らんとて、川べに出でて、祓ひをしたれど、なほ戀慕の情のとゞまらず、いやまし思はるゝ意なり。それを、なほ戀しと言はずして、「神はわが願ひをうけずもなりにけるかな」と、婉曲に言ひたるなり。これを、貫之の

つらき人忘れなんとてはらふれど、みそぎかひなく戀ひぞ增される。

に比べなば、如何。全く同じ意匠の歌なり。されど、「みそぎかひなく戀ひぞまさる」といひたる貫之のは、露骨なり、むきだしなり。業平が婉曲の詠みざまは、慥に數等の勝される詩韻を覺ゆべし。なほ一例をとれば、西行法師の

吉野山去年のしをりの道かへて、まだ見ぬ方の花や尋ねん。（新古今集）

主想は、吉野山の花の多しといふ事なり。それを、かく去年見ありきたる方の路はかへて、今年はまだ見ざる方の花を見ありかんといひて、一度の春には見つくされぬほど花のあるよしをきかせ、其の主想を婉曲にいひあらはしたるなり。これを、吉野山、霞の奥は知らねども、見ゆるかぎりは、櫻なりけり。（八田知紀）

に比べなば、如何。知紀のも、主想は全じく吉野山の花のおびたゞしきといふにあり。されど、「見ゆるかぎりは櫻なりけり」といひたるは、西行の婉曲なる作には及ばざるべし。なほ、左の歌の如きは、婉曲にして妙を得たる一例なり。

初戀

君により思ひならひぬ、世の中の、人はこれをや戀ひといふらむ。（古今集）

子を殘して、子の亡くなりたる時（和泉式部）

とゞめおきて、誰れをあはれと思ふらむ。子やまさるらむ、子はまさりけり。

時鳥を待ちて

いかにせむ、來ぬ夜數多の時鳥、またじと思へば、村雨の空。（藤原家隆）

されど、韻文のよみ方は、毎時も必ずかゝる婉曲にのみいひまはすべきものと限りたるにはあらず。抒情などには直接にうちつけたる方、反つて痛切なるを得る事もあり。されど、此の場合にも、婉曲といふまでにはあらずとも、其のいひまはし方には、考案を要するなり。單に唯だそれを平語に並べたるのみにては、不可なり。たゞに眞のむきだしにては、不可なり。いかにむきだしなりとも、其のいひまはし

詩想を構成するには、溫籍を尊ぶ。

方に、妙趣の存せざるべからず。

此の婉曲なる手ぶりに似て、抒情詩の詩想の上に考ふべきは、溫籍といふ事なり。

我が主想を、其の主想のあるまゝ行くまゝに、強くきびしく直接にいはずして、反つて、おだやかにやはらかに間接に訴ふるにあり。例へば、主想は人を怨むにあり。

それを、其の怨む心の行くまゝに、恨めしや腹立たしや嫉しやと、きびしくのゝしらずして、反つて、怨む心は無きやうに、または、その人の幸福を祈るやうにも、おだやかにいひて、間接に其の情を訴ふるにあり。このやはらかなる手振りに出づる方、反つて、強く人の情を動かすものあるなり。白樂天が王昭君を詠じたる歌に、

漢使却迴憑寄語　黄金何日贖蛾眉　君主若問姿顔色　莫道不如宮裏時

（白氏長慶集十四の卷）

これは、樂天が假りに王昭君になりてよみたる趣向の歌なり。胡國にやられたる王昭君の身にて、一言の恨みも悲しみもなくして、反つて、其の無情なる故郷の君王を慕ふやうに言ひたる、此の詩の感ふかく、限りなき詩趣を得たる所たり。若しこれを君王の無情の怨めしやと訴へむには、哀むべき王昭君が當年の心事に對して

の讀者の同情は、大に減ぜられ、詩趣は沒却せらるべきならずや。彼の古今集に出てて、讀人知らずの

我が庵は三輪の山もと。戀ひしくば、とふらひ來ませ、杉立てる門。

の如きも、其の一例なり。これは、三輪の大神などのよめるものなどの傳說もあれど、いかでさる事のあるべきならむ。これは、必ず我が思ふ人などにすてられて、浮世の厭はしくなれるまゝ、三輪の山麓に隱遁したる人の吟なるべし。さるに、我れにつらき世、我れにつらき人を、恨めしとも憎しとも、更にいはずして、今は到底我れを戀ひしく思ひたまふ事はあらざるべけれども、若しさはいへ戀ひしく思ひたまふ事あらば、いつにても訪ねたまへといひて、我が閑居をしらせたる詩想、誠に面白き溫雅なる詩趣を得、其の情やさしく可憐に掬すべきものあるを得たり。彼の伊勢物語の

風吹けば、沖つ白波立つ田山、夜半にや君が一人越ゆらん。

なども、もとより溫厚貞烈なる妻女の至情、自からこゝに出てたるにて、殊更に作りこしらへたるにはあらざれども、其のうかれはてたる良人の心を改悛せさせ得た

詩想を構成するには、道理にまじふべからず。

るは、蓋し恨めし嫉しと角をはやさずして、反つて、良人の夜路を氣づかひたる妻女のおだやかにやさしき所にあるにあらずや。

次に、詩想を構成する時には、合理的に物をいはむとするは、必ず無用の業たり。否、反つて、詩の本意に反くものなり。例へば、寒天の冬月を見て、月も氷るとおぼえぬ。こゝに、直ちに月氷るとのみいひて、可なり。さるに、月の氷るといふ事は、道理上いかならむ。かく覺ゆるは、唯だ我が眼に見る所たり。されば、「月の氷りて見ゆる」「氷ると見ゆる月」といはんとする如きわざなり。詩想の構成には、決してかゝる道理を交ふべからず。

逢坂や、木ずゑの花を吹くからに、嵐ぞかすむ關の杉村。（宮内卿）

山風に曇りもあへぬ村時雨、名殘りは月の影よりぞ降る。（寂蓮法師）

今はとてたのむの雁もうちわびぬ、朧月夜のあけぼのの空。（仝人）

大空は梅のにほひに霞みつゝ、曇りもはてぬ春の夜の月。（藤原定家）

片岡の麓の稻葉末さわぎ、月より落つる峯の秋風。（藤原良經）

故郷へかへる雁がねさ夜更けて雲路に迷ふ聲きこゆなり。（新古今集）

詩想を構成するに、なほ大切なる道具を擇ぶべし。

見わたせば、柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける。（貫之）

朝なぎに網引やすらむ、菅浦の霞をつたふ海士の呼び聲。（香川景樹）

はな〳〵と神代をかけて見わたせば、雲居につゞく天の橋立。（仝人）

家路まで送らむ月の影ながら、別れてかへる心地こそすれ。（仝人）

以上の歌の圖點を附したるところを見よ。皆、道理より見ればいかならむ。されど、少しも道理を交へずして、かくのみ言ひたり。かく道理を交へずして言ひたるが、皆この歌の面白きところたり。叙景の時には、必ず此の心得なかるべからず。

次に、詩想を構成する道具には必ず其の主想に適切なるものを撰ばざるべからず。道具の事は、前章にのべたり。詩想は、必ずある道具を用ひて、主想を構成したるものなり。此の道具、適切ならずしては、主想は雄勁に描き出づる事は能はざるべし。

人の親の心は、闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。

君をおきて、あだし心を我れ有たば、末の松山波も越えなむ。

山はさけ、海はあせなん世なりとも、君に二心我れあらめやも。

昨日といひ、今日と暮らして、あすか川流れてはやき月日なりけり。
末の露本の雫や世の中のおくれ先き立つためしなるらむ。
あふ坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒。
わが宿の一むらすゝき刈りかはむ君が手馴れの駒も來ぬかな。（小町の姉）
山里の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねに花ぞ散りける。
露にだにあてじと思ふ人もしぞ時雨ふるころ旅に行きける。（壬生忠見）
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ。（藤原定家）
霜まよう空にしをれし雁がねの歸へる翅に春雨ぞふる。（仝人）
大堰川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山櫻かな。（香川景樹）

以上の歌の圏點を施したるところを味へ見よ。其の詩想を構成するに用ひたる道具、誠に適切にして、一篇の主想、これによりて雄勁にあらはれ得たるにあらずや。かゝる道具のみにあらず、單に其の詩想を構成する上の助けに用ふるにても、なるべくよく適切なるを工夫すべし。彼の徒然草に見えたる

昔見し妹が垣ねは荒れにけり茅花まじりの蓮のみして。

の如き、下の句の意匠は、荒れたるさまを描すなれば、何にてもよろしきやうなれど、こゝにては、茅花まじりの蓮にてこそ面白けれ。また新古今集の

山深み春ともしらぬ松の戸に絶えゞかゝる雪の玉水。（式子内親王）

の如き、山家の戸は何にてもよけれど、こゝにては、松を用ひたるにて、一層面白きを得たるなり。定家卿が山家雪の歌に、

まつ人の麓の道は絶えぬらむ軒端の杉に雪おもるなり。（新古今集）

の如きも、軒端の杉は山家のさまなれば何にてもよろしかるべし。されど、杉を用ひたるが、人を待つ意に對して面白きなり。此の注意は、韻文に大切の事なり。

歌枕、やがて名所を用ふるなどにもこれに同じき注意を要す。よくその詩想に適ひまたよく其の詩想を助くるを擇ぶやうに心がくべし。

關路聞鶯

再びは越えじと思ふ陸奥のいはでの關に鶯のなく。（香川景樹）

橋上秋夕

秋風の寒き夕に、つの國のさびえの橋をわたりけるかな。（仝人）

一首の詩想の上に、面白くもひゝき得たる名所の用ひ方ならずや。この二首のらばともあれ、若し殊更に用ふるにあらば斯くの如き技術の眼より擇ぶべし。猥りに用ふべからず。

次に古來の短歌の上に、多く見る趣向なれども、彼の單に言語の縁によりて、詩想を組み立つる事は、嫌ふべき事なり。例へば、

寄若菜述懷

澤に生ふる若菜ならねど、徒らに年をつむにも袖は濡れけり。（新古今集）

此の歌はつむといふ詞に年を積むと若菜を摘むとをかけ、濡るに水に濡ると涙に濡るとを引きかけ、畢竟するに、一首の詩想は、つむと濡るとの二語より工みて作りたる歌あり。かくの如きを嫌ふべきなり。小細工に過ぎざればなり。

彼の古今集の中の歌屑ともいはれたる貫之が

糸によるものならなくに、別れ路の心細くもおもほゆるかな。

の如きも、心細しの細しと糸の細しとの縁によりて、畢竟するに、細しといふ詞より作りあげたる細工歌のみ。我が國の短歌には、この弊多し。古今集の春秋の部のみを見るも、

單に詞の縁より、詩想を作るべからず。

梅の花にほふ春べは、くらぶ山、闇に越ゆれど、しるくぞありける。

秋の野に、人まつ虫の聲すなり、我れかと行きて、いざとふらはむ。

女郎花、うしと見つゝぞ行き過ぐる、男山にし立てりと思へば。

女郎花多かる野邊に宿りせば、あやなくあだの名をや立ちなむ。

主知らぬ香こそ匂へれ、秋の野に、誰が脱ぎかけし藤袴ぞも。

吹くからに、秋の草木のしをるれば、うべ山風をあらしといふらむ。

これは、單に一二をあぐるのみ。これ等は、皆、僅に一二の詞の縁にすがりたる纖巧なる歌のみ。かゝるを、我れは、大に嫌ふべきものとす。されど、縁語を用ふるといふ事は、我が韻文の上の妙技にして、且つ、必要なる事たり。それは、後の章に於いてのべべければ、こゝに言はず。

詩想の構成には理屈的なるを嫌ふ。

次に、詩想を構成するには、理屈に出づるを、大に嫌ふ。これも多し。同集の全部、

白露の、色は一つをいかにして、秋の木の葉を、千々に染むらむ。

詩想の構成には説明躰を嫌ふ。

宿りせし花橘も、かれなくに、など時鳥聲絶えぬらむ。

時鳥、ながなく里のあまたあれば、なほ疎まれぬ思ふものから。

あはれてふことを、あまたにやらじとや、春におくれて、獨り咲くらむ。

吹く風と谷の水としなかりせば、み山隱れの花を見ましや。

吹く風に誂へつくるものならば、この一本はよきよと言はまし。

枝よりも仇に散りにし花なれば、落ちても水の泡とこそなれ。

いかで猶、網代のひをに言問はむ、何によりてか、我れをとはぬと。（拾遺集）

いかなれば、紅葉にもまだあかなくに、秋はてぬとは、今日をいふらむ。（仝上）

歌はもと理屈をいふものにあらず。されば、かくの如く單に理屈に組み立てたる詩想は大に嫌ふべし。詩の韻致なければなり。

また詩想を構成するには、説明躰なるを嫌ふ。單に事物を説明するやうに言ひあらはすなり。例へば、拾遺集六の卷に、

草枕、われのみならず、雁がねも、旅の空にぞ、鳴きわたりける。

の如し。主想は、悲哀の感深かるべきものたり。されど、その發表の方法、單に説明

柯の想像も考案もなきを嫌ふ。

するやうになりたる故に、何にの悲哀の感も覺えず。仝じく十一の卷に、

海もあさし、山も程なし、我が戀ひを、何によそへて、君にいはまし。

の如きも、かくづか〳〵と説明したるのみにては、何にの風趣もなきにあらずや。

なほ古今集の歌に、

春霞、色の千種に見えつるは、たなびく山の花のかげかも。

霞立つ春の山べは、遠けれど、吹き來る風は、花の香ぞする。

秋風に聲をほに上げくる舟は、天のとわたる雁にぞありける。

歌はもと事物を説明するものにあらず。されば、かくの如く、詩想の組み立てにも、單に説明するやうの口つきを嫌ふなり。これも、詩の韻致に乏しければなり。

次には、何にの想像もめぐらさず、何にの考案も用ひず、平語にむきだしに言ひたつるを嫌ふ。おなじく古今集の歌より、一二の例を示せば、

待つ人も來ぬものの故に、鶯のなきつる枝を折りてけるかな。

梓弓はるの山べを越え來れば、道もさりあへず、花ぞ散りける。

ひぐらしの鳴きつるなべに、日は暮れぬと、思ふは、山の蔭にぞありける。

忘想を嫌ふ。

萩の露、玉に貫かむと、取れば消ぬ。よし、見む人は、枝ながら見よ。

獨りのみ詠むるよりは、女郎花、わが住む宿に植ゑて見ましを。

かゝる口つきは、全く詩韻詩趣のなきものたり。

歌には、必ず想像考案を要す。然れども、忘想を嫌ふ。忘想とは、自から人の心に尤もらしく聞かれざるをいふ。此の事は、前章の詩想の欄にものべたり。なほ、古今集より一二の例をあぐれば、

しめやかなる考案を要す。

秋の夜の露をば露とおきながら、雁の涙や野べをそむらむ。

木傳へば、おのが羽風に散る花を、誰れに負せて、こゝら鳴くらむ。

聲はして涙は見えぬ時鳥、わが衣手のひづをからなむ。

人の見る事や苦しき、女郎花、秋霧にのみ立ちかくるらむ。

秋ならであふことかたき女郎花、天の川原におひぬものゆゑ。

袂より落つる涙は、みちのくの衣川とぞいふべかりける。（拾遺集）

また、歌には、しめやかなる考案を要す。一かどをかしくのみありて、遂に汰洒落にすぎざる如きを嫌ふ。

古歌の口まれ剽竊を嫌ふ。

津の國のほり江の深く思ふとも、我れは難波の何にとだに見ず。（拾遺集）

いかにして今日を暮らさむ、こゆるぎの急ぎ出でても、かひなかりけり。（仝）

名にめでておれるばかりぞ、女郎花、我れおちにきと、人にかたるな。（古今集）

卷向の檜原が奥の稲妻は、すり出だす火の心地こそすれ。（桂園一枝）

時しもあれ、檜原が上に、有明の、つき出でにける鐘の音かな。（仝）

奥山の石つみ車、ちからにも及ばぬ戀ひの道ぞくるしき。（仝）

驛路の鈴のつたへてきゝしより、ふりすてがたくなる思ひかな。（仝）

一時の座興までに戯れによむならば、さもあれ。狂歌ならばさてもあれ。優美なる美術品の韻文には、かくの如き汰洒落は、大に嫌ふべきなり。しみ〳〵と身にしみておぼゆるふしは、更に無きものなればなり。

また、古歌の詩想風姿詞を取り用ひて、更に新しく工夫して詠むこと、やがて、本歌取り、換骨奪胎の歌をよまむ時に、笑止しき猿の物まね、拙き剽竊にならぬやうに注意すべし。本歌取り、換骨奪胎といふは、單に古人の手ぶり口つきを猿まねするのみにあらず。古歌のこゝろすがた詞を、密に我が物に盜み用ふるのみにあらず。

古歌によりてよめる。其き例。

古歌の詩想風姿詞を、我が腦裡にとり來たりて、更にこれを本として、これに我が新しき工夫を加へ、別に一かどわが新しき韻致ある物を作り出だすにあり。例へば、

初瀬の道にて、三輪山を見て、元輔が

三輪の山、しるしの杉はありながら、敎へし人はなくていくよぞ。（拾遺集）

とよめるは、古今集の「わが庵は三輪の山もと、戀ひしくば、とふらひ來ませ、杉立てる門。」の古歌によれり。千五百番歌合に、通具が

梅の花、誰が袖ふれし匂ひぞと、春や昔の月にとはばや。（新古今集）

は、古今集の「色よりも香こそ哀はれとおもほゆれ、誰が袖ふれし宿の梅ぞも。」と、伊勢物語なる業平が「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、の歌によれり。藤原の家隆が「思ふどち、そことも知らず行きくれぬ。花の宿かせ野べの鶯。」（新古今集）は、古今集の素性法師が「思ふどち、春の山邊にうちむれて、そこともいはぬ旅ねしてしか。」との頭ひを實行して、野邊にうかれたるやうによみたり。慈圓が、故郷の花を、

散り散らず人も尋ねぬ故郷の露けき花に、春風ぞふく。（新古今集）

は、伊勢が「散り散らずきかまほしきを、故郷の花見てかへる人もあはなん」の歌によ

古歌によりてよめる惡しき例。

れり。貫之が

あふ坂の關の清水に、影見えて、今か引くらむ、望月の駒。（古今集）

は、万葉集の「蛙なく神なび川に、影見えて、今や咲くらむ、山吹の花。」によれり。また、古今集の

月夜よし夜よしと、人につげやらば、來てふに似たり、待たずしもあらず。

は、万葉集の「わが宿に梅さきたりとつげやらば、來てふに似たり、散りぬともよし。」によれり。また、八田知紀が

網引する舟の夜寒を、身にしめて、ねられぬ妻や、衣うつらむ。

は、其の師香川景樹の「旅にぬる人の夜寒を、身にしめて、誰れ故郷に衣うつらむ。」によれり。以上の例の如きは、皆、おもしろき古歌の取り方、まなび方を得たり。作者の新しき工夫を加へて、別に生新なる面目を有するを得たればなり。されど、西行の「すてはてゝ、身はなきものと思へども、雪のふる日は、寒くこそあれ。」によりて、契冲が

有るものと、身を心にはもたねども、なほ秋風のしむぞわびしき。

と詠みたる、また、紅梅の内侍の「救なれば、いとも畏し、鶯の、宿はととはゞ、いかゞ答へ

む。」をとりて、仝人が

鶯の、宿はと問はゞ、梅の花、誘ひし風や、いかゞ答へむ。

と詠みたる、或は「夏はつる扇と、秋の白露と、いづれか先きに、置かんとすらむ。」をとりて、仝人が

秋はつる木の葉と、冬の初時雨、いづれかさきに、ふらむとすらむ。

と詠みたる如きは、拙き脱化にて嫌ふべし。彼の能因法師の有名なる「都をば霞みと共にたちしかど、秋風ぞ吹く白河の關。」をとりて頼政が

都には、まだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白かはの關。（千載集）

と詠みたる如きも、景物をとりかへたるまでなれど、たゞに口まねに過ぎざる難は免かれざるべし。古歌の詩想風姿詞を、自己の作の本として用ふるは、よし。單に自己の作の本として用ふるにとゞむべし。これを本として、これに自己の工夫を加へて、別に新らしきを作るべし。決してこれが僞物を作る如きことをすべからず。本としたる古歌の想以外に、詞以外に、自家の新しき面目なきを、僞物といふなり。僞物を作るは、心ある美術家の避くべき所たり。長篇の詩想を組み

詩想の構成には餘韻餘情の工夫を尊ぶ。

立つるに、古歌の思想詞を道具として用ふる事は、差支なし。

最後に詩作に最も缺くべからざるは、餘韻餘情のあるやうに工夫する事なり。これは、前にのべ來たれる露骨、説明、理屈を嫌ひ、婉曲、温藉を尊ぶなどいふ中よりも既に自から思ひ到るべき事なれど、殊に大切なれば、こゝに一ヶ條として、更に一言するなり。詞以上に、なほ深き心の殘りてひゞき、聲以上になほつきぬひゞきの殘りてきこゆるをいふなり。並べ終りたる詞と共に、心もつき、讀み去りたる聲と共に、韻致の殘らぬは、感そこに止まり、美こゝにつきて、面白からず。此の點に於いてすぐれたるは、古來の歌集の中にても、殊に新古今集なり。一例をあぐれば、

まつ人のふもとの道は、たえぬらん。軒端の杉に雪おもるなり。（定家）

ふりそむるけさだに人のまたれつるみやまの里の雪の夕ぐれ。（寂蓮）

津の國のなにはの春は、夢なれや。蘆の枯葉に風わたるなり。（西行）

きかずとも、こゝを世にせむ、時鳥、山田の原の杉の村立。（仝人）

故郷は、ちるもみぢ葉に埋れて、軒のしのぶに、秋風ぞふく。（俊頼）

時しもあれ、故郷人は、音もせで、み山の月に、秋風ぞふく。（良經）

詩才は天稟なり。

明日はまた越ゆべき山の峰なれや、空ゆく月の末の白雲。（家隆）

いかにせむ、來ぬよあまたの時鳥、待たじと思へば、村雨の空。（家隆）

以上は詩想、及び、詩想の組み立てにつき、注意すべき條の大略なり。さて、此の詩想を得るは、作者の美的感情想像の力にあり。此の作家の力は、いかにして養成せらるべきか。

第三章　詩想の養成

詩才はもと天稟なり。作家が美的感情想像の詩才は、もと天稟なり。全く此の天稟なきものは、詩作は到底望みなきなり。春花の錦に對しては、單に繁殖の方便にすぎずとのみ感じ、秋葉の紅に對しても、單に葉綠の色素の變はれるなりとのみ思ふの人、花より團子、月より小板の人には、到底、韻文美術の製作は、望みなきなり。詩才は生れながらなり。生まれながらなり、遂に養成せられざるものなるか。曰く然り、曰く然らず。毫釐も詩神の靈を分與せられずして生まれたる人の子は、つひに詩界の者にあらざるなり。されど、詩神が吾人に分與して生まれしむる靈は、

天才も修養を待つ。

もと盲なり。見るべき力は具へたれど、まだ見るを得ざる盲なり。この靈をして、詩眼明かに開かしめ、天地の詩をさとらしむるは、これ、修養の力によるなり。天が與へたる作家の詩才は、もと、かくて詩人たるべき力は具へ居るなり。されど、まだ活動を知らざる力なり。これをして、大に活動せしむるに至るは、修養にあるなり。

詩才は天稟なり。しかれども、かくて養成せられて、其の天稟は發揮せらるゝなり。若し修養の助けなくば、詩才の靈は、盲にして終らむのみ。詩才の力は、活動せずして終らむのみ。天才も、自から其の天才を知らずして終らむのみ。天稟の詩人も、空しく塵俗の間の走屍行肉として終らむのみ。且つ吾人の生まるゝ、詩神の靈を多少分與せられざるは、世に少きをおぼゆ。さるを、生きて詩家として死ぬる人の、世に少きは、此の人世生路の狀態、これが養成の道にあはず、空しく其の靈を、盲にて終らしむるにあり。詩才は天稟なり。而して、かくの如く養成せざるべからざるものなり。

これを養成するの道は如何。これが栞を定むる、甚だむづかしき問題たり。一合二合のしをり、皆人をして富士の絶頂にたどりつかしむる如きものたるを得ざ

詩才養成の道には第一に身を天地の心に置き、詩神の奴となるべし。

次に、多く自然の美を觀察すべし。

れば、なり。これが養成の行路は、到底、繩墨を以てしるされ難し。されど、人の性格は、多く其の身邊の事物、其の境遇の如何によりて作らるゝものたり。これ、實に詩才養成の道に於いて、また大に參考すべき理ならむと覺ゆ。要は、わが身のおきどころ、わが心のもち方にあり。一身を名利の巷に置き、心を名利の奴となすはしはてゝは、名利以外の天地は見る能はず。一身を物質界に置き、心を物質の奴となすはしはてゝは、物質以外の天地は知る能はざるなり。詩家たらむとす、一身を詩の天地に置かざるべからず、一心を詩神の奴となさゞるべからず。詩の天地とは、吾人が衣食住の朝夕、吾人が肉塊の世界を出てたる所にあり。詩神の奴となるには、先づ吾人が劣情肉欲をはなれて、心を靜に優に清く高くまめやかに切ならしむるにあり。

身をかゝるところに置き、心をかゝるきはに保ち、而して、出入坐臥常に、吾人内外の森羅万象の美を觀察すべし。見ざる所には、吾人の心は答ふる能はず。知らざるあたりには、吾人の想ひは到る能はず。この觀察を積みゆくは、慥に吾人の美的感情想像を豐富ならしむるの道たり。やがて、詩想を養成するの道たらずやは。

多く讀書すべし。

自から多く作り試むべし。

次には、朝夕の讀書なり。讀書は我が眼界を廣からしむ。讀書はわが見識を高からしむ。讀書はわが思ひを深からしむ。讀書は我が技を大ならしむ。詩家たらむとする、讀書の要は明々たるべし。殊に、斯道の書、古來の詩文章は、つとめてこれを讀まざるべからず。舊きをたづぬる、こゝに自(おのづ)から新らしきを知る。多く舊きをたづぬる、こゝに多く新しきを知る。古來の作家が詩想を多くたづぬべし。こゝに自(おのづ)から我が新しき詞想の多きを得べし。然れども、古來の詩文章を遍く讀むといふ事は、容易のわざにあらず。先づ斯道に高くきこえたる古人古書よりすべし。そが中にて、殊にすぐれたるを擇びて、朝夕これを愛讀すべし。我れに愛讀の詩書あり、我れに信仰の詩人あるは、われに心を深からしめて、自からこゝに我が詩想を養ふの道たり。我が國詩を作らむとする人の、先づ第一に讀むべき歌集は、古今集より新古今集の八代集、山家集、月清集、眞淵翁の家集、景樹の桂園一枝等なるべし。

次に詩想を養成するには、自から常にこれを作り試みるにあり。單に吾人内外の森羅万象の美を觀察するのみにては、不可なり。唯だ讀書に古人の思想を聞く

詩想養成に最も必要なるは、平生の熱心なりの。

のみにては、不可なり。これに伴ひて、また自ずから進みてこれを試みざるべからず。自から試みるは、一層吾人の心をこゝにあつめしめて、更に自から吾人に教ふる所あるものたり。

次に、最も必要なるは、熱心なる平生の心がけなり。常に吾が心をこゝに熱注せしめて、物はあれ、折はあれ、あふ折り毎に、見る物ごとに、必ず斯道の眼をとゞめて、我が詩藁の中の材たらしむべし。また、常に、こゝに考へをめぐらし、常にこゝに考へを凝らすべし。かく熱注す、詩想の自からこゝに湧き出づる、いかで多からずやは。

歐陽修は、作文に三多の法を言へり。曰はく、多く古來の文章を讀むべし。やがて、看多なり。曰はく、自ら多く文をつくるべし。やがて、做多なり。曰はく、多く推敲すべし。やがて、商量多なり。この三法を併せ行ふ、名文こゝに成るべしと教へたり。わが詩想養成の道にのぶるところ、また實にこれに似たり。多く觀察し、多く讀書し、多く試作し、多く熱するにあり。而して、この道を得るの本は、身を詩の天地に置き、心を詩神の奴となすにあり。

韻文には、調和せる聲調を必要とす。

第三篇　韻文の外形

此の篇に於いては、韻文に重んずべき聲調につきて論じ、而して、これに伴うて起る韻文の外形の語形句法につきての大道を概說せむとするなり。

第一章　聲調

想なき所に、聲は聞き難し。內容の詩想、これ、實に韻文を成作するの本たり。されど、韻文には、また、これに伴ふ聲調の美を要す。詩想の美、これに伴ふ聲調の美、二者の美相合して、韻文の美は、こゝに成り、こゝに聞くを得るなり。これ、散文と大に異るところたり。散文は、事物を說明して、讀者の理解力に訴へて、これを了解せしむるにあり。故に、正しく言ひて、明かに其の意を通知すれば、先づ足れり。聲調については、強ひて苦心するに及ばざるなり。韻文は、事物の美を言ひあらはして、讀者に美感の快樂を與へむとす。つとめて讀者の感情想像を刺激して、これを活動せしめて、こゝに同情を喚起する力なかるべからず。故に、よく調和せる聲調の美

を以て、讀者の心理に快く訴へざるべからず。讀者の感情想像を動かすの力は、其の想の美なるのみにては、薄弱なり。聲調の美の伴ふによりてこそ、其の力は、はじめて強大なるものあるなれ。なほ、役者が舞臺に立ちて、見物人を感動せしむる如し。單に其の意を獨語對話するのみにては、不可なり。必ずこれに伴うて、よく調和したる擧動のあるを以て、見物人の感は、大に動くなり。韻文の聲調は、宛も此の役者の擧動に似たり。且つ、韻文、すべて詩は、具體的のものたり。詩想の發表は、必ず道具によるなり。道具に、よく調和したるふしあるにあらねば、其の美は、健全に發表せられざるべし。なほ繪畫の美の如し。畫家の着想の美、もとより其の美術の本たり。然れども、其の美のよく看者を感ぜしむるには、よく調和せる色彩の配合を要す。一幅の畫の美、こゝにはじめて完全に認むるを得べきなり。この色彩の調和は、全く此の韻文の聲調の調和に同じ。韻文は、實に調和せる聲調を必要とす。人或は言ふ、今日の韻文は、昔日の如く必ず音樂は伴ふものにあらず、耳に樂しむの詩にあらず、聲調の如何を問ふに及ばずと。これ、まだ聲調の理を知らざるの言なり。調和せる聲調の要は、耳に樂しむのみにあるにあらず。これを默讀して、

調和せる聲調を要するに、韻文にありては、詞句の規律には、文の

心理に味ふ。默讀するにせよ、一種の調を以て、心理に讀み居るなり。この調にして、調和ありてこそ、讀者の美感は、こゝに動かすべきなれ。すべて調和のあるところにして、吾人は美を感ずるなり。耳より入りて心に感ずるによりて、調和せる聲調を要するにあらじ。心に美を感ずるには、皆、必ず調和せる聲調を要するなり。讀者の心理に流れ込む一種の聲調にして、よく調和したるものたるを得てこそ、其の韻文の力は強大にして、讀者の感情想像は大に刺激せらるべきなれ。こゝに、其の韻文の美は、充分に其の目的を達すべきなり。

いかに美なる詩想にせよ、此の調和せる聲調なくば、其の詩想の美は、心地よく讀者の心理に流れ込む能はず。讀者は心地よく其の詩想の美を感ずる能はず、其の韻文の美を樂しむ能はず。

第二章　聲調と韻文の規律

韻文は、實に聲調の調和を尊ぶ。さて、此の聲調の調和の本は、いづくにあるか。國語を成立せる音韻、其の音韻の配合の工合、これ、實に聲調を得るの本たり。これ

律ある形式を用ふ。

四詩の形式の平仄法

漢詩の平仄法

によりて、韻文は、外形の語句に、規律ある形式を定む。其の形式は一樣ならず。

西洋には、シレブルの長音短音を本として、此の形式を定む。シレブルとは、コンソナント(發聲)ボエル(母音)の二個以上相合して發する一音をいふ。例へば、*my help less soul* の如し。我が國の單語は、皆、此のシレブルに當たるなり。此のシレブルの音に、長短あり。其の長短をあらはすに、(—)()の符號を用ふ。例へば、my hĕlp lĕss *soul* の如し。此の長短のシレブルの並べ方によりて、種々の形式を定む。即ちミーターの規則なり。ミーターは、なほ漢詩の平仄の如し。長短のシレブルを、二個以上あつめたるものを、平仄の一脚とし、此の脚を並べて、一句(one verse)となし、句を重ねて一節(one stanza)となし、節を重さねて、遂に一篇となすなり。一脚をなす長短の音のあつまり方に、種々の形あり。一句をなす脚の並べ方に、種々の形あり。一節をなす句の並べ方に、種々の形あり。西詩の外形の句式は、こゝに豐富なり。

漢詩の平仄法といふは、皆知らるゝ所ならめど、ついでに一言せむ。漢字の音の聲調を本として定めたる規則なり。字音の中にて、昂らず降らず平かなるを平聲とし、語尾の昂るを上聲とし、語尾の降るを去聲とし、語尾の短く促まるを入聲とす。

而して、平聲のものを平字とし、上聲去聲入聲のものは皆仄字とし、此の平字仄字の並べ方に、規則を設けて、聲調を整ふるなり。平字は○を符號とし、仄字は●を符號とす。此の平字仄字を、五個或は七個まじへあつめたるを、一句とす。五言にして、一句たり。七言にして、一句たり。其の一句の間にて、第二字と第四字とは、必ず平仄を異にす。且つ、七言の句にては、第二字と第六字とは、必ず一致せしむ。所謂、二四不同二六對の規則なり。また、一句の間にて、仄字と仄字との間に、平字の一個挾まるを嫌ふ。所謂孤平の嫌ひなり。此の句に、平起の句、仄起の句あり。平起の句とは、第二字の平字なるをいひ、仄起とは、その仄字なるをいふ。國破山河在は、仄起の五言句なり。城春草木深は、平起の五言句なり。此の平起仄起の句を、二句づゝまじへて、四句重さねたる一篇を、所謂絶句詩といふ。五言の句を四個重さねたるは、五言絶句。七言の句を四句重ねたるは、七言絶句なり。此の重ねたる四句、第一を起句、次を承句、その次を轉句、最後のを結句といふ。此の起句と結句とは、其の平起仄起を全うせしめ、承句と轉句とは、亦其の平起仄起を全じうせしむ。以上を、普通の平仄法とす。一例

秋浦歌(李白)

白髮三千丈(起句)　緣愁似箇長(承句)　不知明鏡裏(轉句)　何處得秋霜(結句)

これは五言絶句なり。各句の二四不同の規則、仄字と仄字との間に孤平を存ぜざる規則は、各句の○●をたどりて、知るべし。髮は仄字なれば、此の起句は仄起の句たり。故に結句も仄起の句たらしむ。即ち處は仄字たり。起句は仄起の句なれば、承句は平起の句たらしむ。即ち愁は平字たり。承句、平起の句なる故に、轉句もこれに仝じからしめ、第二字に知の平字を用ひたり。若しこれに反して、起句を平起の句たらしめば、承句は仄起の句たらしめ、轉句は仄起、結句は平起の句を用ふるなり。

春夜洛陽城聞笛(仝人)

誰家玉笛暗飛聲(起句)　散入春風滿洛城(承句)　此夜曲中聞折柳(轉句)　何人不起故園情(結句)

これは七言絶句たり。家は平字たれば、起句は平起の句たり。故に、承句の第二字は、仄字の入を用ひて、仄起の句たらしむ。轉句は、承句に同じからしむるために、第二字に夜の仄字を用ひ、結句は、起句に同じからしむるために、人の平字を用ひたり。

各句の平仄に、二四不同二六對の規則、仄字の間に挾まる孤平を嫌ふ規則は、○●の記號をたどりて知るべし。

以上は、普通の規則たり。例外も許さざるにあらず。平起仄起の句の並べ方、起句と轉句とを仝じうし、承句と結句とを仝じうせしむる如し。また、稀れには孤平を用ふる時もありて、五言の詩殊に然り。

律詩といふも、平仄の法は仝じ。たゞ、律詩は、八句より成り、平起仄起の句のまじへ方は、絶句詩を二首續けたると、同じ有樣なり。一例

旅夜書懷(杜甫)

細草微風岸　危檣獨夜舟　星隨平野闊　月湧大江流　名豈文章著

官因老病休　飄々何所似　天地一沙鷗

秋興(仝人)

玉露凋傷楓樹林　巫山巫峽氣蕭森　江間波浪兼天湧　塞上風雲接地陰

叢菊兩開他日淚　孤舟一繫故園心　寒衣處々催刀尺　白帝城高急暮砧

また、英詩漢詩は、聲調を整ふる爲めに、押韻の法あり。同じ響を適度に繰りかへ

す法なり。英詩の押韻法は複雜なり。句の末に同韻を繰りかへすは、殊に其の著しきものたり。今バイロンの詩によりて、一二の例を示せば、

(例)Tis done—and shivering in the *gale*
The bark unfurls her snowy *sail;*
And whistling o'er the bending MAST
Loud sings on high the freshing BLAST;
And I must from this land be GONE,
Because I can not love but ONE

(例)Cloud burst, skies flash' oh, *how!*
More fiercely pours the STORM!
Yet here one thoght has still the *power*
To keep my bosom WARM
(例)My soul is dark—oh! quickly *string*
The harp I yet can brook to HEAR;
And let thy gentle fingers *fling*
Its melting murmurs o'er mine EAR.
If in this heart a hope be DEAR
That sound shall charm it forth AGAIN
If in these eyes there lurk a TEAR,
'T will flow, and cease to burn my BRAIN.

第一の例は英國を去る時の詩の第一節、第二の例はピンダス山の風雨の中の作の一節、第三の例はMy soul is dark の第一節なり。其の節毎の各句の末を見よ、同韻を適度に繰りかへしたり。而して、其の繰りかへし方は、一樣にあらざるなり。

句の冒頭、句の中間に於いて、この法を用ふる事あり。また一句の中に於いて、仝一の發聲母音、仝樣の響を繰りかへす法もあり。煩しければ、さまでは記さず。

漢詩にも、押韻の法あり。前にあげたる李白の秋浦歌の各句の末を見よ。第二句と第四句との末に、仝一の平字を用ひたり。而して、第一句と第三句とには、仄字を用ひたり。これ、平字を用ひたる時の五言絶句の普通の押韻法なり。時には、第

一句にも同韻を用ふる事あり。仄韻を用ふる時も、第二句と第四句とを、全一の仄韻たらしむるなり。

聞雁（韋應物）

故園眇何處　歸思方悠哉。　淮南秋雨夜　高齋聞雁來。

春曉（孟浩然）

春眠不覺曉。　處々聞啼鳥。　夜來風雨聲　花落知多少。

また、前にあげたる李白の春夜洛陽城聞笛の歌を見よ。第一句第二句第四句の末に、同じ平韻を用ひ、第三句のみ、仄字を用ひたり。平韻を用ひたる七言絶句は、この押韻の法を、普通とす。時には、第一句は押韻せぬ事あり。仄韻を用ふるも、全一の法による。

送劉判官赴磧西（岑參）

火山五月行人少。　看君馬去疾如鳥。　都使行營太白西　角聲一動胡天曉。

聞白樂天左降江州司馬（元稹）

殘燈無焰形幢々。　此夕聞君謫九江。　垂死病中驚坐起　暗風吹雨入寒窓。

律詩は、五言のは、第二第四第六第八句の末に、同韻を用ふ。七言のは、此の上に、なほ第一句にも、同韻を用ふ。これを普通の法とす。なほ漢詩の長篇なるものにも、押韻の法あれど、煩はしければ略す。たゞ聲調を整ふる爲めに、斯くの如き押韻の法ある事をいふにとゞむ。

退いて我が國の歌を見るに、斯くの如き平仄押韻の定まれる制なし。これ、實に國音國語の性質、歌の聲調を整ふる上に、さまで此の技の妙を感ぜず、殊更に此の技を要せざればなり。我が國の單音は、英語のシレブルに當れど、必ず其の末に母音を有せるもののみにて、英語にいふシレブルとは、其の趣を異にし且つ多樣ならず。しかも、其の音の長短昂低、著しからず。故に、英詩の如く、これを本として、其の聲調を整ふるを得ず。また、我が國語の韻は、單にアイウエオの五母音に過ぎず。發聲の獨立をゆるせる英語の如く、多樣ならず。平上去入の四聲併せて二二六韻もありといふ漢語の如く、多樣ならず。故に、聲調を整ふるに、殊更に押韻の妙を感ぜざるなり。若し我が國語にして、發聲を音尾に有するシレブルの存在するあり、一音の長短昂低著しきを得、韻の多樣なるを得ば、自から英詩の如き平仄押韻の規則

我が韻文は、音數によりて、規律ある形式を建つ。

も存在せるに至りしならむ。

我が國音國語の性質は彼れと異り。我が一音は、彼れのシレブルの如くならず。我が韻は、彼れの如く多樣ならず。されば、これ等の如何によりて、明に韻文の調和せる聲調を得る能はず。而して、韻文には、やがて、人をして美感の快樂を得せしめんとする韻文には、是非に調和せる聲調を要す。こゝに於いて、我が國の韻文は、この法を、音の數に認めたり。所謂、五七の句調、七五の句調の如し。單に音の數によるといへば、甚だ粗なる法の如くといへども、我が國音國語の性質は、實にこれによらざるべからざるなり。音の數の多少は、即ち、語聲の長短輕重の本たり。音數の少きは、短くして輕し。音數の多きは、長くして重し。これを基礎として、調和せる聲調を成さしむるなり。彼れのシレブルに似ざる音の、其の音の長短昂低による能はざる故に、其の音の多少長短輕重によりて、聲調を求むるなり。彼の西洋の平仄法のめづらしさに見とれたる人々は、此の音の數の多少による韻文の形式を、甚だ愚なる迂なるものとして、これをやぶり、これを棄てむとするあれど、なか〳〵に我が國語の性質に迂なる愚意といはざるべからず。

かくて、我が國の韻文、聲調を整ふるの本は、音の數の多少にありとす。音の數の多少は、彼のシレブルの長短にあたるなり。英詩の形式は、この長短のシレブルの配合にあり。されば、我が韻文の句形は、また此の音の數の多少の配合によるなり。さらば、多き音數と少き音數とを、いかに配合せば、美なる聲調を得るか。また、多しといひ、少しといふは、如何なる音數にあるか。これ、我が韻文の道にて、大に研究すべき問題たり。万葉集の長歌の形式は、五音、七音の句を重さねたる行を繰りかへしゆきて、最後に殊に七音の一句を添ふるにあり。而して、此の七音は添へざるもあり。短歌は、七音、七音、五音、七音、七音と重さねるを、普通の形式とせり。今樣歌は五音七音の句を重さねたる行を四個併せたるを、一篇の形とし、發句は五音七音五音を以て句形とせり。俗謠は、七音七音七音五音と配合したる都々逸の形式をはじめとして、大かた、七音と五音との配合によりて成る如し。近時の新躰詩、稀には異形のものあれども、最も多きは七音五音の句を重さねたる行をくりかへし、次には五音七音の句を重さねたる行をくりかへすにあり。

以上の詩形より歸納し來たれば、我が國語の韻文、其の聲調の調和を得るは、七音

五音の配合によるが如し。單に七音五音の配合による、餘りに狹くまづしきに似たれども、もと音數を以て詩の聲調の美を定めむとするなれば、配合すべき音數は、自から狹き範圍内に限らざるべからず。配合すべき音數には、必ず狹き制限を定めざるべからざるなり。すべて、言語を以て吾人の意思をのぶる文は、音の並列せられたるものなり。おなじく音の並列せられたる文にして、我が韻文が、他の散文と離れて、別に聲調の美を以ても、人を樂しましめむとすれば、しかも、其の聲調の美は單に音數に求むべき國語にありとすれば、配合すべき音數に、極めたる制限を用ひざるべからざるは、必然の道理なり。音數の制限をして、若し嚴ならず、音數の範圍をして、若し廣からしめば、音數に自由なる、音數に制限なき散文との差別に乏しく、從つて散文調に陷ち易きは、また必然の結果たらざらんや。七音五音、狹き音數の範圍は、まぬかれざる制限なり。我が國語の性質上、韻文が句形のこの標準は、實にこゝにあらざるべからざるなり。古來の歌躰が皆これによりたる、いかで偶然ならむや。

音數が最も少き最も短き意義を有する一語となるには、やがて、名詞とか、動詞と

得る聲調を形式の基礎、七音五音の配合にあるが如し。

四音以下の句は、美なる聲調を有せず。五音七音と集まるに至りてはじめて最も美なる聲調を有す。

か、一單語を成すには、僅に一個なるも、二個なるも、三個なるも、四個なるもあるべし。葉(は)、花(はな)、咲く、笑ふ、美しなどの如し。然れども、かゝる音數にては、甚だ短く輕くして、未だ美なる聲調を有せず。これ等の單語の重さなりて、五音となり、七音となるに至りてはじめて美なる聲調を有する如し。七音と云ひ五音といへど、多くは、もと、二個以上の單語の集まれるものたり。元來、我が固有の國語には、純粹なる單語にして、五音以上の音に亘るものは、いと少し。例へば、時鳥(ほとゝぎす)、女郎花(をみなへし)、おもほゆる、くちをしく、慰むるなど、五音以上にわたるもあれど、極めて少し。多くは、五音以下の音數にとゞまりて、五音以上のものは、二個以上の語の熟して成れるものゝ如し。例へば、山櫻といへば、山と櫻の熟せるなり。咲きにほふといへば、咲くと匂ふの熟せるなり。うれし涙といへば、うれしと涙との熟せる如し。

さて、何故に、五音と七音とに至りてはじめて聲調の美を有するかと問へば、五音以下の單語を成すのみの音數にては、餘りに短かければなり。何故に、四音以下の音數のみの配合に成る詩形なきかは、即ちこれが爲めなり。かゝる短きをのみつらねても、調和せる聲調は得がたければなり。何故に七音以上の句のみの配合に

なれる詩形なきか。これ即ち前者に反して長きもののみを並べては、また聲調を得がたければなり。古事記などに散見せる歌には三音、四音、六音、八音などさまざまに配合せられたるあり。例へば景行天皇の豐樂の歌に

まきむくの　ひしろの宮は、あさひの　ひでる宮、夕日の　ひがける宮、
たけのねの　ねだる宮、木のねの　根ばふ宮、八百土よし　いきづきの宮。
まきさく　ひのみかど、新嘗屋に　生ひだてる　もゝだる　槻が枝は、ほづえは　天をおへり、中つえは　あづまをおへり、下枝は　鄙をおへり。
ほづえの　枝の末葉は、中つ枝に　落ちふらばへ、中つ枝の　枝の末葉は、下つ枝に　落ちふらばへ、下枝の　枝の末葉は、鮮衣の　三重の子が　さゝがせる　瑞玉盃に、うきしあぶら　落ちなづさひ、水凝　こをろに、是も　あやにかしこし。たかひかる　日の御子。ことの　語りごとも、こをば。

然れども、吾人は、かゝるものを讀みて、到底、韻文としての聲調の美を感ぜざるなり。同じ古事記の舊き歌にても、大躰が七音と五音との配合によりて成れりと見ゆるものは、聲調の美の存ぜるを感ぜらる。例へば、大國主神の歌に、

八千矛の　神の命は、八島國　妻まぎかねて、遠々し　こしの國に、さかし女を　ありときかして、くはしめを　ありときこして、さよばひに　ありとだゝし、よばひに　ありかよはせ、大刀が緒も　未だ解かずて、おすひをも　いまだとかねば、處女の　鳴すや板戸を、おそぶらひ　わがたゝせれば、青山に　鶏はなき、さぬつどり　雉子はとよむ、庭つ鳥　鶏はなく。うれたくも　鳴くなる鳥か、此の鳥も　うち病めこせね。いしたふや　天馳使、事の　語り言も、こをば。

七音と五音とが、我が韻文の聲調の美に大關係ある事は、此の二首の比較にても、誰れ人も首肯するならむ。万葉以來に至りては、歌の形式は、七音、五音の句の配合にあるべきものとなれり。稀れに異る音數のまざるあれど、これは例外たり。雄大なる進歩をなしたる万葉の歌壇に至りて、こゝにかく定まりたるは、此の形式の價値をあぐべき一證たらずやは。それより後、幾多の新機軸は出てたり。されど、形式はつひに七音、五音の配合に出てず。これいよ〳〵我が韻文に於ける七音、五音

の關係の離るべからざるを證明するものならずや。古代には、二音、三音、四音の句の遊離獨立するを認む。さるを、かく七音、五音に定まりたるは、四音以下の音數は獨立して聲調をなしがたしといへる我が說を、誠に證明したるものといふべし。古代には、他の七音五音と同しやうに獨立したる四音、三音、二音などは、こゝに相合して、七音となり五音となりて、詩形の中にあらはるゝ事となりたるなり。國語の性質と聲調の美との關係は、自からこゝに至らしめたるなり。かくて、自からこゝに大に說明せられたるなり。

七音、五音、八音は、六音に近き音なり。聲調のなるものの美ほなり。

我れはいふ、聲調の美の基礎は七音、五音にありと。我れは、必ずこゝにあるべきを信ず。彼の五七五七七の短歌の中に、

一向に死なば何にかはさもあらばあれ生きてかひなく物思ふ身は　（拾遺集）

の如き形式になれるものあれど、別に聞き苦しくもおぼえざるは、つひに五音、七音の配合にすぎざればなり。然れども、韻文は思想をのぶるものなり。詩想こそ主たれ。聲調形式はこれが從たり。聲調形式のみの爲めに、詩想を左右するは、本末をあやまりたるわざたり。七音、五音の配合以外の一歩ばかりは、許さざるを得ず。

古來の歌形に、まゝ五音に一音の餘りたる六音、七音に一音の餘りたる八音は、混ずる事を許したるは、この理による。英詩の一句（one verse）の末に、殊に餘計のシレブルを、一個或は二個を添ふるを許したる、全くこれと同じ理なり。かゝる通例の範圍を出づるは、やむを得ぬ必要ありてにして、而して、聲調の調和をさまで欠かざればなり。

田子の浦ゆうち出でて見れば、眞白にぞ、富士の高嶺に、雪は降りける。（万葉）

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に。（古今）

別れをしき道に、わがまだならはねば、思ふ心ぞおくれざりける。（貫之集）

昔思ふ草の庵の夜の雨に、涙なそへそ、山時鳥。（新古今）

名にし負はゞいざ言問はむ、都鳥、わが思ふ人のありやなしやと。（古今）

志賀の浦や、遠ざかりゆく波間より、氷りていづる有明の月。（新古今）

ほの〳〵と、有明の月の月影に、紅葉吹きおろす、山おろしの風。（仝上）

手をついて、歌申しあぐる蛙かな。

枯れ枝に、烏のとまりけり、秋の暮れ。（芭蕉）

桃つら〳〵、花つくるところ、永長し。（曉臺）

春の彌生のあけぼのに、四方の山べを見わたせば、花ざかりかも、しら雲の、かゝらぬくまぞ無かりける。」花橘も匂ふなり、軒のあやめもかをるなり、夕ぐれさまの五月雨に、山時鳥、名のりして。」秋のはじめになりぬれば、今年も半ば過ぎにけり。わが世更けゆく月影の、傾く見るこそ、哀れなれ。」冬の夜寒の朝ぼらけ、契りし山路は、雪深し。心のあとはつかねども、思ひやるこそ、あはれなれ。」

（慈鎮和尚）

以上列記する韻文どもの（……線）の句を見よ、七音五音の定めにはづれたり。皆、止むを得ずしてなり。而して、少しも聲調を害せねばなり。殊に、かく言はざれば、音の重さなる工合によりて、聲調の美ならざるさへあり。名にし負はばを名に負はゞといひ、志賀の浦やを志賀浦やといひ、有明の月のを有明月のと言はゞ、如何。聲調の美は消ゆべし。また、山おろしの風、歌申しあぐる、烏のとまりけりの如きは、かく八音になりたるによりて、一層に重々しくて、よくかなひたる調を得たるにあらずや。八音は、七音より更に長き故に、更に重々しく聞ゆるふしもあるなり。かくの如く、止むを得ずして自然に出づる場合には、八音、六音の配合、もとより論なきなり。聲調の美の本は、七音、五音の配合にありとすれど、止むを得て一歩を出でては、八音、六音の配合は、こゝに存在すべきなり。されば、聲音の美の存するは、八音以下五音以上の音數の配合による。而して、この音數の配合するさまには、種々あるべし。それは次の章に譲らんとす。

我が韻文更にはなほ殊押韻の規則はあらず

さて、我が國詩は、偖調の爲めに、西詩漢詩の如き押韻の制を言はず、これが制の必要を見ざるによるは、前に論ぜり。まゝ押韻せられたる如き形跡を存じたるものあれど、これ別に押韻すべきこゝろありての事にあらず、自からさるさまを成すに到りたるのみ。例へば、

たきの音は、たえて久しくなりぬれど、名こそながれて、なほきこえけれ。

なつ山になく時鳥、こゝろあらば、もの思ふ我れに、こゑなきかせそ。

志賀の浦や、とほざかりゆく、なみまより、こほりていづる、ありあけのつき。

あり明けのつれなく見えし、別れより、あかつきばかり、うきものはなし。

ゆふされば、野邊の秋風、身にしみて、うづらなくなり、ふかくさの里。

あひ見てのちの心にくらぶれば、昔はものをおもはざりけり。

ふるき都を來て見れば、　あさぢが原とぞなりにける。

つきの光りは限なくて、　あき風のみぞ身にはしむ。

若し同韻あるを以て、これを押韻したるものとせば、この種々の圏標を附したる如く、複雜なるものとなるべし。然れども、これ等によりて、押韻の制あるべき事は、言ひ難し。押韻の制をいふの要はあらじ。俗謠などには、殊に押韻に似たる形跡多し。

舟じや寒かろ、着て行かしやんせ、わしが着がへのこの小そで。

坂はてるてる、鈴鹿はくもる、あひの土山雨がふる。

來いというたとて、行かれよか佐渡へ。佐渡は四十五里、浪のうへ

あらい風にもあてまい樣を、やろか、信濃の雪國へ。

さまと別れて、まつ原ゆけば、まつの露やら、なみだやら。

まゝよ、田舍が、また住みよかろ、ぬしと一處にくらすなら。

これ等の圏點を附したるあとをたどりなば、或は首に、或は尾に、同音を踏みたるが如き觀あらむ。されど、こは殊に聲にあげて謠ふべき俗謠が曲節を求むるよりの自からなる結果なり。必ずしも押韻のかゝる規則ありてにあらず。押韻せんとしての結果にはあらざるなり。

音韻には自から固有の特調あり。これを選擇すれば、聲調を整ふ必要なり

押韻の制は、我が韻文には要なし。されど、韻文の外形の語句、もと音の集まりなり。集まる音の如何は、聲調に大關係ある事は、記憶せざるべからず。同音同韻を適度に繰りかへす事も、自から聲調の美を助くるところあるは、記憶せざるべからず。記憶して、音の配合に注意せざるべからず。古來の歌の聲調の美なるものゝ、かくの如く押韻したる如き形跡あるも、作家が自ら推敲練熟の結果、知らず〳〵得たる文のみ。

音韻には、自から固有の特調あり。言語は、音韻の集まりなれば、この音韻の如何が、聲調に關係あるは、爭ふべからず。例へば、樣子擧動などを表はす語にて、音韻が直ちに其の意味を想ひ浮ばしむる如き語を見よ。からく〳〵と笑ふ。さめく〳〵と泣く　くよく〳〵思ふ　そよぐ　どよろく　がたつく　にこやか　つらく〳〵　つくく〳〵　しみく〳〵等の如し。其の音韻によりて其の樣子の、自から想起せらるゝ

にあらずや。澤山の語を用ひて說明するよりも、かゝる一語が、よく强く明かに其の印象を與ふるを得るにあらずや。されば、國語の音韻の特調を研究するは、詩作の上に面白き事なるべしといへども、これ容易の業にあらず。吾人の耳は、既に多少不健全なるをまぬかれず、精確に其の特調を聞きわくるは、甚だ難き事たり。況かのみならず、音は相連りて、一語となれば、前後の音の關係によりて、其の間に、また言ふべからざるひゞきを帶ぶるに至ればなり。おのれ、未だ此の點の研究熟せず。且つ、限りあるの紙面、熟せざる研究を、多く語るべき餘地はなし。されど、五十音を撿して、其の特調の一例を言へば、ア、イ、ウ、エ、オの五母韻の中。アの韻は開きて大きく、イの韻は細く小さく、ウの韻は結びてやはらかに、エの韻は狹くするどく、オの韻は閉ぢて深きが如し。されば、アの段の音には、皆、開きて大きなる韻あり。たかまがはら(高天原)といへば、自から壯大なるひゞきあるにあらずや。はなやかといへば、自から開きて愉快なるひゞきあるにあらずや。イの段の音は、皆、細き小さきひゞきあり。ちりひぢのいかにも微細なるひゞき、しみ〳〵の自から深く身に浸むひゞき、きみ(君)の自からやさしく愛すべきひゞきなど、一つは、これが爲めならずやは。

ウの段の音は、皆、結びてやはらかなるひゞきあり。さゝ(笹)とすゞ(鈴)とをくらべ見よ。つく〳〵、うつ〳〵、ふるす(古巢)のひゞきを考へよ。平安朝の所謂女子文學に、うの音便多きも、これが爲めなり。エの段の音は、皆、狹くするどきひゞきあり。俗語なれど、てめえと呼ばるゝは、てまへよりはいかにもするどく感ぜらるゝにあらずや。するどき故に、自から卑し。下司の言葉に多きも、爭はれぬ現象なりといふべし。オの段の音には、閉ぢて深くつよきひゞきあり。おと(音)おもふ(思ふ)こど、も(子供)などを見よ。さや〳〵とそよ〳〵とを比較し見よ。こほろぎときりぎりすとを比べ見よ。

さて、我が國の音は、皆、熟音なれば、各行の五言には、また、この韻の外に、固有のひゞきある如し。例へば、加行の五音は堅くしまり、左行の五音は細くするどく、多行の五音は、ばつきりとして强き聲あり。かたち(形)タケ(竹)テツ(鐵)タチ(太刀)ツス(刺)ソト(外)コト(琴)などの如くあつまりたるひゞきの上を考へ見よ。また、奈行の五音は、軟にしてやさし。行きつ、行きぬなどいふ時のつとぬとを比べ見よ。同じ過去助動詞なれど、つの方强く、ぬの方やさしくきこゆ。つは多行、ぬは奈行な

ればなり。彼の言葉の前後に、奈行の音を添ふる時は、自から親愛の語聲あるも、一證とすべし。また、波行の五音は、輕くして心地よく、や行の五音はしなやかにしてやさしく、良行の五音はまろやかにやさしき聲あり。は、ゝ(母)　ひな(雛)　ひばり(雲雀)　やゝよひ(彌生)　よな〳〵(夜毎)　やよ〳〵　はる〳〵　ほろ〳〵　ひら〳〵などを考へ見よ。而して、同じ行の五音の中にも、ア、イ、ウ、エ、オの五段によりて、異るひゞきあるは、母韻の差によりてなり。例へば、同じ父親の事を、ちゝ　たゝ　てゝといふに云ふにつきてのひゞきを見るべし。また、一語の音調のさま〳〵なるは、此の音韻のいろ〳〵にあつまればなり。

僅かに一端を摘記せるのみなれど、斯くの如く、音韻には固有の特調ある如し。されば、韻文をつくる時には、今我が表はさむと欲する事物、思想に、よく適したるを、擇ばざるべからず。「さま〳〵のもの思ふ」と云ふよりは、「ちゞにもの思ふ」といふ方、あはれは深く、やさしくかなしくきこゆるは、ちゞにというて、細く深きイの韻の多ければなり。彼の万葉の「くるしくもふりくる雨か三輪がさき」の歌の、いかにもくるしげなるこゝろのきこゆるは、一つは、上の二句にウの韻の結びて開かぬ音の多ければなり。なく(泣)といふよりは、ねになくといふ方、あはれにきこゆるは、奈行の音の多くあつまりたればなり。

こよひ誰れずゞふく風を、身にしめて、よし野のたけの月を見るらん。(頼政)

此の歌のすゞをさゝ(笹)といひ、たけをやま(山)といひても、意は變らざるべし。されど、しか言はずして、ウの韻のすゞを用ひ、多行と加行の強き音なるたけを用ひたるは、慥にこの歌の聲調を一層あはれならしめたるにあらずや。

をのこやも、むなしかるべき、万代に語たりつぐべき名はたゝずして。

の憶良が辭世は、あはれなるが中に、豪壯のふしあるは、一つは、上の句にオの韻の音多く、下の句にアの韻の音多ければなり。

いざ、あが駒、はやくゆきこせ、まつち山、まつらん妹を、行きてはや見む。

まゝよ、三升樽、かた手にさげて、やぶれかぶれのほゝかぶり。

の如き、何んとなく愉快げなるふしあるは、一つは、アの韻の開きて大なる音の多ければなり。

ちぎりきな、かたみに袖をしぼりつゝ、末の松山、なみ越さじとは。

の歌の、あはれにやさしくきこゆるは、一つは、上の句にイの韻の多ければなり。

君しのぶくさにやつるゝふるさとは

などいふ時は、いかにも心細くしめやかにきこゆるは、ウの韻の音多ければなり。音韻の配合の如何の、聲調を左右するは、以上のぶるばかりにても推せらるゝところあるべし。されば、一音一語、これが選擇をなほざりにするは、詩想詩調の兼美を求むる作家にはあらざるなり。

第三章　我が韻文の形式

韻文は美なる聲調を求む。こゝに、規律ある形式を用ふ。我が韻文の聲調は五音より八音に至る音數の配合を、よしとすれば、形式は、これによつてたてられざるべからず。而して、此れら音數に成る辭句の配合は、さま〳〵あるべければ、形式は、從つて、一樣にはあらざるなり。七音といひ、五音といふを、一句とすれば、句の形も一ならず。句のあつまりたる一行の形、行のあまりたる一節の形も、更に多樣なるべし。

一、五七の形式。五音の句に七音の句を重さねて、一行となすものなり。例へば、

父母を　見れば、尊し。（一行）
妻子見れば、めぐしうつくし。（一行）
世の中は、かくぞことわり、（一行）
もちどりの　かゝらはしもよ。（一行）

此の句形の行をかさねて、一節とし、其の節を重さねて、一篇となすは、五七の形式になれる韻文なり。万葉の長歌は、やがて、此の形式にして、唯だ節の定規なし。此の形式は、上に五音の短きありて、下に七音の長きを置きたれば、上輕くして下重し。

されば、この形にいづる時は、重々しき調に富み、雄健なる趣きあれど、宛轉のふしにまづく、流暢の調に乏し。やゝもすれば、兀々（こつこつ）として、聲調の美を破り易し。後世に此の形式の衰へたるも一理なきにあらず。優麗流暢の調は、聲調の最も心地よきものなればなり。万葉の長歌が、特に最後に七音の句を多く添へたるは、かくして一首の末をのびやかにしたるなり。

二、七五の形式。七音の句に五音の句を重ねて、一行となすものなり。例へば、

色はにほへど、散りぬるを、（一行）
わが世、誰れぞ　つねならむ。（一行）
有爲の奥山、　今日越えて、（一行）
浅き夢見じ、　醉ひもせず。（一行）

斯の如く、全く前者に反せる形式なり。かゝる形の行をかさねて、一節とし、其の節をかさねて、一篇とすれば、七五の形式になれる韻文なり。この例の如く、彼の今樣歌は、此の行を四個重さねたるものなり。稀れに異る形のもあり。此の形式は、七音の長く重きを上に、五音の短く輕きを下にしたり。この形にいづる時は、前者に反して、宛轉のふしにとみ、優麗流暢の調にすぐれたれど、重々しきふしに乏し。心せざれば、輕きに失しやすし。今樣歌に、とかくこの嫌ひの見ゆるは、其の一證たり。優美をむねとせる平安朝に至りて、この形式のはじまりたるも、おもしろき現象たらずや。流暢は、聲調の最も心地よきものにして、散文に於いても、明晰遒勁の

筆法と並びて、行文の間に欠くべからざる要素とせらるゝほどなり。七五の形式、最もこの調に富む。殊にこの形式の韻文に用ひらるゝに至りたるは、一理なきにあらずといふべし。五七の調は重々しく、自から宛轉の妙を欠く故に、複雜なる思想、進行する活動をうつすに適せざれば、長篇の韻文、殊に、敘事韻文には適せず。戯曲、敘事、長篇の韻文が、主に七五の調を用ひて、五七の調を用ひざるは、至當の現象といふべし。馬琴が小説の筆に、七五の調を多く用ひたるも、これが爲めなり。

三、五七五の形式。これは、五音、七音、五音の句を、順序に重ねて、一行とするなり。例へば、

五月雨に、もの思ひ居れば、時鳥、（一行）
なきつゝも、いづち行くらむ、さ夜中に。（一行）

彼の古事記に、日本武尊薨去の條に、「はま千鳥、濱よは行かず、磯つたふ。」などいへるは、此の一行を以て、一篇と成せる片歌なり。後世の發句も同じ。此の形式は、一行の中に、五音の短き輕き句の二個を有する故に、輕快なる調はあれど、重くしめやかなるふしに乏し。やゝもすれば、浮薄の嫌ひあり。また、此の形式は、長篇の作に

五七七の形式

適せず。元來三句を重さねたる行は、皆、長篇には適せざる如し。三句の行にては、長きにすぎて、これを連絡すればやゝ散漫になりて、偕調を欠けばなり。

四、五七七の形式。前者の形式の末の句の、七音になりたるものなり。舊く、古事記などに片歌といふは、多くこの三句の一行を以てなれるものなり。例へば、

はしけやし、わぎへの方よ、雲居立ち來も。（日本武尊）

万葉に旋頭歌といへるは、此の行を二個つらねて、一首としたるものなり。

春日なる　み笠の山に、月も出でぬかも、（一行）

さき山に　さける櫻の　花の見ゆべく。（一行）

七七の形式

此の形式は、七音の長く重き句を、二個有する故に、前者の如き輕きにすぐるふしはなし。されど、重きにすぐるをまぬかれず。これも、三句の一行なれば、長篇に面白からず。

五、七七の形式。七音の句を、二個かさねて、一行となすなり。例へば、

雲悠々と、軒端の山、（一行）

朝心の　自から空し。（一行）

水潺々と、窓のさゝ川、（一行）

夕べ心の　自からすむ。（一行）

かゝる行をかさねて、一節となし、其の節をかさねて、一篇とすれば、七七の形式になれる韻文なり。此の形式は、七音の長く重き句を、二個つらぬる故に、自から重くゆるやかなる調べあり。七五の形式の如き流麗なるふしはなけれど、五七の調の如く兀々（こつこつ）とせるところなく、また、長篇の韻文にも用ふべし。

五、短歌の形式。やがて、三十一文字の短歌の形式なり。これは、前にあげたる五七五の形式と、七七の形式とをあつめたるものなり。五音、七音、五音の三句より成れる一行に、七音七音の二句に成れる一行とを重さねたる一節より成るなり。

かしこくも　てる日のもとと　名づけける、（一行）

くもらぬ君を、あるじにはして。（一行）（宗良親王）

はじめの一行は、五七五の短く輕く、次の一行は、七七の長く重くゆるやかなるをあつめたるなれば、短き韻文の中には、句の配合の妙を得て、聲調殊によし。古代の亂雜なりし韻文の中より、短歌の唯一の形式として存するに至りたるは、また宜なら

都々逸調の形式

ずや。

六、都々逸調の形式。これは、第四形式と第二形式とをあつめたる如きものなり。やがて、七七の一行に、七五の一行を添へたる四句二行に成れる形式たり。而して、これには、なほ特別の規律ある如し。そは、四句の中にて、第一句は三音四音、第二句は四音三音、第三句はまた三音四音といふ工合に分割せらるべき七音より成り、第四句の五音は、二音三音、或は、三音、二音に分割せらるべき句形なる事たり。

霊の外山の曙つらやかやが軒端の鳥の聲（投げ節）

更けて健の　音よりきけば　月に落ち來る　我が涙

さても寐られぬ　曉憂しや　過ぎし今宵の　しかも今

思ひ　あまりて　まみえし夢よ　さめて涙の　外ぞ無き

これは、投げ節なれど、都々逸や小唄の唱歌の短きもの、皆、大抵この形式たり。重くゆるやかなる第四の形式に、輕く快き第二形式を合せたるなれば、且つ七音五音の句の性質、かくの如きを配合したれば、聲調ゆるやかに且つ輕くして、歌ひやすし。太平の民の唄ひ興じたるも、偶然にあらずといふべし。

五五の形式。

七、五五の形式。五音の句を、二個つらねて、一行となすなり。

世は今か、花ざかり、（一行）

うたふ鳥、舞ふ蝴蝶（一行）

人は皆、春に醉ふ、（一行）

何に故に、われひとり。（一行）

種々の形式。

此の行をかさねて、一節とし、其の節をかさねゆけば、五五の形式になれる韻文たり。此の形式は、五音の短きを二個あつめたれば、極めて輕し。されど、聲調つまりて急にして、七五の如く流暢ならず、七七の如くゆるやかならずして、叙事は殊更、長篇の作には適せざる如し。

長篇に適せざる形式。

此の外にも、六六、八六、八八など、七音五音に近き句の配合は、さま〳〵に作らるべけれど、これ等をのみ重さぬるは、五五と共に、聲調れもしろからざる如し。まだ研究中なれば、明かに語たるを得ず。

以上の形式の中に於いて、長篇の詩作に最も適せるは、七五の形式と七七の形式となり。これは、わが斷言して疑はぬところたり。而して、止むを得ぬ場合に、これ

節を定むるの必要

等の形式の間の、多少亂るゝは、決して論せざるなり。詩想に從ふべき形式なれば入を生ずるは、前章にいへる如くにて、もとより許すべきなり。

なり。また、種々の形式の一行を成立せる各句の音數の、やむを得ずして多少の出

さて、古來の我が韻文には、節の規律を設けざりしといへども、長篇を作らむとするには、おのれは、極めて其の必要なるを認むるものなり。句をかさねて行を定め、行をかさねて節を定め、節を重さねて、一篇を定む。長篇の韻文、こゝに、よく整然として、亂れざる形式、聲調、詩想の發表を得るの法たり。初心の人の長篇の作、往々まぬかれがたき失敗、二つあり。其のいふ所の混雜難澁に陷る、一なり。散文調に陷る、一なり。節を定むるは、これを防ぐの良策たり。第一節には、先づ、しかく〳〵の事をのべ、つゞきて第二節には、いかなる事をのべ、延いて第三節には、何にをいはむといふやうに、定めゆく時は、自から詩想の發表の順序の正しきを得べし。また、此の一節の中には、かゝる事のみを、かゝる形式を以て表はすなりと定めて、工夫する時は自から散文調に流るゝを防ぐべし。なほこれが必要につきては、詩想の構成の章を、立ちかへりて見られよ。

節の形。

さて、此の節の行數には、種々あるべし。やがて、一節の形は種々なるべし。二行の一節、三行の一節、四行のも、五行のも、六行のも、八行のも、作者の隨意に定めらるべし。二行三行のものは、簡單にして輕し。されど、これ等を重さねたる長篇は、なほ散文に短き文(Sentence)をのみ重さねたる如き弊あり。即ち、一篇の思想文體の聯絡の緊密を欠くなり。重さぬるに適したるは、四行以上八行以下の節にある如し。九行以上の多きにわたりては、一節としての存立、強固ならず。且つ、複雜にすぎて讀者を疲勞せしむる怖れあり。長篇の韻文は、もとより複雜なる思想をのぶるなり。一定の節を並べ用ふる能はざる場合もなきにあらず。かゝる時には、自から一篇の節の形の亂るゝも、やむべからざるなり。かくせざるを得ず、且つは、かくしてこそ妙なれと思ふ場合に限るべき事たり。

以上、聲調形式につきての言は、我が舊來懷抱せる意見の梗概たり。されど、我が韻文の聲調形式は、なほ研究中の問題にして、近時密に更に探求せるところもあれど、未だ確固たる立說を得されば、こゝに語らんは、あまりにたほけなきわざならむ。

詞の修飾法の必要。

第四篇　詞の修飾法

一篇の韻文をして、よく詩の詩たる實を擧げ、充分に詩の目的を達せしめんとするには、詩想の鍛練、形式の工夫の外に、なほ其の用ふる詞の上に、苦心を要す。即ち其の用ふる詞、いひ表はし方、その詞の用ひ方に、通常の口語文章以上の美妙なる技あらんことを要す。詞の修飾法といへるは、その技につきての大道を、こゝに概說せんとするなり。

韻文の用語は、術的、快美的、樂的のものならざるべからず。

第一章　用語

韻文の用語は、單に其の意味を正しく現はして、たゞに讀者に了解せしめ得たるのみにては、不可なり。美はしく其の意味を現はして、快く讀者に感ぜしめざるべからず。されば、先づ美はしき語を擇び用ひざるべからず。美はしとは、キレイなる乙姫さまのやうなる意にはあらず。高雅にも優美にも莊重にも、よく神韻のこもりたるをいふ。深く作家の美感、美想の躍動して、强く他の同情の美的快樂を起

國語の中に、詩語と非詩語とあり。

すべき力あるをいふ。一言にいへば、美術的の語なり。快樂的の語なり。吾人が日常意思を交換し、事理を說明し、智識を語るは、日用的の語、生活的の語といふべし。正しく其意を現はし明かに其の意を傳達し得れば、こゝに足れり。韻文に用ふる語は、單に此の日用的のものにては、不可なり。任ずるところ、單に意思の發表にあらず、美的思想の描出にあり。求むるところは、單に意思の傳達にあらず、美的快樂を與ふるにあればなり。されば、つとめて日用の言語の資格以上にわたりてよく高雅、優美、莊重、やがて、美術的の語を擇び用ひざるべからず。

さて、此の美術的、快樂的、畵的、やがて詩的の語は、何處に求むべきか。もとより古今の國語の中に存ずるなり。こゝに國語といふは、我が固有の語のみにあらず、國語化したる外國語をも包有するなり。この古今の國語の中より、詩韻あるもの、韻文に適したるを選擇して用ふべきなり。一派の論者はいふ、れなじく國語たり、何んぞ詩語をいはん、非詩語をいはむ。總ての國語、皆韻文に用ふべしと。されど、これ等は近視眼者にして、到底詩の深遠なるきはを洞察する能はざる輩のみ。韻文の語には、必ず雅俗を取捨せざるべからず。雅とは詩韻あるものなり。俗とは到

韻文には俗語を嫌ふ

底詩韻なきものなり。古今の國語中、自からこの別あるを、我れは認む。大根(だいこん)がちや〳〵(虫の名)、いつでも(毎時)、おや〳〵(驚きたる感動詞)、晴れた空くたびれたり、一ねいりす、かくの如きも、吾人の普通に用ふる語たれば、國語たるべし。されど、かくの如きものにはたして詩韻を存ずるや。到底卑俗の聲にして、高雅優美莊大の美感は喚起せられざるにあらずや。若しこれを、ねほね(大根)、ゐもむし(虫)、いつも(毎時)、こは、あな、晴れたる空、つかれたり、一眠りすなどいはむには、その意は同じなれど、其の卑俗のひゞきは、殘らざるべし。「古池や蛙とび込む水の音」の蛙をかへるとゝ云はゞ、如何。その幽言なる詩趣は沒せらるべし。かへるは詩語にあらず。香川景樹が、これを懸詞に用ひて、

花は散りて、春もかへるの力なき聲のみ殘る夕まぐれかな。

なども、つひに滑稽にきこゆるにあらずや。吾人の朝夕の生活に用ふる所謂俗語には、かくの如き卑俗のもの、多し。されば、韻文には俗語を嫌ふ。俗語を嫌ふにあらず、俗語の卑俗なるを嫌ふなり。なほ景樹が歌に、

許由の瓢を梢にかけたる書に

ぬらさじとくれしこれすらわづらはし、受けらるべしや、天のしたゝり。

竹に雀のやどり、靡きたる

品よくもとまりけるかな、なよ竹のよびうたふなる一節や、これ。

涅槃會

世の中の花の遊びにくたびれて、一ね入りせる君が手枕。

古寺月

時しもあれ、檜原が上に、有明のつき出でにける鐘の音かな。

おのれは、徳川時代の歌人とたのれは、清新なる桂園の歌風を敬慕するものなり。されど、かゝる彼れが作には、つひに贊しては、先づ景樹を推さんとするものなり。成し難きなり。桂園をけがすの醜草として刈り棄てざるを得ざるなり。これ、全く彼れが自論の失敗なり。「言語の上には雅俗はあらじ、文辭詠歌共に雅俗は音調にありて言語にあらず。今日の事情を述ぶるは今日の言語を以てす、今日の言語は則ち俗言なり。されば、歌は俗言のみ」などと論して、俗語の卑俗なるを取捨せざりしよりの失敗なり。

亡兒の墓にまゐりて

今日ぞ知る、人目絶えたる山里は、泣くためにこそ、よ、し、か、りけれ。

の如きも、慥によろしの非詩語の失敗を示したるにあらずや。

古來の韻文の中にて、俗語を多く用ふるは、都々逸の如き塵巷の淫靡なる戀愛詩なり。これ、卑近なる俗語の性質の、自からかゝる野卑なる韻文、かゝる卑俗の耳には適するに外ならじ。されど、かゝるが中にも、多少優美なる詩の面目を有するものは、俗語の中にもやゝ雅馴なるを用ひたり。更に優なるものに至りては、多く俗語を離れ、古語や古歌のこゝろなどを文なしたり。

ものや思ふと問ふ人あらば、せめて語たりや慰めん。

いとゞ淋びしき寢覺めの床に、涙なそへそ、時鳥。

思ひあまりて、折りたく柴の、煙りさびしき夕まぐれ。

まだき我が名の立ちたるとても、思ひそめしを、一筋に。

行くもかべるも、忍ぶの乱れ、限り知られぬ我が思ひ。

もはや命も絶えなば絶えよ。住めば恨めし、同じ世に。

詩に於ける俗語の長所。

古語は、詩に適せるもの多し。

これは、徳川の貞享元祿頃に京都にはじまりたる投節唱歌といふものにて、專ら娼婦遊冶郎の情をうたひたるものなり。後の二十六文字の都々逸も、この調にいでたるものなれど、都々逸の如く野卑淫靡浮華ならざるを見よ。これ、專ら古語によりたればなり。

俗語はやゝ滑稽、諷刺、頓智、洒落の趣味などに適せるものある如し。狂歌の俗語にて知るべし。然れども、狂歌、つひに輕薄卑俗なる調はまぬかれ難きなり。しかも、文學に唱ふる壯高優美滑稽の三趣味の中に於いて、おのれは、滑稽の最も低く最も劣れるを信ずるものなり。狂歌の滑稽の如き、つひに韻文壇上に貴重視すべきものにあらざるべし。俗語は、また寸鐵の短きを以て、巧みに事物情景をうつし穿つにやゝ適したる如し。發句の俗語にて知るべし。然れども、發句の多くは輕浮をまぬかれざるなり。其の壯重優美なるものに至りては、俗語を離れたるにある如し。

これに反して、古語には詩に適せる多し。また、殊に古來の韻文に慣用せられたる語には、詩韻深し。卑近なるものには、詩趣乏し。實用的のものには、詩趣の空し

古語と現代的言語。

きは、誰れ人も認むるところならむ。俗語の多く韻文に適せざるは、これがためなり。而して、古語の多くこゝに適せるは、其の性質のこれに反すればなり。古語は實用には適切ならず、古語は、我が平生の耳に遠し。こゝに遠き故に、こゝに適切ならざる故に、反て、高雅、優美、壯大、美の趣味に富みて、韻文の美術に一しほ適するものあるを得。實用と美とは反比例をなす。實用に進むにしたがひて、美はます〳〵去り、全く實用にとゞまるに至りて、美は全く沒す。古語俗語の詩語非詩語の關係一はこれにても知るべし。また、吾人が日常の會話散文は、乾燥無味沒趣味なる吾人が生活場裡の平生の聲なり。されど、韻文は斯くの如きものにあらず、激昂せる美的感情想像の聲なり。斯くの如き生活場裡の平語にては、この激昂せる情想の聲は盡し難し。これ、一は、韻文の用語を古語に求むる所以ならずやは。

散文には現代的言語を愛して、古語を嫌ふ。これ、實用の目的に出でゝ、わかり易きを主とすればなり。然れども、其の現代的言語の資格には、なほ雅馴なる性質を要す。今日の通俗語が、散文に用ふべき現代的言語たるにはあらざるなり。今日の通俗語の雅馴なるものが、はじめて散文に用ふべき現代的言語たるなり。この

古來の韻文に用ひられたる語は重んずべし。

馴雅なる言語の資格は、一代の名家が筆に、共に一致して、共に同じく、或は殆んど共に同じく用ひらるゝに至りて定まるなり。散文にいふ現代的言語、既に斯くの如し。しかも、かゝる散文にも、なほ古語の用は忘られざるなり。修辭學にいふアルクーズムの法は、殊に古語の神聖、壯高なるを認めて、これを利用すべきに出てたるならずやは。

古語の價値は、韻文に忘るべからず。殊に、古來の韻文に用ひられたる語は重んぜざるべからず。これ、古來の作家が、其の時代〳〵に於いて、詩想の美なる發表につくす手に、聲調の美なる整へを求むる耳に、自から擇び來りて、共に用ひたる詩語なればなり。古來の詩歌集は、この雅馴なる詩語の淵叢なり。今日までの韻文用語として、雅馴なるものは、多くこゝに得べきなり。韻文家たらんとする者は、先づ我が用語の種子を、こゝに求めざるべからず。こゝに多く求めて、豐富なる我が詞藻の素を養成し、而して後に、更に新らしき方面に向つて、清新なる詩語の拾集につとむべきなり。此の工夫の中には、もとより、古來の詩語に更に新らしき生命を與へて活用すると、全く他の嶄新なるを擇び來たるとを含むなり。新奇なる方面に

用語の一致の必要。

向つて盲進するを好む作家は、古語、古來の慣用の詩語を用ふるは、彼の株を守り舟にきだつくる愚に等しきが如く思ひいやしみて、強ひてこれを捨て去らんとするあり。あはれむべし、これ等はかくて盲進して、遂に魔道に墮落しはてむとするなり。然れども、また、彼の古來の詩語の外に詩語を知らず、古來の詩語の活用の外に生新なる活用を求めず、古人の糟粕をなむるに過ぎざるの徒は、韻文界の鸚鵡たり。能はたゞ古人の口まねのみなればなり。作家は必ず自家の新面目なかるべからず。韻文の用語、要するところは、我が詩眼廣く古今の雅馴なる詩語を求め、我が詩想に應じて、これを用ひて、一家の妙を得るにあり。

最期に用語の上に注意すべきは、一篇の用語の一致といふ事なり。韻文に用ふべき詩語には、近世のも、中古のも、上古のも、さまざまあるべし。一篇の韻文は、成るべくこの點に於て一致するを要す。上古のものを用ひなば、上古に限れ、近世を用ひなば、近世のみに限れといふにはあらず。あまり隔絶したる語の混入せざるやうになすをいへるなり。例へば、近世の語をつらねたるが中に、忽然耳遠き上古の語の交へられ、或は、中古の語によりて成れるが中に、忽然、現今の語の表はれ、或は、固

韻文の語句の修飾法。

有の國語にてつゞれるが中に、突然漢語などの投げ込まれたる如きをいふ。これは、前後の聲調の連絡を破ぶりて、ともすれば、聞き苦しき嫌ひあり。然れども、自からこゝに出でざるべからざる折りもあるべし。まだ、巧みに詩想に應じて詩語を適用せんとすれば、妄りにかゝる區別をいふ能はざるなり。されば、唯だ其の用語の自から其處に落ちつきて、前後の聲調の調和を妨げて、聞きにくきふしの存ぜざるやうにすべし。

第二章　轉義辭樣の修飾法

すべて文章には、明晰、適勁、流暢なる辭句の心がけを要す。そが中に於いて、韻文の殊に大切とするは、適勁と流暢との筆意にあり。韻文は、單に他の理解力に滿足を與へむとするものにあらず。他の感情想像に滿足を與へ、快感を與へむとするものなればなり。他の感情想像を強く刺擊し、快く同情を感ぜしめざるべからず、されば辭句の勢力あらむ事を必要とす。やがて適勁なり。なほ快く感ぜらるべき辭句を、必要とす。やがて、流暢なり。こゝに於いて轉義辭樣といふ修辭の法を

轉義とは如何。

辭樣とは如何。

轉義辭樣の修飾法を用ふるにつきて

ぶ。

轉義とは如何。一言にいへば、普通の意義より離れて、その言語を用ふる法なり。例へば、袖の露、心の闇、燃ゆる思ひなどいひて、露を涙の意義に、闇を迷ひの意義に、燃ゆるを激昂の意義に用ふるが如し。或は、風死す、花の笑むなどいひて、生物の上に用ふる詞を、無生物の上に用ふるが如し。辭樣とは如何。普通なる辭句の配置を出でて殊更に面白く快く工夫する方法なり。例へば、普通ならば「胸の雲霧晴るゝまもなし」といふべきを、殊更に轉倒せしめて、「晴るゝまもなし、胸の雲霧」といひ或は「追ひしきて、取りかへすべきものならば、よもつ平坂道はなくとも、我れは行かむ」といふべきを、「我れはゆかむ」の詞は、省略して言はず。或は、「難波江の葦のかりねの一よゆゑ、みをつくしてや戀ひわたるべき」といへるやうに、緣のある詞を配列するなどの如き法なり。轉義は意義に基く修飾法にして、辭樣は措辭に基く修飾法たり。

かゝる轉義辭樣の中には、種々の方法あり。且つ、これを用ふるにつきては、また各々特に注意すべき條件あり。それ等の細かなるは、次に順を追うて述ぶべきなるが、先づ特にこゝにこれが用法の全般にわたりて、必ず記憶すべき條件の、一言せざるべからざるものあり。いかなる轉義、辭樣の修飾法を用ふるも、必ずよく自然に出でたる樣ならんことを心がけて、決して殊更に妄りに耽りて修辭したる如き形跡に落ちぬやうにすべき一事なり。もと、是等の修飾法の存する本源を尋ぬれば、自から韻文の性質に起因せるなり。韻文は吾人平常の會話にあらず。激昂せる感情想像の聲なり。激昂せる時の言語は、自から普通の狀態を離る。且つ、前にのべたる如く、韻文は快く美感を與へむとす。轉義たり、辭樣たり、普通の意義以外普通の措辭以上の修飾法、自から韻文の辭句の上に生ずべきなり。あまり妄りに用ふるは、これが修飾法の存ずる自然に戻り、つひに虛飾の醜態にのみなりて、從つて、浮華纖弱の見にくゝ、わざとめきたる聞き苦しきをまぬかれざるは、多く言ふを待たざるべし。

の一般の注意。

明喩。

轉義の種類

第一明喩。或る事物動作をうつさむとするに、それに類似せる他の著しきもの

を採り來たりて、明かに二物を比べて、喩へいふなり。例へば「月さえて氷りの如く風冷たうして刃に似たり」。など言はむが如し。寒月冷風をうつすに冷たき氷りと刃とを採り來たりて、比べたり。これによりて、寒月冷風のけしき、一層明かに強く動くを得たり。これ明喩の修辭の價値なり。此の中に二種あり。

一、前に擧げたる例の如く、常に似たり、如し、たとへば、或は、これと同樣の意味の語を用ひて、明かに二物を比較して言ふなり。やがて、英語にいふ Simile の修辭法なり。

世の中を、何にたとへむ。朝開き漕ぎいにし舟の跡なきがごと。（萬葉集）
久方の天見る如く仰ぎ見し皇子のみ門の荒れまくをしも。（仝上）
花のごと世のつねならば、過ぐしてし昔は、またもかへりきなまし。（古今集）
世の中の人の心は、花染めのうつろひやすきものにぞありける。（仝上）
我がそては、汐干に見えぬ沖の石の、人こそしらね、乾く間もなし。

二、前者の如く、如しの如き語を用ひずして、比べ喩ふるなり。一事物を、他の似よりたる點ある事物に比ぶることは同じなれど、其の比べたるこゝろを、如しと表面にあらはさずして、意味の中に自から籠もるやうに言ふなり。例へば「姿は神の如し、心は鬼に似たり」。といへば、第一の明喩法なり。これを「姿は神なり、心は鬼なり」。といふ時は、やがて、この第二、明喩法なり。

形こそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ。（古今集）
みな人は、よし野の山の櫻花。をり知らぬ身や、谷のうもれ木。（金葉集）
世の中は、うき身に添へる影なれや、思ひすつれど離れざりけり。（仝上）
我が戀ひは、深山がくれの草なれや、しげさまされど、知る人のなき。（仝上）

これは、詞の表面に、似たり如しと比較を言はざる故に、自から含蓄の味ひありて第一の種類よりは、一層遒勁の趣きに富めり。如し似たりと正直に比較するは、とかく散文の調に落ち易し。英詩の Simile は、皆、此の形にて、通例 like as の語を用ひて、比較しいふ。我が國には、の如きの意味のの、或はなすの如き語などありて、第一種の明喩の中にても、英詩の Simile にあらざる面白き表想の法あり。第二種の一種の明喩は、英詩にては、Metaphor（暗喩）の中にれき、我が修辭學を說く人も、これにならひたれど、われは、これを明喩の一種とせり。如し似たりなどとは言はざれど

明喩を用ふるにつきての注意三ヶ條

も、二物を採り來たりて比較したるところは、同じければなり。

明喩は、常に前記の例の如き是定の形のみにはあらず。はかなき人の一生、朝顔の露に異ならずの如く、否定の形に成るものあり。例へば、

我が袖は、草の庵にあらねども、暮れば、露のやどりなりけり。（古今集）

花さろうあらしの庭の雪ならで、ふりゆくものは、我が身なりけり。

我が戀は、知らぬ山路にあらなくに、まどふ心ぞ、わびしかりける。（古今集）

また、よりの如き比較の助詞に成る形のものもあり。一例

行く水に數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり。（古今集）

山たろしに堪へぬ木の葉の露よりも、あやなく脆き我が涙かな。（源氏）

明喩を用ふるにつきてはこれより下にのべんとする數ヶ條の注意を、常に忘るべからず。第一に、比較せむとする事物は、なるべく異る種類の間に求むべし。元來詩の修飾法にいふ比喩の妙味は、異りたる事物の間の思ひがけなき類似の點をかりて、一事の描出をおもしろく明晰に遒勁ならしむるにあり。同じ種類の物を比較するも、もとかゝる効力のあるべきかは。例へば窈窕たる少女、花の如し。といへば、其の美しといふ意味は、おもしろく明かに強く感ぜらるゝも、窈窕たる少女、衣通姫に似たりといへるにては、さる妙味はなし。全く同じ種類の物と比較したるにては、單に似よりたる例を示したる如きものにて、こゝにいふ修飾法には成らざるなり。「手習ひは讀書の如し。」といひ、「少女のまふ姿、舞妓に似たり。」といはむが如し。されど「手習ひは、坂に車を押すが如し。」「少女のまふ姿は、春野に蝴蝶の狂ふに似たり。」といへば、おもしろき比喩となるなり。

斯くの如く、明喩は、異りたる事物の比較に成らざるべからず。されど、其の事物の餘りにかけはなれたる、また不可なり。これ、第二の注意なり。ある英語の修辞學書の Simile の條に

The is as short and dark as a mid-winter Day.

譯せば「彼の女は、冬のもなかの日の如く短く黑し。」といふことなり。人間の狀態を冬の日の空に比較したる明喩なり。餘りにかけはなれたる二物の比較ならずや。斯くの如きものは、遂ひに滑稽の資にせむのみ。柿本の人麿が

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながしよを、ひとりかもねむ。

といへる上の三句もと序歌にして、意味の上には實意なき詞なれど、なほ面白からざるなり。此の序歌は、もとは明喩になりたるなり。即ち、山鳥の長き尾と長き夜とを比較したる明喩に出てたるなり。山鳥の尾と夜とは、餘りにかけはなれたる事物ならずや。さるが故に、單に實意なき序歌としても、何んとなう滑稽に落ちて面白からぬなり。

山たかみ岩根の櫻ちる時は、天の羽衣なづるとゞ見る。

高山の岩上の櫻の散るを、天人の羽衣にて千年に一度四十里四方の大石を撫づるといふに喩ふ。あまりに突飛なる比較ならずや。

これと仝じやうなる注意なれど、比喩はまた、成るべく穩當なるを要す。即ち、小さくいやしきものを、高大なるものと比較し、或は、高大なる物を、小さくいやしきものに比較する如きを謹むべし。これ、第三の注意なり。例へば、「綸言汗の如し」は有名なる詞なれど、つひに完美なる明喩とは評し難し。綸言の極めて貴きものを、汗の極めて汚きものに比べたればなり。

卷向の檜原が奥の稻妻はず、り出だす、火の、心地こそすれ。（景樹）

空にひらめく稻妻の遠大なる光りに比ぶるには、ずり出だす火口（ばくち）の火は、餘りに卑近ならずや。

奥山の石つみ車、力にも及ばぬ戀ひの道ゞくるしき。（同人）

深くあはれなる戀ひ路の上に、奥山の石つみ車の比喩は、あまりにいやしく輕きにあらずや。かくの如きは、つひに輕薄汰洒落の難をまぬかれ難し。第四には、古來餘りにいひふるされたる比喩、人口に膾炙せる名喩を、其のまゝに用ふるは、面白からず。例へば「光陰矢の如し」といひ、美人に雨後の海棠のたとへをいふ如き事たり。別に一家の生新なる技を加へて更に用ふるやうにすべし。

第二　暗喩。一の事物動作をあらはさむとするに、直ちに似よりたる他の事物動作を以てうつす法なり。例へば、

花の色は、うつりにけりな、徒らにわが身世にふるなかめせし間に。

といへる時の花の色、うつるの如し。美しといふ類似の點によりて、人の容貌を花の色といひ、汚く變はるといふ類似の點によりて、人の容貌の衰ふるをうつるといひたり。類似せる點によりて、喩へていふ趣きは、明喩と變はらざれど、明喩の如く

暗喩は明喩よりも活動なる理由。

類似せる二物を並べて比べて言ふにあらず。一の事物、動作に、直ちに事の他物、動作の詞を用ひて、かく喩へて言ふなり。若し「容貌は花の色の如し」とか「花の色に異ならず」などといはむには、明喩なり。小町の此の花の色も、容貌の美しきを花に比べて喩へたるなれど、容貌と花の色との二者を並べて比較せず、比喩せず、類似を云々せるにあらず。單に容貌の代りに、直ちに花の色とたとへて言へるなり。これ明喩と暗喩と大に異るところなり。暗喩も、其法の本となるは、二者の類似の點なり。

然れども、斯くの如く、其の類似を並べず、比較せず、表記せずして、一の事物、動作の描出に、直ちに他の類似せる事物、動作を用ふるなり。比喩せる類似の點は、全く其の用ひたる詞の下にこもりて、これを知るは、唯だ〳〵讀者の想像の力のみ。讀者の想像力の活動を要す。これ、暗喩の明喩よりも一層おもしろきところたり。此の想像力の活動は、讀者の心を刺激する強く、讀者に興味を與ふること深ければなり。且つ、暗喩は、明喩よりも短く簡潔なり。暗喩の遒勁なるふしの、遙に明瞭にまさりたるは、以上の二理由によるべし。

形こそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ。

明けき法の燈火なかりせば、心の闇の、いかで晴れまし。（玉葉集）

あはれ、また、いかに忍ばん、袖の露。野原の風に、秋は來にけり。（新古今）

今よりは昔語りに心せむ。あやしきまでに、袖しをれけり。（西行）

またや見む、片野のみ野の櫻狩、花の雪ちる春のあけぼの。（俊成）

美しきといふ事を、直ちに花といひ、尊き佛の教を明けき法の燈火といひ、心の煩惱を、心の闇といひ、煩惱の無くなるを晴るゝといひ、涙を袖の露といひ、袖の涙にぬるを、袖しをるといひ、涙のこぼるゝを、袖しをるといひ、雪の如く散る花を、花の雪ちるといひたる、皆暗喩なり。この暗喩は、詩の用語の上には、極めて必要とす。若しこれをとゝむる時は、詩の用語の妙は、大部を失ふべし。從つて、詩の趣味の大部も失はるべし。胸の村雲、心の色、心の花、思ひのつな、思ひにもゆる心も、消ゆ、赤き心、冷たき心にほふ少女、庭の撫子（子ども）、教へ草を摘むなどいふ如く、吾人の身上、心裡上の事物を、無生物に用ふる詞を以て、たとへたるものは、皆、この暗喩なり。霞のとばり、松のを、琴、月の御船、學びの林、文の山、路花の錠、ぶ月かをるなどたとへいふも、皆、此の暗喩なり。斯くの如くにて、暗喩はいと多く用ひらる。

暗喩を用ふるにつきての注意。

さて、暗喩は、明喩の如く二つの事物、動作の類似を並べて、比べいふにあらず。一の事物、動作を、直ちに他の事物、動作の名を以て、たとへていふにて、比べられたる二者の類似の點は、唯だ詞の奥に含蓄せしめられたるなり。二喩の長所、明喩は明晰にすぐれ、暗喩は遒勁にまさる。遒勁なる暗喩は、一層詩趣に富む。唯だ其の含蓄せしむる類似の點の、讀者に明かにさとられ難き怖れあり。かゝる場合には、先づ明喩を用ひて、次の暗喩の意を知らしむるも、面白し。

其の主と住家と、無常を爭ふさま、言はば、朝日の露に異ならず。あるは、露たちて、花殘れり。殘れりといへども、朝日にかれぬ。あるは、花しぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕べを待つ事なし。(方丈記)

これは、韻文の例にはあらねど、よく其の心がけの見らるゝゆゑに、あぐるなり。此の文にて、花は住家の暗喩、露は住む主人の暗喩にて、あるはといふより後は、暗喩の文なり。されど、さのみいうてはもとより不明瞭なる故に、先づ初めに、無常なる主と住家のありさまは朝露に異ならずといふ明喩を用ひ置きて、巧みに暗喩をつかひ得たる、面白しとも面白きにあらずや。

明喩を用ふるにつきての四ヶ條の注意は、また、暗喩の上にも忘るべからず。なほ暗喩には混淆を嫌ふ。即ち、混淆せる暗喩(Mixed metaphor)なり。二個以上の暗喩を、同時に混用することなり。例へば、文の林の底深くなどいはむが如し。多くの文を、樹木の繁れるに比べて、文の林といふ暗喩を用ひたり。而して、其の文の蘊奥に至ることを、また、底深くといひて、他の異りたる比喩を用ひたり。底は泉か谷か流れにいふべき詞なり。林の上には無理なり。故に、林といひ、底といひ、二種のやうにいへば、此の難はまぬかるべし。斯くの如きを嫌ふなり。「文の林の奥ふかく」といふ薬の林などいはむはよけれど、言の葉の泉言の葉の海などいはむは、此のあやまちに落つるなり。

また、暗喩と普通の言語とを混じ用ふるも、同じく此の混淆の誤謬なり。例へば「在原業平は、六歌仙の中の兄にして、行平の弟なり」といはむが如し。上に兄といへる、六歌仙の中にて最もすぐれたる意の暗喩なり。下の弟は、同胞の年長年少にいふ普通の語たり。かく混用するときは、その文意は大に誤解せらるべし。「文の林

を分くる」といひて多くの文を讀む意をたとふるは面白けれど、「文の林を讀む」といはゝ、笑止ならずや。林といふ暗喩を用ひながらに、讀むといふ平語を混用したればなり。西詩には、かゝる混淆の誤謬多くして、セークスピアの如きも、また此の弊をまぬかれずといふ。我が國の韻文には、緣語といふ技の行はるゝ故に、大に此の弊を避けしむる如し。緣語の用、一つはこゝにあるなり。

また、暗喩を長く連續せしめ、過多に用ふるは、面白からず。浮華纖弱、天眞の活氣を失ひて、文體の遒勁を助くる技は、反つて、文勢をれとすの仇となるべし。表面の文飾は、全く內容の詩想を包み去つて、物を隔てゝ其の眞意を聞くが如くなりて、讀者の感は淺かるべし。甚だしきに至りては、文意索然として、つひに不明瞭に落つるに至るべし。俗謠などには此の弊多し。

をしのなごり

あたら夜の明けゆく空に、もの思ふ冬のなさけに、心の紅葉、染めて錦のちぎり
もしばし、夢とちりても、其のれもかげに、いつの戀ひ草、冬枯れて、鴛鴦の浮寢に
あはれを添へつ。しぐれ〳〵し袂も朽ちて、いまは浮世に、袖なし羽織。

擬人法。

擬人法の二種。

謠曲、淨瑠璃の所謂道ゆきぶりの文などには、此の弊多きが如し。

第三、擬人法。無生物、及び、吾人以外の生物に、吾人の如き體貌、情想、意識、行動を附與して、吾人の如き心裡上肉體上の性質、吾人の如き生命あるが如くに叙する法たり。例へば、「花が笑みの眉を開く」「怒る嵐」「鳥悲しむ」「小川の水がさゝやく」などいはむが如し。もと、やはり類似に出でたる轉義にして、花の咲きたるさま、嵐のはげしく吹くさま、悲しげに鳴く鳥の聲、流水の低き音をたてゝながるゝに、自から吾人の喜び、吾人の怒り、吾人の悲しみ、吾人の私語するに、やゝ似たるふしあるより、これ等無生物、吾人以外の生物を、かく見立てゝ形容したるなり。吾人の生命なき諸物に、吾人の生命を附與して叙す。諸物の狀景は、こゝに、一層活き〳〵として躍動せしめらる。こゝに大に讀者の感情想像力を刺激して、一首の詩想は、大に明かに、大に強く、大に面白く、美感の樂みを與ふるを得。擬人は、類似に基きたる轉義の中にて、最も高尚なるものたり。

此の擬人に、二種あり。第一は、吾人の生命の一部を附與し、第二は、吾人の生命の全部を附與するなり。二者の差異は、唯だ吾人の生命を附與する度の高低深淺に

存するなり。即ち、第一は、無生物吾人以外の生物に、吾人が肉體上、心裡上の一二の性質を附與して、これをしか見立てゝ叙するまでにて、未だ吾人と全く同じき一個の生物としては活動せしめざるなり。第二は、更らに進みて、全く吾人と同じき靈性活動ある者となして、しか見立てゝ叙するにあり。

例へば、第一の例は、

春老いて、花はやつれぬ。
山河默して、月ひとり語る。（軒ばの木ずゑは、枯風に恨み、床下の虫は、寒霜にむせぶ。）
家路まで送らむ月の影ながら、別れてかへる心地こそすれ。（景樹）
今日といへば、もろこしまでも行く春を、都にのみと思ひけるかな。（俊成）
今はとて、田の面のかりも、うちわびぬ、ねぼろ月夜の明ほのゝ空。（寂蓮）
影とめし露のやどりを思ひ出でて、霜にあととふ淺茅の月。（雅經）
はれ曇る影を、都にさきだてゝ、しぐるゝと告ぐる山の端の月。（具親）
秋深き淡路の島のあり明けに、傾く月を送る浦風。（慈圓）

黄昏の軒端の荻に、ともすれば穂に出でぬ秋の下にことゝふ。（式子內親王）
時鳥さつきみな月わきかねて、やすらふ聲ぞ、空にきこゆる。（國信）
五月雨の月はつれなきみ山より、獨りも出づる時鳥かな。（定家）
時鳥、まだうちとけぬ忍びねは、來ぬ人を待つ我のみぞきく。（白河院）
恨みずや、浮世を花の厭ひつゝ、誘ふ風あらばと思ひけるをば。（後成女）
岩間とぢし氷も、今朝はとけそめて、苦の下水、みちもとむらむ。（西行）
影やどす露のみしげく成りはてゝ、草にやつるゝ故里の月。（雅經）
春また暮れて、山河惱みて、夕雲とはに愁色を染む。（帝國文學九卷五號詞藻欄）

圏點を附したる詞を見よ。皆無生物、或は、吾人以外の生物に、吾人の性質を附與して叙せるなり。

第二の例は、

忘るなよ、田の面の澤を立つ雁も、稻葉の風の秋の夕ぐれ。（良經）
思ふどち、そことも知らず、行きくれぬ。花の宿かせ、野邊の鶯。（家隆）
花もまた別れむ春は思ひいでよ、咲きちる度の心づくしを。（段富門院大輔）

擬人法を用ふるにつきての注意

昔思ふ草の庵の夜の雨に、涙なそへそ、山時鳥。（俊成）

郭公、なほ一聲は思ひ出でよ、老ひその森の夜半の昔を。（範光）

暮れはてぬ、歸へさは送れ、山櫻、誰が爲めに來て、まどふとか知る。（俊頼）

名にし負はゞいざ言問はむ、都鳥、わが思ふ人のありやなしやと。（業平）

あかなくに、まだきも月の隱るゝか、山の端にげて入れずもあらなむ。（仝人）

吾人以外の事物に忘るなよ花の宿かせ咲きちる度の心づくしを思ひ出でよ涙なそへそ昔を思ひ出でよ歸へさは送れいざ言問はむにげて入れずもあらなむなどと呼びかけたり。これ、全く吾人と同じ性質生命を有するものと見立てゝかく言へるなり。

此の擬人法は、感情の深くも強くも動きたる時に、自から激して、言語の上にあらはるゝものたり。彼の子供などが、誤つて路上の砌につまづくや、怒りて或はこれを鞭ち、或はこれを蹴りなどす。小供にあらぬも人は屢かゝる時に、これを罵り責む。これ、即ち、感情の激して一時其の石などの無生物なるを忘れて、吾人の如き性質生命ある物の如く取り扱ひたるなり。時鳥に向ひて、涙を添へて呉れるなとたのむ、もと堪へぬ悲感の餘りに、かく心情の激して、吾人に同じからざる時鳥なる身を忘れて、かくは呼びかくるなり。かゝる例は、吾人の日常に多かるべし。擬人の修飾法の本は、もと、此の吾人が心情の激したる時の動作より來たる。故にこれを巧みに用ふる時は、やがて激したる感情の聲なる韻文には、極めて詩趣を與ふるなり。

さるが故に、また猥りにこれを用ふべからず。これを濫用するは、徒らに其の技を弄するのみにて、つひに浮華纖弱に落つるをまぬかれず。また、餘りに長く續くべからず。讀者をして倦ましめ、且つ、其の効力を失へばなり。また程度にはづれたる突飛なる擬人を用ふべからず。讀者をして尤もらしく感ぜしむる範圍内に於いてすべし。

聲はして涙は見えぬ時鳥、わが衣手のひづをからなむ。（古今集）

鳥のなくねに涙をいふは、もとよりよけれど、我が袖のひづをからなむなどは、尤もらしく聞えず、強ひたる擬人なり。誰れなりけん、今の若き人の文に、小川の流れに擬人を用ひて。

衣を洗ふ少女の腕に、可愛い唇を當てゝ、少女の氣のつかない樣に、密と接吻する。

などいふを、見たる事あれど、流水に對して、唇接吻するなどの擬人は、決して穩當なるものにあらず、滑稽なり。近時、西洋の詩文の弊をまねて、求めてかゝる强ひたる擬人をなす人あり。かゝる擬人の通弊は、西洋の修辭法に於いても、つとめて戒むるところたる、を、新たに學ぶは、恐ならずや。決して、讀者の感情想像を刺戟して、一首の詞をして適勁ならしむべき擬人法にあらざればなり。

第四、諷喩。一の事物をあらはすに、全く他の事物とたとへていふ法なり。實際に我が言はむとする事物を、直接にうれと言はずして、全く他の事物をかりてあらはすなり。似たる事物をのべて、その裏面に眞意を寓せしめて、つぐる法なり。表は假りに設けたるにて裏面に實意を寓するなり。例へば、

牛の子に踏まるな、庭の蝸牛、角あればとて、身をな賴みそ。（寂蓮）

表面の意は、庭の蝸牛に對しての訓戒なり。蝸牛よ、汝は角あれど、決してそれをたのみてほこる勿れ。自分の身のほどを知らず謹まずして角もなき牛の子に踏み殺さるゝやうの事なかれと敎へたるなり。されど、實際の寂蓮の思想は、蝸牛に敎へたるにあらずして、人をこそ戒めたるなれ。僅の才力ありとて、それを賴みにして、ほこる勿れ。身のほどを知りて守らざれば、必ず過ちあらむといふ意を、蝸牛にことよせて、訓へたるなり。

小補公（大石千別）

立ちよる蔭とたのみつる　楠の若枝も、下折れて、
一日一日に吹きよわる　南の風ころ、悲しけれ。（今樣歌）

斯くの如き種類も、また、此の諷喩の中の一種たり。

場合により、事物によりて、かゝる諷喩のいひかたは、直接に我が眞意を發表したるよりは、一層深き趣味を得る法たり。修身道義的の事は、直接に表出しては、多く詩趣なし。故にこの方法を用ひて、面白きこと多し。世をのゝしる、人を嘲る我が不平をのぶるなども、直接にうちつけては、大人しからず、品下り、厭味をれぼゆること多かるべし。かゝる場合には、面白き法たり。直接に表出しては、所謂身も蓋もなしといふ如き場合、或は、直言强く言ふ能はざる場合には、これによりて、裏面に語

風喩を用ふるにつきての注意。

たるも、妙なるべし。

底ひなき淵やは騒ぐ、山川の淺き瀨にこそ、あだなみはたて。（素性）

紫の一本ゆゑに、武藏野の草はみながら、あはれとぞ見る。（業平）

世の中に、麻はあとなくなりにけり、こゝろのまゝの蓬のみして。（泰時）

萠え出づるも、枯るゝも、同じ野邊の草、いづれか秋にあはて果つべき。（妓王）

物いへば、唇寒し、秋の風。

今日になり、菊つくらうと思ひけり。

これ等は、皆面白き風喩にて、直接に其の實意をのべたらんよりは、慥に一層の趣味を得たりと言ふべし。

此の法を用ふるにつきて、常に注意すべきは、第一に、假りに表面に語たるところは、成るべく興味の多からむやうにつとむべし。表面にいふところも美にして、裏面の實意のめてたきに伴ふやうにすべし。而して、第二に表面にいふところは、よく裏面の實意に適合するやうにつとむべし。よく適合して、明に其の裏面の寓意の讀者の想像力に了解せらるゝやうにせざるべからず。若し寓意のやゝ曖昧になる怖れある時には、多少の說明を附するをよしとす。短き一例を、有名なる俗謠に取れば、

一種しあれば、岩に松さへはゑるぢやないか。思うて、添はれぬ事はない。

次には、其の寓せしむる實意は、なるべく立派にして、價値の多き詩想ならざるべからず。然らざれば、讀み去つて後に味ふべき裏面の美の存ぜざればなり。

以上、明喩、暗喩、擬人、風喩の四種は、皆、類似に基きたる修飾法たり。

換喩。

第五、換喩。之は、一の事物の名の代りに、それに關係ある他の事物の名を用ふるなり。例へば、櫻花といふ代りに、花といひ、「書をよむ宿」の代りに、「書を讀む窓」といひ、「幾年變はらず」といふ代りに、「幾春秋變はらず」といひ、無數の數の代りに八百萬といふ如き類なり。一の事物の代りに、他の名を用ふるなれど、前にあげたる四種の如く、二物の類似の點によりて、相かへて用ふるにあらず。二物の間に連續せる關係あるによりて、相かへて用ふるなり。櫻花は花の一種なり。窓は宿の一部なり。春秋は年の一部なり。八百萬は無數の數の一部なり。かくの如き全體と一部といふ連續せる二者の關係によりて、相換へて用ふるなり。其の全體と一部といふ

換喩の種類

關係の性質には、自から種々の異るあるべし。こゝにあげたる花と櫻花との關係は、一屬と其の中の一種との間にあり。宿と窓との關係は、全體と其の中の一部との間にあり。八百萬と無數の數との關係は、定數と不定數との間にあり。

斯くの如く、其の關係の性質は、自から異るものあり。されど、これを廣き意にて解する時は、皆、全體と一部との關係に一括するを得べし。

さて、此の換喩の方法につきて、なほ區別する時は、通例左の數種あり。

一、全體の名と一部の名とを、互ひに相換へて用ふ。例へば

更衣

いつしかと、今日ぬぐ袖は、花の色のうつればかはる心なりけり。（定家）

これは、衣の代りに袖を用ひたり。袖は衣の一部なり。

昔見し妹が垣根は、あれにけり、茅花まじりの蓬のみして。（徒然草）

これは、住居の代りに、かきねを用ひたり。かきねは住居の一部なり。以上の二例は、全體の代りに、一部の名を用ひたるなり。

また、これに反して、一部の名の代りに、全體の名を用ふる事もあり。これには、よき例を、今あげがたけれど、強ひて示せば、

戀ひしくば、形見にせむと、わが宿に植ゑし秋萩、今さかりなり。（赤人）

庭といはずして、直ちに宿といふ。此れ等の類ひは、自から此の法に成れるものならむ。庭は住居の一部といふべし。なほ通俗には、この二者の例は、日常見聞せらるゝ所なるべし。

二、一屬の名と其の中の一種の名とを、互ひに相換へて用ふ。例へば、

吉野の行宮より妹の許に

春は花、秋の紅葉を、見よし野の、山のかひある住居とを知れ。（吉野拾遺）

この花は櫻花なり。櫻花の代りに花といひたり。櫻花は、花の屬の中の一種なり。

錢を多くつみ得たる時に

たちちねのあらましかばと思ふには、寶を見ても、ねゞなかれける。（芦庵）

錢の代りに、寶を用ひたり。金錢は、寶の中の一種なり。これ等は、種の名の代りに屬の名を用ひたるなり。

これに反して、屬の代りに、その中の種の名を用ふる事あり。これは、歌には極め

て多し。唯だ虫とか草とか木とかいうてもよきところに、殊更にきり〴〵すとか茅草とか、槇とか、殊種の名を用ふる事は、歌に多きなり。これ、其の情景に最も適したる物をあげて、明かに強く其のけしきを浮ばしめむとすればなり。彼の寂蓮の

村雨の露もまだひぬ槇の葉に、霧たちのぼる秋の夕ぐれ。

の槇の如きも、然り。山家を見せむ爲めに、單に木の屬名を用ひずして、槇の殊種を用ひたるなり。前にあげたる徒然草の歌も、宿の荒れて草ふかきをいふなれば、茅草のみには限らざるべし。さるを、殊に茅草を用ひたるは、かゝる荒れたるさまに適したる草なればなり。

三、種類の代りに、其の中の一個の名を用ふ。例へば、

朧月夜(今樣)

れぼろ月夜の夕ありき、梅が花ならぬ方もなし。

笛の音ゆかしみ停むを、さのみな咎めそ、翁丸。

翁丸といふは、清少納言の枕草紙に見ゆる犬の名なり。その名を、こゝに、犬といふ代りに用ひたるなり。歌聖といふ代りに人丸赤人の名を用ひ、英雄といふ代りにナポレオン秀吉の名を用ひて、「歌よみは多けれど、今は人丸赤人ぞ少き」。「彼は明治の秀吉なり」。などいはむは、皆此の法によるなり。

四、一物の名の代りに、其の物の原料の名を用ふ。例へば

まとふ荒栲のやつれても、心の錦はうるべき。

などいふ時の荒栲なり。荒栲は布なり。衣の代りに布を用ひたるは、此の法たり。布は衣をつくる原料たればなり。

五、不定數の代りに定數を用ふ。例へば、

百まで、わしゃ九十九まで共に白髮のはゆるまで。

月見れば千々にものこそ悲しけれ、わが身ひとつの秋にはあらねど。

これは、説明するにも及ばざるべし。

以上、すべて換喩の修辭法の効力は、同じく明晰と遒勁とを增すにあり。ここに普通に用ふべき物名にといまらずして、其の場合、其の情景によく適したる他の名を、それに關係ある事物の間に求めて、殊更にこれに換へ用ふ。殊に適したるを用ふる故に、詩想はこゝに一層明かに、情景は一層強く動き詩趣は一層深きを得るな

換喩を用ふるにつきての注意。

り。さて、此の換へ用ふる名は、其の關係の著明なるものを選ばざるべからず。これ換喩を用ふるにつきて、必ず注意すべきところなり。

第六、提喩。これも、前の換喩と同じく、二物の關係に基きたる修飾法たり。事物の名の代りに、これに關係ある他の名を用ふるなり。例へば、老年をよぶに、白髮を用ひ、小さき子どもをいふに、うなゐ子とよび、國民といふ代りに、國とのみいふ如し。老年は白髮の原因にて、白髮は老年の結果なり。故に、この二者の關係は、原因結果なり。皆髮うなゐは、小さき子どもの頭髮の狀態なり。皆髮は小さき子の屬性ともすべし。故に、此の二者の間の關係は、實物と屬性なり。國民は國の中に含まれたるものなり。故に、此の二者の間の關係は、含有せるものと含有せられたるものとにあり。提喩も、かくて關係ある名を換へて用ふるなれど、其の法の基礎となる關係は、やゝ換喩のとは性質を異にす。換喩のは、せんじつむれば、全體と一部分との關係に終るべきは、前にいへる如し。されど、提喩のは、これを以て、其の關係を說く能はず。例へば、原因と結果、つひに全體と一部分にはあらざるなり。換喩のは數理的にして、提喩のは道理的なり。

提喩の第一種。

提喩の第二種。

提喩の法にも、關係の性質によりて、種々あり。

一、含有せられたる物の代りに、それを含有する物の名を用ふ。例へば、

荒れたる宿に紅葉ちりたるを書ける書に

故郷は、ちる紅葉に埋れて、軒のしのぶに、秋風ぞふく。（俊賴）

この故郷は、ふるく荒れたる宿の代りに用ひたるなり。宿は里の中に含有せられたるものなり。また、

世の中は、とてもかくてもなにしこと。宮も藥屋も、はてしなければ。（蟬丸）

網引する舟の夜寒を、身にしめて、寢られぬ妻や、衣うつらむ。（知紀）

などの宮藥屋舟も、此の提喩なり。富貴の人、貧賤の人、舟に乘り居る人の代りに用ひたるなり。

二、主體の代りに、其の物の符號或は屬性の名を用ふ。例へば、

瑕子內親王の雉髮したまひし時

いかで猶ほ、我れも浮世をそむきなむ。羨しきは、墨染の袖。（尊良親王）

墨染の袖は、法師の代りに用ひたまへるなり。墨染の袖は法師の符號とすべし。

其の他、種々の提喩。

また、

住みわびぬ。今は限りと、山里につま木こるべき宿もとめてむ。（業平）

とんぼつり、今日は何處まで行つたやら。（千代女）

業平のは、山人の身に易ふるに、つま木こるべき宿を以てし、千代女のは、子供をよぶに、とんぼつりといへり。つま木をこるは、山人の常の所業。とんぼ釣りは子供の必ずする遊びなり。一は山人の、一は子供の屬性とすべし。屬性の名を以て、其の主體に易へたるなり。なほ、武士武家をよぶに、弓矢とる身、弓矢の家などいひ、文學に筆、兵力に劍を易へ。用ふるなど、其の類少からず。山陽の筑摩河の詩に、

嘗郤明使壯本朝　豈與恭献同日語

足利義滿といふ代りに、義滿の諡なる恭献を用ひたる如きも、此の中に入るべし。

其の他、原因の代りに結果を用ひ、製作せられたる物の代りに製作者の名を用ふるなどあれど、韻文の上にはさまでいふべき要なければ、略きぬ。これ等、提喩の修飾法の目的も、喚喩に異ならず。一の事物をよぶに、これに關係ある著しき他の名を代用して、明晰遒勁を求むるにすぎず。

過稱の修飾法の原理。

第七、過稱。一事物を描くに、其の實際よりも殊更に大きくも小さくもいふ法なり。例へば李白が秋浦歌に「白髮三千丈緣愁似個長」といへる如し。白髮の三千丈とは、いかにも大袈裟の語ならずや。實際の度を大にはづれたる言ひ方とすべし。然れども、もと吾人の感情の深くも強く動きたる時、やがて激したる時には、吾人の言語行動は、自から普通の軌道を超ゆるものたり。過稱は、此の原理を應用したる法なり。即ち其の實際よりも殊更にはづれて、意外なる表出をなして、我が激昂せる感を、強くひゞかせ、大に讀者の感情を刺激して、深く同情をよせしめむとするなり。

力拔山兮氣蓋世、　時不利兮騅不逝、　騅不逝兮可奈何、
虞兮虞兮奈若何。

項羽が垓下末路の悲歌。拔山蓋世の句、遒勁なる過稱、誠に心地よくおぼゆるにあらずや。眞に、これ、拔山蓋世の豪傑が非運の悲境、堪へがたき慷慨の情、自から溢れ出てたるの激語。而して、悲壯の感、讀者の實に同情に堪へざるあるを得たるなり。過稱の修辭法の原理、過稱の修辭法の効力、この項羽この一首の作によつて、自から

悟らるゝものあらずや。過稱は、つひにかゝる激語に過ぎず。屢前に述べたる如く、詩は吾人の感情の物にふれて、激發して出づる聲なれば、普通の道理の眼より見るばかりの實際の境にては、不可なり。多少實際に超過する、必ず詩に必要なる法則とす。過稱は、この法則を殊更に甚しく用ふるに過ぎず。

第一篇に評し置きたる左の二首の優劣、また、一は此の過稱を用ひたると用ひざるとにあり。そは

津の國の難波の春は、夢なれや。芦の枯葉に風わたるなり。（西行）

津の國の難波わたりを、來て見れば、茂りし芦も、霜枯れにけり。（慈圓）

西行のは、春色の時の間に跡もなくかはれる感に激して、夢なれや、と大袈裟に言ひたり。即ち、過稱の法に出でたり。慈圓のは、こゝに出でざりき。西行のは、これが爲めに、感一層はげしく動くを得たるなり。

さては、あの、月がないたか、時鳥。

といふ發句は、後德大寺左大臣の

時鳥なきつる方をながむれば、唯だ有りあけの月ぞ殘れる。

の歌をよみかへたるものなれど、本歌以外に、別に變はりたる趣味を得たるは「月がないたか」との思ひきつたるいひかたにあり。一聲、時鳥の疾く去つて、影は見えぬ月の空をなかめて、唯だ月が殘るといはずして、一層烈しく激して、「月がないたか」といへるが、おもしろきなり。これも、一種の過稱ならずや。なほ、二三の例をあぐれば、

夏の夜は、臥すかとすれば、時鳥鳴く、一聲にあくるしのゝめ。（貫之）

昨日こそ、さ苗とりしか、いつのまに、稻葉そよぎて、秋風の吹く。（古今集）

君が世は、千代に八千代に、さゝれ石の、岩ほとなりて、苔のむすまで。（仝上）

天地に、少し、至らぬ、益荒雄と、思ひし我れや、雄心もなき。（萬葉集）

大空は、梅のにほひに、かすみつゝ、くもりもはてぬ春の夜の月。（定家）

秋はたゞ、今宵一夜の名なりけり、同じ雲居に月はすめども。（西行）

春はまた、花の都となりにけり、櫻にほふみよし野の山。（俊成女）

櫻色の、庭の、春風、跡もなし。訪はばゞ人の、雪とだに見む。（定家）

斯くの如く巧みに大袈裟にいふは、詩の上に極めて必要の修飾法たり。されど、こ

いに注意すべきは、其の大袈裟の度なり。讀者の想像のゆるす範圍内を越ゆべからず。いかに實際を出づともよけれども、自然にして尤もらしくきこゆる境にとどむべし。決して此の以外に走るべからず。然らざれば、滑稽にもなり、不明瞭にもなり、過稱の目的に反す。例へば、

しきたへの枕の下に海はあれど人をみるめは生ひずぞありける。（古今集）

しきたへの枕ながるゝ涙川みをはやながら見る夢ぞなき。（新千載集）

夢にだに見ばやとすれど、しき妙の枕もうきて、いとゞねられぬ。（續後拾遺集）

の如きは、皆、過稱の程度を越ゆて滑稽に落ちたり。いかにはげしく落涙すればとて、枕の下に海がある、枕が流るゝ、枕も浮くとは、餘りに不自然にして、尤もらしからずして、馬鹿々々しきにあらずや。斯くの如きは、大に嫌ふなり。初心の人は、大袈裟に言へば、よきやうに考へて、強ひて過稱をのみ用ふる弊あれど、大に戒むべき事なり。よく過稱の原理を知りて、自然に出てざるべからず。また、餘りにありふれたるも、面白からず。過稱の度を越ゆる時は、滑稽になるを言ひたり。故に、過稱は、また可笑の興味を得るに用ふべし。

貶稱の法と、誹諧の趣味。

第八、貶稱。これは、過稱の反對にて、事物を殊更に小さく落していふ法たり。例へば、「賢者の語なり」といふ代りに、「田夫野人の語にあらず」といひ、「尊き方なり」といふ代りに、「石瓦の身にあらず」といふが如き類なり。事物を、其のまゝに言はずして殊更に輕く小さき語を用ふれど、かくて、反つて其の意を遒勁ならしめ、感を深からしむるものあるなり。此の法の一層烈しくなりたるは、めてたく貴きものを、極めて卑近に描く事をす。詼諧の趣味に富みたるものなり。獨山の狂歌の中に、

世の中に、かほどうるさき物はなし。文武というて、夜もねられず。

竹林は、やぶ蚊の多き所とも、知らでうかゝ遊ぶ生醉。

千金の名高き月の雲間より、せめて一二分もれ出てよかし。

阿保親王第五ばん目のむすこ株、すみ田川原を、ひとりぶらつく。

樂翁公の文武の諭へを、蚊の鳴き聲にいひおとし、めでたき仲秋の月を、金錢にかけていひたとし、有名なる歌仙業平は、隅田川原のぶらつき男とうつされ、竹林の七賢は全く生醉となさる。狂歌なれば、品はなけれど、一種の詼諧の趣を得たるにあらずや。

反稱。

反稱の法と諷刺詼諧の趣味

第九、反稱。これは我が言はむとする意に全く相反したる詞を用ひて、而して其の表裏の明白なる反對により、其の眞意を一層强くひゝかせむとする法なり。例へば、

櫻の花の咲けりけるを見にまうて來たりける人に、詠みてつかはしける。

わぎやどの花見がてらに來る人は、散りなん後ぞ、戀ひしかるべき。（躬恒）

花見がてらに訪へる人なり。花に思ひいでて僅にとへるばかりの薄情の人花の散りなん後は、最早我れを忘れはつるならむとの眞意なり。それに對ひて、散りなん後は戀ひしかるべきと言ひたるは、反稱なり。かくて、正面より露骨に言はずして、人の薄情を暗に諷したるなり。古來、此の歌の意を、花見がてらに來る人を、我れより戀ひしく思はむ意に解きたれど、そは謬見ならむ。これは、先方の人が戀ひしく思はむといへるにて、反稱に見るこそ、面白けれ。

反稱は、多く暗に刺衝する場合に用ひらる。沙翁の戲曲シーザルの中に、アントニーが羅馬の市人に對ひての演說の語中に、シーザルを殺したるブルータスを評して、Brutus is an honourable man と言ひたるは、刺衝し得て痛快なる反稱と稱せらる。反稱は、また、詼諧可笑の趣味の爲めに用ふべし。韻文の例にはあらねど、

何んと、廣いお座敷だのう、まづ草履をぬいでから大約小一里も歩いたやうだが、歸へりに道が知れやうか。（八笑人）

反稱の用法。

反稱を用ふる時は、表面の語意は、全く裏面の眞意とは、相反せるなり。故に、裏面の眞意の、直ちにさとられ難き、これ恐るべき點なり、されば、よく其の場合に適應して、自から文勢によりて、必ず讀者の眞意を看破せらるべきやうに注意して用ひざるべからず。また、一篇の中に、度々用ふるは、妙ならず。

美稱。

第十、美稱。これは一種の反稱なり。吾人に恐怖嫌忌の念を起さしむる事物の場合に、殊にこれを避くるいひかたをなす法なり。例へば、人の死ぬる事を眠るといひ、隱るといひ、逝くといふが如く、死ぬる別れをさらぬ別れといふが如し。死は吾人に嫌忌の念を起さしむる故に、これを避けて、露骨に言はざるなり。

以上轉義の修飾法の大略は終りぬ。去つて辭樣の種類に入らむ。

辭樣の修飾法の種類。

重音。

重言。

辭樣の種類

辭樣の說明は前條にいへり。詩の大形に存する修飾法たり。此の中にも、種々あり。

第一、重音。これは、一篇の中に、同じ音を繰りかへし用ひて、聲調の美を得んとする法なり。例へば、

吉野なるなつみの河の河淀に、かも(鴨)ぞなくなる、山かげにして。(萬葉集)

かはづなくかみなびかはに、かげ見えて、今かさくらむ、山吹の花。(新古今集)

さむしろもさゆる霜夜に、夜もすがら遠の里には、衣うつなり。(堀河百首)

時鳥一聲なきていぬる夜は、いかてか人のいをやすくぬる。(新古今集)

かゝる類は、古來の歌には少からず。前篇の聲調の條にいへる所謂押韻したる如き類なり。この法を用ふるには、自から自然に出でたるやうに、心がくべし。強ひて耽りて、わざとめきたるは、反て聞き苦し。

第二、重言。これは、一篇の中に、同じ語句を繰りかへし用ひて、詞想の發表の切

重言の原理、及び其の用法

に心地よきを得むとする法なり。例へば、

月夜よし夜よしと、人につげやらば、來てふに似たり、待たずしもあらす。

難波津に咲くや此の花、冬ごもり今を春べと咲くや此の花。

足曳の山の雫に、妹まつと、我が立ちぬれぬ、山の雫に。

八田の一もと菅は、一人をりとも、大君しよしときこさば、ひとり居りとも。

(仁德記八田若女郎の歌)

君が爲め、木曾の山路、雲わけて、また去ぬらむか、木曾の山路。(芦庵)

召せや、召せ、夕げの妻木はやく召せ。歸へるさ遠し、大原の里。(景樹)

來るか來るかと、川裾見れば、河原柳の音ばかり。(俗謠)

西洋の詩には、一行、或は、二行、三行の長きをも繰りかへすあり。近時の我が新體詩にも、これにならひたる、少からず。例をあぐる紙數あらねば、世の新體詩集に就きて、見られよ。

內に、激したる情あり。こゝに於いて、自から餘りて繰りかへさるゝなり。されば、かゝる重言は、もと、その感情詩想に應じて、自から斯く繰りかへされ、而して、其の

感の一層切なるを得る法なれば、徒らに辭句の數の都合などより、猥りに用ふべきにあらず。初心の人には、往々此の弊あり。

また此の重言の中には、單に一首の聲調の流麗を得んゝ爲めに、用ひらるゝ例あり。而して、その繰りかへし方は、種々あり。

伊香保のや伊香保の沼の、いかにして、戀ひしき人を、今ひと目見む。（素性）

春霞立てるや何處、みよし野のよし野の山に、雪は降りつゝ。（古今集）

あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ、我が立ちぬれぬ、此の戸開かせ。（催馬樂）

いざわれを人な咎めそ、大船のゆたのたゆたにもの思ふ頃ぞ。（古今集）

流麗なる調を得たるにあらずや。されど、かゝる技は、餘りに耽りて用ふべからず。調は更に輕くなり、且つ聞きにくきに至るべし。即ち、

あしびきの山の山守もる山も、紅葉せさする秋は來にけり。（後撰集）

の如きは、遂に首肯する能はざるにあらずや。

古來の短歌の中に、各句に同じ詞を巧みに重ね用ひて、

思ふ人思はぬ人の思ふ人、思はざらなん、思ひ知るやと。（後撰集）

重形。

同形の句を重ねたる例及び、其の種類。

心こそ、心をはかる心なれ。心のあだは、心なりけり。（奥儀抄）

などよめる姿のものあり。奇なりといへども、つひに重言の技をもてあそびたる戲詩といふべきのみ。まじめなる韻文にまなぶべきものにあらず。

第三、重形。これは、同じ形の語句を重さぬる法なり。同じく文勢の遒勁、聲調の流麗を得るの修飾法とす。短きは、單に同形の一言、一句を重さね、長きは、同形の行をも節をさへに重さぬるものあり。例へば、

秋は來ぬ、紅葉は宿にふりしきぬ。道ふみわけて、とふ人はなし。（古今集）

日もくれぬ、人もかへりぬ、山里は峯のあらしの音ばかりして。（後拾遺集）

秋も秋、今宵も今宵、月も月、ところもところ、見る君も君。（仝上）

五月山、卯の花月夜、時鳥。きげどもあけず、またなかんかも。（新古今集）

親は他國に、子は島原に。櫻花かや、散り〳〵に。（俗謠）

時雨けり、走りてにけり、晴れにけり。（惟然坊）

右の如きは、皆同形の句を重さねたるなり。而して、其の重さねたる句は、皆、一首の詩想の成分たり。單に所謂形容に用ひたる句にはあらざるなり。されど、

同形の行たる重されたる重形及びその種類。

櫻三月、菖蒲は五月、　娘ざかりは十五六。（俗謠）

花をれく露、小笹の霰、　こぼれやすきは、我が涙。（仝上）

の如きは、主想の發表の助けに引き來たれる例の如きものにて、所謂形容に用ひたる重形の句といふもよからむ。

長きは、行をも節をも重さぬる事す。例へば、

花橘も匂ふなり。　軒のあやめもかをるなり。　夕ぐれさまの梅雨に、山時鳥名のりして。（今樣）

松の操（稅所敦子）

月の桂も手折るべし。　ことばの花もかざすべし。

月の桂は手折るとも、　言葉の花はかざすとも、

時雨にそまず、降りつもる、　雪にたわまぬ常盤木の

松の操を守らずば、　世に立つかひやなからまし。

鹿笛の一節（正岡子規）

萩の花ちる草むしろ、　月にあかせしむつ言も、

小笹が原の露の床、　雨に忍びしかね言も、

松のみどりの、紅葉して、　山、海となる時もあれ、

かたみに心かはらじと、　契りしことも、なか〳〵に、

思ひます穂の糸薄、　亂れくるしき此の頃よ。

稅所敦子と慈圓の今樣とは、一行の同形を重さねたり。有名なる太平記の東下りの條、「落花の雪にふみ迷ふ片野のみ野の櫻狩り、紅葉の錦きてかへる嵐の山の秋のくれ」といふも、此の二行の重形なり。なほ三行の同形、四行の同形、一節の同形をも重さぬるあり。頗はしければ、推して知らるゝを望む。時には、一節を皆仝樣の重形に組み立て、或は、重形を混用する事もあり。仝樣の重形の一節は、今の新體詩集に多く見ゆ。混用せる重形は、萬葉集の山上憶良の貧窮問答の後段の一節は、好き例たり。ついて見られよ。

此の長き重形の中にも、また、單に主想の發表を助くるにあげたる例の如きものあり。例へば、

歲暮の一節（中村秋香）

重形の用法につきての注意

花に宿れる春の鳥、千草に眠る秋の蝶、
結びもとめぬ夢の間に、はや一歳は過ぎにけり。

なほ萬葉集の人丸の長歌を見よ。其の序歌の中には、全く後の主想をいひ出だす爲めの重形の句、幾つもあり。これも、長き故にあげず。古來所謂對句といふものは、皆、此の中に入るなり。重形を適度に巧みに用ふる時は、聲調の流麗、語句の優美を增すはもとより、また文勢をあぐるを得。されどすべての修飾法の如く、また、よく自然に出でしやうならざるべからず。强ひて用ひて、わざとらしく、餘りに多くもちひて、うるさくなれるは、人をして厭はしめ、また文體をして浮華輕薄纖弱に失せしむ。文選の四六駢麗の文の如きを、一考せよ。其の弊は、いふまでもなかるべし。

對偶。

對偶の原理。

第四、對偶。反對の事物語句を相並べて、其のちがひより生ずる作用によりて詩想の發表を、明晰に遒勁ならしむる法なり。例へば、紅葉と青松とを對照す。紅はいよ〳〵紅に、青はいよ〳〵青く感ぜらるべし。對偶の原理、これに同じ。彼の有名なる「一將功成つて萬骨枯る」の句は、其の感慨、眞に心地よく强くあらはれたるにあらずや。これ一は、一將功成ると萬骨枯るの反對せるを、巧みに對照し得たる對偶の妙技に出でたればなり。香川景樹が富士山を詠じたる

群山の高嶺〳〵をつたひ來て、富士の裾野にかゝる白雲。

の如きは、全く此の對偶の法を利用して、作り立てたる歌なり。他山の高嶺をつたひたる白雲、富士に至りては、僅に裾野にかゝる。高嶺と裾野との對照によりて、富士の秀峯の、群山をぬきて天外に聳ゆる高さをあらはしたるなり。なほ絕妙なる對偶の法の存ずる歌例をあぐれば、

大堰川かへらぬ水に影見にて、今年もさける山櫻かな。(景樹)

宿かさぬ人のつらさを、なさけにて、ねぼろ月夜の花にねし哉。(蓮月)

霜まよふ空にしをれし雁がねの歸へる翅に、春雨ぞふる。(定家)

情ある人に、一夜の宿かりて、なるゝもつらし、明日の故郷。(契冲)

故郷の玉きの宮は、あれにけり、檜原の風の音ばかりして。(景樹)

君が爲め、惜しからざりし命さへ、ながくもがなと思ひけるかな。(後拾遺集)

夕雲雀、芝生に落ちて聲やめば、山よりのぼる春の夜の月。(契冲)

かへらぬに今年も咲ける、つらさになさけ、霜まよふに春雨ぞふる、玉きの宮に檜原情けにつらし、一夜の宿に明日の故郷、惜からざりしにながくもがなと思ふ、芝生に落ちてに山よりのぼる、巧妙なる對照、一首絶唱の美、實に此の對偶に存すといふも過稱にはあらざるべし。

對偶の用法。

佛も、昔は凡夫なり。我れらも、遂には佛なり。

三身佛性具しながら、へだつる心のうたてさよ。（今樣）

年々歳々、花相似たり。歳々年々、人同じからず。

言を寄す、全盞の紅顏子。憐むべし、半死白頭翁。（劉廷之）

四夫にして百世の師となり。一言にして天下の法となる。（歐陽修）

これ等も對偶の妙を知るべき一例なるべし。對偶は實に重んずべき修辭法たり。精細に古來の名吟を檢する時は、一種の對偶を有せざるは、蓋し少かるべし。されど、此の對照も、殆更に此の技の爲めに、これを用ふるやうになり、わざとめくに至りては、反て、讀者をして倦ましめ、また、浮華輕薄に失すること、重形の濫用と同じ。彼の四六駢麗文の如き、此の弊少からず。漢詩の長きにも、往々この嫌ふべきふしあり。

轉裝。

轉裝の原理。

第五、轉裝。これは、語句を並ぶるに、普通の順序に反きて、殊更に其の位置を轉倒せしむる法なり。感情の激昂する、吾人のもののいひ方は、自からこゝに狂うものみならず、聲調上の規律少く變化に乏しき、我が韻文にありては、聲調の平板單調に落つるを避くる上に、大にたよるべき法たり。例へば、

心かはりける女に、人に代りて（清原元輔）

ちぎりきな、かたみに袖をしぼりつゝ、末の松山波越さじとは。（古今集）

これ、普通の順序に從はゞ、ちぎりきなの語は、一首の末にあるべきなり。これを轉倒せしめて、冒頭に置きたるは、此の轉裝法なり。激昂せる情、自からこゝに出づべきなり。かくまでに固く約束したるものをと思ふ心の激昂、ちぎりきなと冒頭に強くうち出てたるなり。さて、誠に情あはれに、感強くひゞかし得たり。若しこれを普通の語句の順序によらば、一首のあはれは、いかでかばかりに聞くを得む。業平が、雪中の山路、惟喬親王の小野の閑居を訪ひての

轉裝の用法。

疑問。

忘れては、夢かとぞ思ふ。思ひきや、雪ふみわけて、君を見むとは。

の如きも、普通の語格ならば、四、五、三、一、二句の順序にいふべきなり。されど、餘りに變はりはてたる世の悲しみに亂れたるの情は、自から此の轉倒に出でて、而して、また自から此の遒勁なるを得たるなり。轉倒は、必ず此の二首の如く、よく自然に出でざるべからず。何にの理由もなくして、決して語數の都合などより用ふべきにあらざるなり。なほ、面白き轉裝の例をあぐれば、

とめ來かし、梅さかりなる我が宿を。うときも人は、折りにこそよれ。（西行）

またや見む、片野のみのの櫻、狩花の雪ちる春のあけぼの。（俊成）

山里は、秋こそ殊にわびしけれ、鹿のなく音に、目をさましつゝ。（宗行）

我が宿は、道もなきまで、荒れにけり、つれなき人を待つとせし間に。（遍照）

かへるさのものとや、人はながむらむ、待つ夜ながらの有明の月。（定家）

人とはゞ、いかにいひてか、ながめまし、君があたりの夕ぐれの空。（良經）

第六、疑問。これは、物を定めて言はずして、殊更に問ひかくる形を用ふるなり。實際に疑ひ問ふべき場合にあらず、既に我が心の中には、定めて言はむとする事を特更にわざと疑問の形にして、いふ法なり。例へば、

君ならで、誰れにか見せむ、梅の花、色をも香をも、知る人ぞ知る。（古今集）

君にあらでは誰れにも見せじと、いはむとするところなり。これを、特更にかく疑問の形になしたるなり。斯くて、一層我が意を強くひゝかさむとするなり。これ疑問の修飾法の目的たり。疑問の形は、種々なるべし。頼政の

今宵、誰れ、ずゝふく風を、身にしめて、吉野の嶽の月を見るらむ。

の如きも、その中なり。この誰れは、既に作者の心の中には、それとさしたる人ある なり。誰れが見て居るだらうかというて、「嗚呼あの人が見て居る事ならむに」といふ深き思ひやりを、あましたるなり。景樹が

猫の子は、鼠とるべくなりにけり。いかにくらしゝ月日なるらむ。

「徒らに暮らしたる事よ」といはむとするなり。これを、殊更にかく「いかにくらしゝ月日なるらむ」と問ひたるにて、慥に無益にくらしたる嘆息は、一層強くあらはし得たりといふべし。

いかにせむ、荻のうは風、吹きよせて。夕まぐれにもなりにけるかな。

の如きも、秋夕の寂情せんすべなき意を、自からやる方なき心より出てて、いかにせむと問ひかけにしたるなり。かゝる類は多し。

第七、漸層法。これは、語句を並ぶるに、其の語勢、其の意義を、一段一段にいよいよ高く、一歩一歩にいよ〳〵強く昂進せしめゆきて、讀者の感情をして、層一層、つひに激甚なる同情の境に入りはてしめんとする法なり。例へば、「彼れは無情の人たり、彼れは惡人なり、彼れは惡魔なり」。といはむが如し。惡人は、無情の人より烈しく、惡魔は、更に惡人より烈し。或は、若し

花は散りぬ。鶯さりぬ。今日はまた友は他鄕へ、春の夕ぐれ。

の如く、輕きを前にし、重きを後にするも、漸層法なり。漸層には、かく同じ事をいよいよ切に重さねると、いよ〳〵切なる事を層一層重さね行くとあり。清少納言が枕草紙に、

秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山のは最と近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなんど飛び行くさへ、哀れなり。況いて、雁などの連ねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてゝ、風の音、虫の聲など、はた言ふべきにもあらず愛でたし。

哀れなりといひ、いとをかしといひ、言ふべきにもあらず愛でたしと重ねたるは、また此の前者の筆法なり。兼好が徒然草に、

其の物につきて、其の物を費しろこなふ物、數を知らず。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

などは、後者の筆法の中なり。なほ、一二の歌例をあぐれば、

日は暮れぬ。人はかへりぬ。山里は、峰の嵐の音ばかりして。（新古今集）

とべばいふ。とはねば恨む。武藏鐙かゝる時にや、人は死ぬらむ。（伊勢物語）

一昨年も、去年も、今年も、一昨日も、昨日も、今日も、わがこふる君。（六帖）

召せや召せ、夕げのつま木、早く召せ。歸へるさ遠し、大原の里。（景樹）

第八、省略。これは、通例ならば費ぐべき詞を、殊更に省きすてゝ、散文の調をはなれ、文勢を強からしめ、また、含蓄の美を得むとする法なり。例へば、

五月山、卯の花月夜、時鳥、きけどもあかず、又なかんかも。

普通にいはゞ、上の三句は、五月山の卯の花月夜になく時鳥よ」といふべきを、かく名

詞のみ並べたり。又、第四句は「一聲きけどもあかず」といふべきを、單にきけどもあかずといひたり。次の句に「又なかんかも」といへるによりて上の一聲の意は、自から聞きとるを得たればなり。かばかりに省略して、毫も不明瞭難澁なるふしなく、聲調に文勢に大に詩韻を加へたるは、巧みなるものにあらずや。助詞や説明辭や接續詞を略するは、韻文に常に見る例たり。前にあげたる後拾遺集の「秋も秋今宵も今宵月も月」の如きは、各句になりといふ説明辭をはぶきたり。

敷島の大和心を、人とはゞ、朝日にほふ山櫻花。（宣長）

ふりつもる高嶺のみ雪、とけにけり、清瀧川の水の白波。（西行）

「朝日にほふ山櫻花を以て答へむ」、「水の白波の高く立つを見れば」といふ意なるをかく略したるなり。

花にあく露、小笹の霰、こぼれやすきは、わが涙。

の如きは、第二の句の次に「その如くに」といふやうなる接續詞を省き、わが涙かなのかなを省きたり。體言にて、歌の末を結びたるには、感動詞を省きたる例、多し。接續詞は、韻文には、大に面白からず。なるべく用ひずして、而して前後の關係を知らしむるやうにするが上手なり。

鴉島の葛飾早稲の新しぼり、くみつゝ居れば、月傾きぬ。（眞淵）

玉川にさらす手づくり、さら〳〵に昔の人の戀ひしきやなぞ。

新しぼりの酒、手づくりの布の事を單にかくいへり。韻文には、かゝる略語も、多く用ひらる。

韻文には、含蓄を愛す。されば、我が心を、末までつぶ〳〵と言ひ盡くさずして、餘情を深く言外にひゞかしむるは、殊にれもしろき省略の法なり。

思ひ立つ鳥は、古巣もたのむらむ。馴きぬる花のあとの夕ぐれ。（寂蓮）

の如きを、其の意のあるにまかせて、「頼む方なき身をいかにせむ」などと、末に言ひ盡くさば、いかに。詩韻は全く消え去るべきにあらずや。それをいはずして、餘情にこめたるは、巧みに省略の妙技を利用したりといふべし。業平の「月やあらぬ」の歌の如きも、實に此の省略の法の長所を、吾人に示し得たるものといふべし。

迫ひしきて、とりかへすべきものならば、よもつ平坂、みちはなくとも。（景樹）

大空は、櫻のにほひにかすみつゝ、曇りもはてぬ、春の夜の月。（定家）